

國語之部
第四七號
王寺尋常小學校
高等



國語科讀方教授細目

卷九・十

尋常科第五學年用

第五十回奈良縣初等教育研究會

TIA442
1J8
N51M

本教授細目は、教材及び教授時数、要旨、教材観、文章、文字及び語句、備考の諸項に分けて記述した。

一、教材及び教授時数

最初に其の教材の題目を記し、其の下に教授時数と配當の月を入れた。教授時数は教材の長短難易を考慮し、大體に於て其の課取扱の最少限度と思はれる時間数を記入し、別に各學期共若干の餘裕時間を捻出して、實際に當つての時間の伸縮に便せんとした。

二、要旨

要旨は、其の教材を客觀的に眺めて「結局此の教材の狙ひ所は、斯ういふ點に落ちつくのだ。」といふ所謂主眼點を簡明に記述することにした。

三、教材観

教材観を確立するには色々な立場があると思ふが、本教授細目に於ては、其の教材の構造を敘し、其の教材を如何に見るべきかを簡明することに努めた。

四、文章

此の項には、先づ文體や文の種類を記し、上下二欄に區分し、主として構想と表現の方面から考究して記述することにした。

- (イ) 上欄(構想又は内容)には、其の文の想が如何に配置され如何に展開してゐるかを簡明に記し、和歌・俳句其の他特

殊な文に於ては、其の内容を略記した。
(ロ) 下欄(表現)には本教材として表現上努力されてゐる點、眞に迫る描寫、表現の妙味、其の他注意して取扱ふべき句章を摘記し、其の吟味すべき點、鑑賞すべき點を示し、且つ文の餘韻・餘情・力・蕈等にも注意し、必要に應じては語法、文法上、留意すべき點、並に發音上注意して取扱ふべき點を指示することにした。

五、文字及び語句

本欄には新出文字(右側に讀假名)及び讀替文字(右側に讀假名左側に傍線)並に取扱上留意すべき文字語句を舉げた。

六、備考

本欄は、之を準備・連絡・參考、及び挿繪の四項に區分して記入した。

(一) 準備——此の項には、地圖・掛圖・圖表・繪畫・繪葉書、遺物・模型・實物其の他教授上必要と思はれる準備物を舉げた。

(二) 連絡——先づ縦の連絡として國語讀本各卷の關係課を舉げ、次に横の連絡として、他教科との連絡教材を記した。但し上學年の連絡教材は便宜上參考欄に舉げた。

(三) 參考——本欄には、該教材の原據・參考文獻其の他教授上參考となるべき事項を記入した。

(四) 挿繪——には簡單な説明を加へ必要に應じては詳細な説明をなし、實際教授の參考に供した。

堀内賢治氏 寄贈

圖書 教学 良大 奈育

7880224038

奈良教育大学附属図書館

國語科讀方教授細目

卷九 卷十

第五學年教材配當表 (卷十九)

月週	第一學期 約十六週 (八週五時間)	第二學期 約十六週 (八週五時間)	第三學期 約十一週 (五週五時間)
四	一 四月 二 春の夜 三 飛行機の發明 四 八幡太郎 五 松下禪尼	一 二三 秋のおとづれ 二 三三 袴垂 三 三三 四ひざ栗毛 四 三三 五空の旅 五 三三 六もくせいの花	一 一五 水師營の會見 二 去 服良と隼信 三 二七 雪の山 四 三六 南極海に鯨を追ふ 五 三六 九バナマ運河
五	六 軍艦生活の朝 七 小さなねぢ 八 松平信綱の幼時 九 馬ぞろへ 一〇 三三 佛法僧 一一 三三 佛法僧	二 一 明治神宮 三 二 霧 四 三 科學博物館 五 三 足助次郎重範 六 三 水兵の母 七 三 南洋だより 八 七 朝顔に 九 八 雨の養老	一 三三 開票の日 二 三三 春淺し 三 三三 熊野紀行 四 三三 汽車の發明 五 三三 「あじあ」に乗りて 六 三三 御民われ
六	一 一五 時間	一〇 六 南洋だより	一〇 三三 「あじあ」に乗りて
計	二二	二二	二二
七	二 共 三日月の影 三 七 圖書館 四 一四 大星の話 五 一五 尤 京城へ 六 一六 手 僕の子馬 七 三二 母馬子馬	一 二 九 柿の色 二 十 稻むらの火 三 一四 朝鮮の田舎 四 一五 水彩畫 五 一六 三三 久田船長 六 一六 三三 母の力	一 一〇 三三 「あじあ」に乗りて 二 一〇 三三 御民われ
計	二二	二二	二二
計	二二	二二	二二

月週	第一學期 約十六週 (八週五時間)	第二學期 約十六週 (八週五時間)	第三學期 約十一週 (五週五時間)
四	一 四月 二 春の夜 三 飛行機の發明 四 八幡太郎 五 松下禪尼	一 二三 秋のおとづれ 二 三三 袴垂 三 三三 四ひざ栗毛 四 三三 五空の旅 五 三三 六もくせいの花	一 一五 水師營の會見 二 去 服良と隼信 三 二七 雪の山 四 三六 南極海に鯨を追ふ 五 三六 九バナマ運河
五	六 軍艦生活の朝 七 小さなねぢ 八 松平信綱の幼時 九 馬ぞろへ 一〇 三三 佛法僧 一一 三三 佛法僧	二 一 明治神宮 三 二 霧 四 三 科學博物館 五 三 足助次郎重範 六 三 水兵の母 七 三 南洋だより 八 七 朝顔に 九 八 雨の養老	一 三三 開票の日 二 三三 春淺し 三 三三 熊野紀行 四 三三 汽車の發明 五 三三 「あじあ」に乗りて 六 三三 御民われ
六	一 一五 時間	一〇 六 南洋だより	一〇 三三 「あじあ」に乗りて
計	二二	二二	二二
七	二 共 三日月の影 三 七 圖書館 四 一四 大星の話 五 一五 尤 京城へ 六 一六 手 僕の子馬 七 三二 母馬子馬	一 二 九 柿の色 二 十 稻むらの火 三 一四 朝鮮の田舎 四 一五 水彩畫 五 一六 三三 久田船長 六 一六 三三 母の力	一 一〇 三三 「あじあ」に乗りて 二 一〇 三三 御民われ
計	二二	二二	二二
計	二二	二二	二二

第一 四月 (全二時)

四月

要旨

絢爛繪巻物のやうに繰り展けられてゆく陽春四月の景趣を味はせ、折ふしの物事に移り變りゆく春を感得させて、兒童の文學的な心を啓培する。

教材

四月——は、春のなかばである。この美しい景趣を桃の花咲く月初から木々の梢の煙る月の終りまで、時の移りゆくまゝ、展開的に敘し、櫻待つ心、花に浮かれる行樂の心、春の幸福感、惜春の情とその折ふしの變りゆく春の心を述べてゐる。かく一瞬の停滯もせず、すく／＼と伸びゆく春の自然の躍動ぶりこそ生氣潑刺、ひたすら成長伸展の一路を辿る兒童の生命そのもの、象徴として、そこに兒童の共鳴共感を喚び起すものが多いであらう。

觀

文

章 (口語體 感想 敘景文)

文字及び語句

備

考

一、月の初

1、春寒と草木の若芽

2、花待つ心

3、氣をもむ天氣

○其の間にも……目に見えてのびて来る。(『日まじに太り』『目に見えてのびて来る』の對句に伸びゆく春の姿があり／＼と窺はれる)

○待たれるものは櫻である。(憧憬の中心)

○せつかくの花……(含蓄の深い面白い表現)

○よく意地わるの雨が降りそゞぐ。(主觀的な感情をこめた表現、雨を擬人化してゐる)

○雨が止んで嬉しやと思ふ夜半から、途方もない南風が吹出して花をいたためつける。(前者は嬉しい氣持、後

季節

二三

軒端

堤

幸

長堤

味は、れる

淡褐色

淡紅

一、準備

實際の花の場所を見せる。春の景趣を描いた繪畫等

二、連絡

讀本卷一(1) サクラ
リ 卷三(1) 春が来た

二、月のなかば

1、花盛りと行樂の歡び

2、春の日長

3、春の幸福

三、月の終

1、伸びゆく自然

2、惜春

者は憎らしい氣持、その間の氣をもむ心情)

○暖な春の日が……野も花、山も花。(高潮してゆく感情を十二分に表現してゐる)

○庭も軒端も……一時に花で埋まる。(抽象的な概念から具體的な表現に展開して力強い文となつてゐる)

○かうなつては……(實感を率直に表明)

○男も女も……花に浮かれて出て来る。(花にあこがれ出る行樂の心、春の心を充分満喫させるものがある)

○一日を遊び暮して……咬續いてゐる。(暮れんとして暮れざる恍惚として惠まれた春の情景)

○花が散つて……人の心が落着く。(大地にしつかりと根を下ろしたやうな落着き)

○野末のすみれ……(のどかな春の幸福感)

○しかし自然はしばらくもとまつてゐない。(深遠なる大宇宙の眞理)

○行く春を惜しむ心がそろ／＼胸にせまつて来る。(春四月の景観をつく／＼眺め、しみ／＼味つた者の惜春の情)

三、參考

徒然草(折節のうつりかはり) 兼好法師
玉かつま(花のさだめ)

本居宣長

櫻花 芳賀矢一

四、挿繪

(三頁)

『一日を遊び暮し……夕日に映じてはなやかに咲續いてゐる』所を具象化したもの、河の手前、緑の松にまじつて櫻の古木、床しい姿で咲き誇つてゐる。

第二 春の夜

(全二時)

四月

要旨 春の夜の喜びと幸福とに満ちた詩情を味はせ、文學的情操を養ふ。

教材 前課からの發展的教材で、幸福な家庭の和やかな灯影が、詩境に誘導してゆく夢多き春の夜の情緒である。すやすや眠る赤ちやん、何か知り楽しい世界を暗示するやうな遠い汽笛と楽しい笑ひ聲、凝つとしてゐても花の蕾がふくらみさうな氣配がする。靜かな夜の底に躍動する生命の歡びと、幸福に満ちた詩情を味はせ、文學的情操を陶冶する好教材である。

文 章 (口語體 敘景詩) **文字及び語句** **備** **考**

一、眠れる幼児

(觸感覺)

詩形は自由律の三句四聯より成つてゐる。

○暖い晩だ。(印象的な書きぶり、全體を包む實感)

○すやく／＼眠つてゐる。(和やかな雰圍氣に包まれた幼児の夢も、靜かに成長の一路を辿つてゐる—觸感覺)

○遠い汽笛。(餘韻をひいて何處へゆくのかわからない遠い汽笛、作者の夢を乗せてゐる。ゆつたりと靜かな氣持が讀まれる)

○しめやかに下駄の音。(しめやかに、と言つたのは動的な表現)

二、聞える物音

(聽感覺)

よひ

すやく／＼

しめやかに

どつと

うき／＼と

ぞよめく

ぐん／＼

三、うき／＼する

晩

(微妙な感觸)

○どこかでどつと笑ひ聲。(靜かな中に明るさを與へる表現—聽感覺)

○暖い、さうして

何か、あたりが

うき／＼とぞよめく晩だ。

(第一・二聯にあらはれてゐる二つの感覺を統一した表現で、足の底から生命の躍動を感じるやうである)

○アネモネや

チューリップの蕾が

ぐん／＼ふくらみさうな晩だ。

(内に満ち／＼してゐる生命が膨れるやうな感じの表現でアネモネやチューリップのふくらんでゆく視覺的の感覺像である。『何かあたりがうき／＼とぞよめく晩だ』といふこの感じを、もう一つ他の感覺で、しかも象徴的に表現しようとしてゐる)

四、生命の歡び

(視感覺)

第三 飛行機の發明 (全六時)

四月

要旨

本文を讀解して飛行機發明の経路と現状を知らしめ、航空思想の涵養と共に、科學的發明的精神の陶冶をなす。

教材

飛行機の發明は現代文化に於ける驚異であり誇りである。本文は古來人類の最大の望であつた空飛ぶ術の夢を實現しようとした人々の苦心研究の過程を述べた飛行機發達略史とも言ふべきものである。特に此の偉大な發明に關して既に百數十年前に、我が國では岡山の幸吉が、その實驗を試みた事を初に記して、次代の國民に對する發奮興起の警鐘とし、次いで諸外國の發明家の苦心談を説いてライト兄弟の功績に及んでゐる。國民的な科學教材として誠に意義ある教材である。

文章 (口語體 説明文)

- 一、空飛ぶ念願
- 二、工夫精進した人々
 - 1、岡山の幸吉
 - 2、リ、エンタール (ドイツ) 尊き犠牲
 - 3、二宮忠八

- 飛んでみたい…… (理想憧憬)
- 工夫をこらした人は…… (創作への精進)
- 鳩の體を研究して…… (具體化)
- 人々を驚かした。 (實現)
- 翼に似たものをつくりました。 (具體化)
- 一思ひに飛んでみると…… (決死の動作と決心の尊さ)
- 或日突風にあふられて…… (尊き犠牲)
- たゞ動力がなかつたので…… (遺憾の極み)
- 彼の模型飛行機は見事一氣に……あつといはせました。

文字及び語句

表具師、翼、操縦、失敗、得意、州、成る、廻轉、十二秒

備考

- 一、準備
 - 世界地圖 各種飛行機の寫真又は模型
 - 現代飛行機の記録其他の資料等
- 二、連絡
 - 讀本卷一 (19) ヒカウキ
 - ノ 卷九 (25) 空の旅
 - 唱歌尋六 飛行機

- 4、ラングレー (アメリカ) 模型に成功 實物に失敗
 - 5、ライト兄弟 (アメリカ) 苦心協力
- 滑走に失敗 實物飛行に成功
- 三、活躍時代
ライト兄弟の功績

- 其の後飛行機の實物を作ることに一生けんめいでした。 (繼續的精神)
- 小學校へ通ふ頃から何よりも機械が大好きでした。 (天才と嗜好の一致)
- 飛行機を作ることが年來の望…… (憧求的精神)
- 『明治三十三年の夏二人は……滑走機の試験をしました』『發動機について研究』『プロペラについてもいろ／＼と工夫をこらしました。』 (二人の苦心協力)
- 二日間二人は機の修繕に…… (不撓不屈)
- 動力による飛行機が人間をのせて空中を飛行することに成功したのは…… (努力の結晶)
- それ以來今日まで……すばらしい活躍を見せて居ます。 (時代の進歩)

成績、調子、好成績、收めました、經た、輸送、技術、遂げた、人類、工夫をこらす、かなり、あやつる、滑走、突風、あふられる、模型、動力、年來の望、動搖、都度、妙技、乃至、ちう返り、木の葉落し

- 三、参考 (原據)
 - 筆のすさび 菅茶山 (岡山幸吉の話)
 - オービル・ライトの手記 飛行機の話 長岡外史
 - 世界航空大觀 (世界航空史に輝かしい一頁を飾つた大朝の神風號、航研機、我が無敵空軍の活躍等)
- 四、挿繪 (八頁)
 - リ、エンタールが翼の如きものを作り岡の上から飛んだ寫眞。
 - (九頁)
 - ラングレーの模型飛行機 (一五頁)
 - ライト兄弟の輝かしい成功記録たる歴史的な飛行機。

第四 八幡太郎

(全三時)

四月

要旨 源義家の弓の至練にして憐みの情深く、且つ大度にして膽勇あるなど、將領の利器としての一面を窺はしめ、文語文に關する讀解力を練磨する。

教材 智仁勇兼備の典型的武將八幡太郎義家の、かりそめの振舞の中にも、慈悲の心が現れ弓の至練なる事も窺ふ事ができる。殊に未だ復讐の念失せやらぬ宗任に對し襟度ある態度、全く大膽といはうか剛勇といはうか、常人の企て及ぶ所でない。之が爲に宗任をして愈々その心服の度を深めしめた事など、さすが天晴れ名將たるの面目躍如たるものがある。迫力に満ちた文語文と相俟つて感銘と感興の一入に深いものがある。

文	文	文字及び語句	備	考
一、義家の武技 1、義家の憐情 2、弓の至練 3、宗任の不審 4、義家の自信 二、將領の利器 1、寛仁大度 2、家來の心配	〇射殺さんもふびんと思ひ……(狐を憐む慈悲の心) 〇矢はあやまたず……狐は其の場に倒れたり。(古今に比類なき義家の弓の至練) 〇『矢あたらぬに狐は死にて候』(不審) 〇驚きて倒れたるなり。(自信と弓術の極致) 〇義家くるりと背を向けて、うつほに差させけり。(豪膽にして人を信する事が厚い。襟度、信頼の情はくるとの一語でよく利いてゐる)	候 <small>さふら</small> 差出せば うつほ かりまた ふびん 死にて候 生きかへるべし	一、準備 義家の肖像、掛圖等 二、連絡 國史上卷(16) 源義家 唱歌章三 八幡太郎 三、參考(原據) 古今著聞集 卷九 武勇 前太平記	

〇『危きことかな……もし宗任に悪心があらば。』(巧みな倒置法と省略法を用ひて迫力を一層大ならしめてゐる) 〇手に汗をにぎりけり。(含蓄の深い語句、はらくとするとする氣持、又一面萬一の際主君を助けてやらうとする心構へも、うかゞはれる)	降りし者なれば 危きことか 手に汗をにぎりけり	四、挿繪 (一九頁) 宗任がかりまたを義家のうつほに差す所。 何れも狩衣に行藤、野太刀、綾蘭笠で義家は重藤の弓を持つてゐる。小さき従者の手にせるは馬杓又柄長杓で柄に巻きつけてあるのは今日の手拭と同様に用ひた白布。
---	-------------------------------	---

第五 松下禪尼

(全三時)

四月

要旨

松下禪尼が高貴の身でありながら一旦有事の際の用意として平素儉約を守つた心の床しきを感じせしめ、且つ文語の読解力を練る。

教材

時の執權北條時頼の母として、何一つ意の如くならざるものなき身分でありながら、若き者への心づかひから、手づから障子の一小間づゝ張つた優しい禪尼の尊い教訓である。自分のことは自分でせよ、働くことに身分の上下はない、働くことに人生の意義を自覺してゐる禪尼の美しい行爲こそ、質實剛健を旨とした鎌倉武士さながらの氣風の反映と見るべきで、極めて價値多い活人生訓として味ふべき點の頗る深いものがある。

文章 (文語體 敘事文)

文字及び語句

備

考

一、禪尼の床しい行爲

○北條時頼の母松下禪尼。(此の一語によつて今を時めく執權の母堂としてその行爲は一段と輝いてくる)

招待せうたい 得る

一、準備
松下禪尼の肖像、掛圖等

二、兄の忠言

○かゝる事は、召使に命じ給へ。自ら手を下し給ふに及ばざるべし。(語句と語句との相關的取扱によつて兄義景の忠言の真意が一層明瞭となつてくる)

禪尼

二、参考(原據)
徒然草 兼好法師

三、禪尼の答

○自らなし得ることは……(獨立獨歩の精神)
○おほつかなき手つきにて一小間づゝ張りたるなり。(身分からくる平素手なれぬ業なる事が窺はれる)

おほつかなき

三、挿繪
謡曲 鉢の木

四、活人生訓

○我も後には張りかへんと思へど……若き人に知らせんとてかくするなり。(儉約の真意と尊い人生の教訓)

ことごとく
見苦しから
知らせんと
てかくする
なり

禪尼と兄義景と問答してゐる所、室内の調度は鎌倉時代武家の簡素な作り襖は軟錦縁で當時將軍がそれと同等位の高貴な家で用ひたもの。禪尼は當時の尼僧の衣服、兄義景は武士の通常服装たる直垂に侍烏帽子を冠つてゐる。

第六手 ま り (全二時)

四月

要旨 子供らと手まりつきつ、春を暮した、至純超凡の良寛の生活の一部を窺はしめ、和歌に對する興味を喚起する。

教材 和歌は我が國に於ける特有の詩で三十一文字の短詩として萬葉以來發達した國文學の精髓である。讀本教材としては之が嚆矢で、しかも良寛の三首を選ばれてゐることは、その素朴にして純真なること、芳醇にして情味あることよりして兒童に適したものと云ふ事ができる。元來良寛は萬葉風の歌を詠む人で歌そのものは可なり六ヶしいが良寛には純真な人間性があつて、そこに子供の心にピッタリ合ふ所がある。

文 章 (文語 和歌)		文字及び語句	備 考
一、手まりつききの歌 (子供と遊ぶほゝゑましい姿)	<p>〇かすみ立つ (枕言葉即ち冠詞である)</p> <p>〇この日くらしつ (結語に力をこめた所から、この日は餘程良寛にとつては感銘の深かつた日であらうと想像される)</p> <p>〇かすみ立つ長き春日を子供らと手まりつきつ、この日くらしつ</p>	<p>里<small>さと</small></p> <p>かすみ立つくらしつ</p>	<p>一、参考</p> <p>良寛和尚歌集 相馬御風</p> <p>良寛さま 同</p> <p>良寛さま(童謡)北原白秋</p> <p>良寛の略歴</p> <p>俗姓山本、越後國出雲崎の人。十八歲同國光</p>
二、手まりつききの歌	<p>〇この里 (無慾恬淡の良寛にとつては唯一の安息所)</p> <p>〇くれすともよし (直情的感情の發露)</p> <p>〇天も水もひとつに見ゆる海の上に</p> <p>〇天も水も一つに見ゆる (水天髣髴の様)</p> <p>〇天も水も一つに見ゆる (最後の一首は抒情をこめた敘景で、萬葉を宗としての良寛らしい風格を思はせる。佐渡は良寛の母の出た里で朝夕に見る島影に特別の親しみと懐しみを覺えたのであらう)</p>	<p>天も水もひとつに見ゆる海の上</p>	

<p>(自然人良寛の純心)</p> <p>三、佐渡が島の歌 (母への思慕の情)</p>	<p>〇この里 (無慾恬淡の良寛にとつては唯一の安息所)</p> <p>〇くれすともよし (直情的感情の發露)</p> <p>〇天も水もひとつに見ゆる海の上に</p> <p>〇天も水も一つに見ゆる (水天髣髴の様)</p> <p>〇天も水も一つに見ゆる (最後の一首は抒情をこめた敘景で、萬葉を宗としての良寛らしい風格を思はせる。佐渡は良寛の母の出た里で朝夕に見る島影に特別の親しみと懐しみを覺えたのであらう)</p> <p>(前二首は五七七七七の定型律に據つてゐるが、此の一首は『天も水も』と初句が六音に成つて定型を破つてゐる。こゝに良寛らしい所が偲ばれる。三首とも如何にも淡々として些かの蟠りも認めない、これによつても彼の歌柄の一般が想像される。)</p>		<p>照寺に入り剃髮、二十二歲出國して備中玉島圓通寺の國仙和尚について修業、四十餘歲越後に歸り國上山麓五合庵にて起臥。</p> <p>性極めて恬淡、和歌や書をよくす。</p> <p>天保二年正月六日寂。</p> <p>年七十四。</p>
---	--	--	--

第七 小さなねぢ

(全三時)

五月

要旨

自分の役目を知つて、びつくりした小さなねぢの喜びを味はせ、どんな人でもその人独自の尊い生命、重い使命の
あるといふ事を會得せしむ。

教材

小さな鐵のねぢが自己の微力さと頼りなさに、つくづく悲觀してゐるが、全體の活動上缺くべからざる使命を持つてゐる事を自覺した時、欣喜雀躍、非常な自信と生甲斐を覺えたといふ一種の自叙的述懐的な記述である。全體と部分との有機的關係になる協力一致の眞義を示して、複雑な團體活動の中の一分子が如何に重大な役割を持つてゐるかを自覺させ、自己独自の生命と使用を尊重すべきであるといふ事を暗示してゐる。

文章 (口語體 擬人的敘事文)

- 一、無力を啣つ
- 1、時計屋の店先
- 2、自己の無力を啣つ
- 3、悲觀
- 二、ねぢの紛失
- 1、子供の出現

○ねぢは驚いてあたりを見廻したが……(世間知らずのねぢが驚いてゐる様子、こゝにまだ自己の眞價を認識し得ないねぢの單純さが現はれてゐる)

○どれを見ても大きくてえらさうである……(むやみと他を尊大視し、自己を卑下する感)

○あゝ、何といふ情ない身の上であらう。(自分の身の無力さを啣つ心からの歎聲)

○不意にばた／＼と音がして……(子供らしいかけ出し方)

○まあ、かはい、ねぢ。(女の子らしい物の言ひ方)

文字及び語句

備

考

勤めて
脚
若し
總掛り
早速
位置
占めた
ぜんまい

一、準備
時計及び部分品の實物等

二、參考
舊讀本卷十二所載のものでロシヤ童話から取材されてゐる。

三、挿繪
(二九頁)
親子總掛りで探し始めた

- 2、ねぢの紛失

三、ねぢの歡び

- 1、ねぢの搜索
- 2、自己の使命を知つた喜びと新たなる心配

- 3、ねぢの發見
- 4、みんなの喜び

四、ねぢの尊い使命

- 1、時計の活動
- 2、尊い使命
- 3、満足

○子供は思はず顔を見合せた。(子供心にも多少の心配はあつたのであらう。失敗した時の眞に迫つた表現)

○誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。(倒置法)

○探せ／＼。(二度繰り返して言ふ所に父の熱意がある)

○ねぢは……むちゆうになつて喜んだ。(自己の存在價値を始めて知つたねぢの喜び。『むちゆうになつて』に一入感が深い)

○ふさぎこんで下を見つめてゐた女の子。(多少自責の念もあり、且つ又失望もしてゐる女の子らしい、しほらしい心根と態度)

○一番喜んだのはねぢであつた。(前の句から續いての巧みな表現、探し出された現實の喜びに、聽てはかどどの役に立つであらう豫想の歡喜もこめられてゐる)

○忽ち愉快さうにかち／＼と音を立て始めた。(どこまでも徹底した擬人的敘述、ねぢ一本によつて新たな生命を吹きこまれた時計の朗らかな活動振り)

○工合の悪かつたのは其のためでした。(一個の完全な活動體に於ける全體と部分並に部分と部分との有機的生命的關係が親はれる)

○ねぢは心から満足した。(自己の生甲斐と誇りを感じる衷心からの喜び)

大やう
一かど
見まもつて
むちゆう
ふさぎこむ
がつかり
龍頭

ところで、父の時計屋さんは右手にピンセットを持つて探してゐる。時計屋の店先、細々した道具が仕事臺の上に並べられてゐる。

第八 軍艦生活の朝

(全四時)

五月

要旨 軍艦生活の一端を知らせ、その軍規の嚴肅にして、動作の敏活且つ正確なるに感ぜしめて海防意識と日本精神の涵養を期す。

教材 薄墨の一刷毛に暈された未明の軍港も刻一刻と明けはなれ、次第に活氣を呈してゆく様が宛然映畫のフィルムのように展開する。然も凜然たる號令や喇叭の響はトーカーを聴くやうな音響効果を齎して親しく現場に接する思ひがする。ノ總員起しの號令一下靜かな水面に石を投じた様に忽ち波紋が起つて、活舞臺が次から次へと繰り廣げられる邊り、斯くて最後に燦然たる軍旗を拜ませ、海の守りの力強さを深く印象附けた邊り流石に精練された軍事的教材で卷七の兵營だよりと對應してゐる。

文章 (口語體 敘事文)

文字及び語句

備考

<p>一、夜明け前</p> <p>1、軍艦の壯大な姿</p> <p>2、嚴重な警戒</p> <p>3、安らかな眠り</p> <p>二、總員起し</p> <p>1、起床</p>	<p>○東の空が……軍艦の壯大な姿がだん／＼にあらはれて来る。(莊嚴そのもの、やうな偉觀)</p> <p>○遠くを見張つてゐる。……あたりを警戒してゐる。</p> <p>(この二つの對照句によつて遠近の警戒をつゆ忽せにしない軍規の徹底振り)</p> <p>○安らかな眠を續けてゐるのであらう。(かく推量の形とした所に客觀的な描寫として用意周到な巧さがある)</p> <p>○艦内は深山のやうな靜かさである。(巨艦に對する深山の語は一入感が深い)</p> <p>○朝の靜かさが忽ち破られ……(活氣横溢の場面)</p>	<p>軍艦<small>かんかん</small></p> <p>後甲板</p> <p>望遠鏡<small>ぼくえんきやう</small></p> <p>警戒<small>けいけい</small></p> <p>乘員<small>じやういん</small></p> <p>副長<small>ふくちやう</small></p> <p>正しく</p> <p>露天甲板</p> <p>分隊<small>ぶんたい</small></p>	<p>一、準備</p> <p>軍艦の模型、又は寫真</p> <p>本教材に關係ある軍艦生活をあらはす寫真繪畫</p> <p>軍艦旗の寫真等</p> <p>二、連絡</p> <p>讀本卷四(3)海軍のいさん</p>
---	---	---	--

<p>二、種々の號令</p> <p>3、艦内の整頓</p> <p>三、露天甲板洗</p> <p>1、兩舷直整列</p> <p>2、甲板洗</p> <p>3、終了</p> <p>四、煙草―食事</p> <p>1、洗顔と喫煙</p> <p>2、休憩と談笑</p> <p>3、食事</p> <p>五、軍艦旗掲揚</p> <p>1、君が代吹奏</p> <p>2、軍艦旗掲揚</p> <p>3、訓練</p>	<p>○乗員は一せいに飛び起きて……(小氣味よい一齊活動)</p> <p>○號令が次々に下る。(軍隊式痛快さがあり、士氣の旺盛と能力の増進)</p> <p>○數分の中に艦内はすつかり整頓する(正確敏活な動作)</p> <p>○すらりと整列する。(規律正しい敏捷なる行動)</p> <p>○威勢のよい號令がかかる。(男性的)</p> <p>○水兵はくもの子を……甲板洗を始める。(活潑な動作と勤勞的精神と責任觀念の溢れるものがある)</p> <p>○頭を並べて進んで行く。(一齊に協同してゆく作業の進捗振り)</p> <p>○そこ、で『お早う』が言ひかはされる。(禮儀と親密の情)</p> <p>○火なほ一本の煙草ほん。(簡素で便利な軍隊式な所が面白い)</p> <p>○一時間餘りも……いふまでもない。(勞働の後の食事の味ひ)</p> <p>○『君が代』のラッパが奏せられ……實におごそかである。(嚴肅、全く日本精神の象徴そのものとしての輝かしい光景)</p> <p>○朝日に輝く軍艦旗。(想像するだに義勇奉公の熱情が湧き立つ)</p> <p>○心の底まで清められた……(日本人として通有の感情)</p>	<p>吐水口</p> <p>歸艦</p> <p>艦尾</p> <p>奏せられ</p> <p>行ひ</p> <p>姿勢</p> <p>清められた</p> <p>軍港</p> <p>當直</p> <p>艦橋</p> <p>掌信號兵</p> <p>舷門</p> <p>時鐘番兵</p> <p>總員起し</p> <p>號笛</p> <p>雨戸をくる</p> <p>つり床</p> <p>兩舷直</p> <p>吐水口</p> <p>衛兵隊</p> <p>捧銃</p>	<p>ノ 卷六(22)潜水艦</p> <p>三、参考</p> <p>海軍下士卒の生活(艦内の日課)長尾盛之助</p> <p>舊讀本卷九所載の文を修正したもの</p> <p>四、挿繪</p> <p>(三三頁)</p> <p>軍港の夜明け方、壯大な軍艦の姿が見え始めた所。</p> <p>(三六頁)</p> <p>露天甲板洗、桶から水を流してゐるのと後向に立つてゐるのは下士官。</p> <p>(三八頁)</p> <p>軍艦旗掲揚の嚴肅な場面。</p>
--	--	--	--

第九 馬ぞろへ (全三時)

五月

要旨 一豊の妻が平素の節約により、夫の大事に際して其の熱願を叶へしめたと言ふ典型的な武人の妻の美德に感ぜしめ、戦國時代の士風の一部を悟らせる

教材 一豊の妻が嫁する時、『夫 生涯の大事に役立てよ』とて父から與へられた黄金十兩を秘藏しながら久しく平素の貧苦に耐へ忍び、遂に夫をして一代の面目を施さしめた健氣にも美しい心ばえこそ、眞に日本武士の妻としての美德であり、前出の『松下禪尼』と共に日本婦道の鑑といふべきである。

尚一豊が良馬を熱望せる所、信長の名將としての大器等、武士道精神感得に好個のもので、まことに現下非常時局、取つてもつて模範とするに足る尊き教材である。

文章 (文語體 敘事文)

<p>一、賣りに来た馬</p> <p>1、高價なる馬</p> <p>2、貧の悲しさ</p> <p>二、妻の深き志にて良馬を求む</p> <p>1、獨り言</p> <p>2、黄金十兩</p> <p>3、一豊の驚異と不審</p>	<p>○ 信長の家臣等……皆求めかねたり。(羨望の垂涎が萬丈なる様)</p> <p>○ 一豊は……空しく家に歸りぬ。(惘然たる姿)</p> <p>○ 『さて……手に入れたきものなり』(猛烈な慾求)</p> <p>○ 『黄金十兩』と答へたるま、腕をこまぬきて又語らず(現實の悲哀と溜息をついてゐる態度)</p> <p>○ 『そも……これはいかなる金ぞ……』となじる。(驚異と不審とに難詰せんとする感情がこゝに錯綜してゐる)</p> <p>○ 妻は靜かに答へぬ。(貞女賢婦の冷靜にして謙讓なる態度)</p>	<p>來れる家臣等</p> <p>求めかねたり</p> <p>欲し</p> <p>空しく</p> <p>黄金十兩</p> <p>夫、久しく</p>	<p>文字及び語句</p> <p>備考</p> <p>一、準備 讀本掛圖 信長、一豊の肖像</p> <p>一、参考(原據) 藩翰譜 新井白石 國史下卷(33) 織田信長</p> <p>三、挿繪</p>
--	---	---	--

<p>4、妻の深き志</p> <p>5、一豊の感謝</p> <p>三、信長感に入る</p> <p>1、馬ぞろへ</p> <p>2、あつばれの名馬</p> <p>3、信長の感歎と一豊の面目</p>	<p>○ 『貧しとして費すことなかれ、夫の大事あらん時の用にせよ』(家庭教育の立派さを明示)</p> <p>○ 『聞けば近く都にて……主君のおほめにあづかり給へ』(夫の立身出世を希ふ妻の心情が横溢)</p> <p>○ 一豊は妻の深き志に謝せり。(感激の頂點)</p> <p>○ 『あつばれ名馬、誰の馬ぞ』(一際目立つ凛然たる名馬の面影と鑑識眼のある信長の名將ぶりが察せらる)</p> <p>○ 『日頃貧しと聞きし一豊が……見上げたる志』(意味深長なる語句、貧しい中に平素の節約によつてかゝる名馬を購つたといふ眞の武士的精神を賞する上に、遠路態々安土の城下まで賣りに来た馬を天下の信長の家臣誰一人買ふ者が無かつたとあつては全く信長の威信にも關したであらうに、よくも買つてくれたといふ感謝の意も含められてゐる)</p> <p>○ しばし感じて止まざりき。(信長が如何に一豊の志に感じたか、又その馬が如何に稀代の逸物であつたか、想像される)</p>	<p>費す</p> <p>誰</p> <p>浅かりし頃</p> <p>せん方なけれど</p> <p>いか程の價にや</p> <p>こまぬきて</p> <p>そもく</p> <p>語らざりし</p> <p>なじる</p> <p>あるよし</p> <p>たくましき</p> <p>あつばれ</p> <p>見上げたる</p> <p>志</p> <p>しばし感じて止まざり</p>	<p>(四一頁)</p> <p>一豊の妻が鏡箱より取り出した黄金十兩を夫の前に差出した所、床の間の壁の破れはその貧しさをあらはしてゐるが、武士の嗜みとして床には大小を飾り脇床には鏡箱が置かれてゐる。</p>
---	---	--	---

第十 松平信綱の幼時

(全三時)

五月

要旨 信綱が幼時、若君の命により軒端の雀の子を取りに行き失敗して將軍に折檻されながらも遂に白狀しなかつた其の志操堅固な忠誠の心を味はせる。

要材 梅檀は双葉より芳しの譬へに漏れず、徳川初期の治世上に功の多かつた松平信綱は、すでに幼時から非凡の氣魄があつた。若君竹千代の命である雀の子を取り損ね、將軍から折檻されても頑として實を吐かなかつた。將軍は心ひそかに長四郎の氣魄を喜び大きな期待を持つたのである。

観 雅味のある文語文を以てあらはし内容も兒童に親しみ易く、就中長四郎が主思ひの純情から死すとも白狀すまいと悲壯な決意をした事は、一入兒童の感銘を深からしめるものがある。

文	章 (文語體 敘事文)	文字及び語句	備考
一、若君の命	○雀の巢くひたるを見つけて……(身分は尊くとも子供心に變りはない)	燈火 ^{ともど} 封じて	一、準備 徳川家系圖 讀本掛圖
1、主命	○『長四郎雀の子を取つて参れ』(辭するを許さぬ嚴命)	幼名	秀忠、家光、信綱の肖像
2、實行	○日暮れて後……(主に忠なる心)	巢くひたる	等
3、失敗	○今や取らんとする時、(非常に緊張した場面)	來れるぞ	二、連絡 修身卷二(25) 正直
一、主をかばふ心	○見れば長四郎なり。(おのれ曲者と追取刀で氣色ばんで障子を開くれば子供の長四郎である。不審の眉をひそめた事であらう)	参りて候 心にてはあ るまじ いな、教へ	三、参考(原據)

2、長四郎の答	○あまりの欲しさに参りて候。(其の場の機轉、あつばれ大器量の卵)	られたるに は候はず 變らざりき	藩翰譜 新井白石 國史高二(35) 江戸幕府 の創立
3、將軍の明察	○いや／＼おのれの心にてはあるまじ。(將軍の名察)	不届 かくてある べし	四、挿繪 (四五頁)
4、長四郎の忠勤	○長四郎の答は初に變らざりき。(主に殉ずるの覺悟で、どうしても實を吐かない長四郎の忠勤ぶり)	御臺所 人とならば 無二の忠臣 たるべし とぞ	今將軍が追取刀で縁端にて誰何してゐる場面、側にて燈火をかゝけてゐられるは御臺所、平伏してゐるは長四郎。
三、秀忠、長四郎の主思ひに感ず	○大きな袋に長四郎を押入れ……柱に掛けられたり。(折檻としては子供にふさはしいユーモアを含んでゐるやり方で心からの折檻でない事が窺はれる)		老松の下に石燈籠が見えて御殿の奥庭らしい風趣が感取される。
1、折檻	○翌朝、御臺所……再び封ぜらる。(優しい女らしい情愛)		
2、御臺所のお情	○『彼が今の心にて……無二の忠臣たるべし』とて、大いに喜ばれたりとぞ。(大いにの語がよく利いてゐる)		
3、將軍の歎賞			

第十一 雀の子 (全二時)

五月

要旨

一茶の俳句はその着想の機微飄逸洒落な風趣の中に、動物に對して變りなきあたゝかい心がある。その心を感得させ、俳句に對する理解と興味を持たせる。

教材

冷酷な家庭に育ち貧苦にさいなまれ通して來た身としてその悩みも一入深く、天真爛漫の中に多少の僻みがあつて寂寥孤獨の感を深めてゐる。此の感じは一茶の一生涯を支配したもので一茶の句には人生の寂しさを詠んだものが多く、一見快活豪放にして無頓着極まるやうに思はれる句の底にも人間一茶の涙の滲み出たものが多い。ために彼の有名な『我と來て遊べや親のない雀』などを捨て、明朗な國民性陶冶を狙つてゐる所などが観取される。

文章 (俳句)

文字及び語句

備

考

一、雀の子

○雀の子そのけそのけお馬が通る

そのけ

一、参考

二、雀の子

○さあござれこまでござれ雀の子

ござれ

俳諧寺一茶 東松露香

三、雀の子

○赤馬の鼻で吹きけり雀の子

吹きけり

一茶さん 相馬御風

四、蛙

○やせ蛙まけるな一茶これにあり

これにあり

一茶略傳

五、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

手をする

姓は小林、名は彌太郎 信濃國水内郡柏原に生まる。其の一生は貧と苦の惡闘史で繼母の虐待、奉公の苦しみ、漂泊の悲哀、近親の憎悪、呪はれた晩婚、愛兒との死別、凡てが人生悲劇の連鎖であつた。斯うした生活の反映である彼の十七文字は血と涙と滲み出た魂の記録である。

六、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

七、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

八、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

九、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

十、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

十一、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

十二、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

十三、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

十四、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

十五、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

十六、はへ

○やれ打つなはへが手をする足をする

足をする

〃たらひからたらひにうつるちんぶんかん〃は彼が臨終の切れ〳〵の息の下からもらした辭世の句である。

第十二 一 アメリカだより

(全五時)

六月

要旨

アメリカに於ける代表的都市及びその鐵路沿線の状況の大體を知らしめ、地理的國際的文化的觀念を啓培すると共に日米關係の密接さに思を到らしめ、兒童の見聞を擴充する。

教材

卷七の『横濱港』卷八の『ホノル、の一日』から發展して來た教材と見てよい。北米合衆國の各所を旅行した中で最も印象的で特徴の著しいサンフランシスコ、ロスアンゼルス、シカゴ、ニューヨークの大都市並に鐵道沿線の概況を寫したものである。之によつて合衆國の大都市の文化的で大規模なる事や、國土の廣大で産業の盛んな事や在留邦人の健氣な活動狀況が窺はれる。隨つて本文は地理的、世界的觀念を伸展せしめるにも民族的自重を深からしめる上にも真によい教材である。

文章 (口語體 手紙文としての紀行文)

文字及び語句

備

考

一、サンフランシスコ

1、美しい港町
2、日本人の努力

二、ロスアンゼルス

1、望郷の感

○皆さん元氣ですか……見たでせうね。(親愛の情)
○何となく胸がをどるやうでした。(未知の土地に對する想像や希望)

○アメリカの小學校と日本語學校と……(英語日本語兩方共學ぶ在米邦人の努力と異國にあつて國語を忘れぬ祖國愛)

○皆さんに見送つていた、横濱が……(望郷の感)
○町には椰子の葉が茂り、冬もバラの花が咲く。(南國的な都市)

○軒なみに日本語が聞かれ……店先でこゝしてゐるま

灣(灣)
大市街

大建築

眺望

明後

營んだ

食料品

選手續

荒涼

無限

一、準備

世界地圖 北米合衆國地圖

サンフランシスコ、ロスアンゼルス、シカゴ、

ニューヨークなどの繪葉書及び寫真類

二、連絡

讀本卷七(25) 横濱港

〃 卷八(21) ホノル、の一日

2、南國的都市
3、日本人の活躍狀況

三、シカゴ

1、アリゾナの沙漠
2、廣大な沃野
3、繁華な市街

四、ニューヨーク

1、高層建築
2、マンハッタ
3、交通網
4、高層建築の最上階から眺めた壯觀

す。(心強い嬉しさ、懐しさと強烈な愛國心が湧く)
○日本選手がめざましい活躍……(日本人の優秀性と誇)
○アメリカの子供に負けないでせうね。(婉曲にして効果百パーセントの教訓であり刺戟である)
○此の沙漠は翌日まで續きました。(廣大な沙漠)
○沙漠があらうなどは思はなかつたでせう。(對者に言ふと共に自分自身にも言つてゐる言葉らしい)

○沃野千里の大平原。(素晴らしいアメリカの沃野)
○ごつた返してゐます。(面白い表現手法、商工業が盛んで騒がしく賑やかなる事)

○シカゴは此の世の地獄……(殺風景な市街)
○世界第一……(アメリカ人氣質のあらはれ)
○まるで絶壁の底……氣がします。(言ひ得て妙、兩側に高層建築が楯比してゐるのだから斷崖絶壁の感がある)

○中央のマンハッタンでは……(街區整然)
○墓場の石塔か記念碑の林のやうに、(穿ち得た譬喩)
○によきによきと立つてゐます。(數の多い表現)

○無数の木の葉にもたとへませうか。(船の多い事、川の廣いこと、建物の高層なる事が想像される)
○なるほど……何ともいへない壯觀です。(心から感じてうなづいた所の表現)

牧場

黒人

處(処)理

一巡

殺風景

眞直

十幾條

等しく

奇觀

海峽

そ、り立つ

山腹を縫ふ

南國的雜貨

無邪氣

たまさか

沃野千里

ごつた返し

屠殺場

三、挿繪 (四九頁)

金門橋、高さ二百十八呎對岸は桑港市。(五三頁)

ロスアンゼルス市の街。(五六頁)

大サボテンのあるアリゾナの大沙漠、自動車の走つてゐる所など如何にもアメリカらしい。(五七頁)

シカゴの街の雜踏。(五九頁)

世界の心臓とも言はれるマンハッタンの整然たる市街、中央部稍左の白い長方形は世界一といはれる停車場。(六一頁)

第十三 佛法僧 (全三時)

六月

要旨

千年來不思議がられた靈鳥佛法僧の正體が明らかになつて、日本に二つの名鳥の出來た事を讀ませ、科學的發見の興味を了得させる。

教材

佛法僧は深山幽谷に棲み、初夏の頃『ブッボウ』又は『ブツボウ』と鳴きつゞける。その聲が如何にも神秘的で佛縁を思はせ、古來靈鳥として尊ばれ多くの詩歌にうたはれて來た。この課はその佛法僧に對する神秘的な感情とその鳥の正體が近年ラヂオの實況放送によつて始めて明らかにされた次第とを敘したもので、豊かな趣味性を養ふと共に科學的態度を起させるに十分の教材である。

文章 (口語體 説明文)

一、神秘的なブツボウソウの聲

○『ブツボウソウ』(佛法僧の三寶を意味して、聞くからに佛縁を思はせる)

○詩や歌にうたはれてゐます。(風雅な我が國民性)

1、聲の主不明

○奥深い山の森林で夜鳴く……時期が大體五六月頃に……(不明の原因)

2、神秘の世界

○夜ふけた深山の……遠ざかつて行きます。(うまい表現、一入詩趣の深いものがある)

○まるで神秘の世界にでも……(神秘的な美音と名刺の靈感に宗教的氣分が湧く)

佛僧 佛僧 森林 時期 深山 濃い 白色 放送 結果

文字及び語句

備

考

一、準備

佛法僧、このはづくの實物標本又は繪畫

高野山、比叡山等を示す地圖等

二、參考
佛法僧放送談義
上野千秋
野鳥禮讚 内田清之助
理科高一(2)鳥類

<p>二、美しい渡り鳥が佛法僧となつた</p> <p>三、佛法僧への疑ひ</p>	<p>であるが場所季節姿態等を充分察知する事ができる)</p> <p>○しかし、最近になつてこれを疑ふ人もありました。(『しかし』の接續詞に深い意があり、『これ』は前出の斷定を意味し『疑ふ人も』のものに『中には……』の意が含まれてゐる)</p> <p>○どうしても別の鳥であらうといふのです。(『どうしても』は確信の意、『であらう』は斷定し切れぬ推量の意、研究吟味の過程として面白い)</p> <p>○ところで……ラヂオで放送され全國の人々が其の美しい聲を聞きました。(『ところで』は以前の複雑な事情を受けついで更に事件の發展を豫告しようとする大切な接續詞……科學文化の價値)</p> <p>○手にものせられる程の……このはづくといふ鳥でした。(こゝにも正體不明の一因がある)</p> <p>○千年來不思議がられた聲の主。(含蓄ある書きぶり)</p> <p>○いは、我が國に二つの名鳥が出來たことになりました。(鋭い理知の光の奥に潜む床しい心情を如實に物語る温い語句)</p> <p>○何といつても美しい深みのある神秘的な聲です。(全くうま味のある表現手法で『何といつても』の語に『姿は醜くとも珍らしくなくともその聲に至つては……』の意が含まれてゐる)</p>	<p>名鳥 色彩 さまよふ 神秘 實況放送 元來 へうきん</p>	<p>佛法僧を詠める詩歌 閑林^ニ獨坐^ス草堂曉 三寶之聲聞^ク一鳥^ニ 一鳥有^レ聲人有^レ心 聲心雲水俱^ニ々々 空海</p> <p>〃我が國はみものりの道のひろければ鳥もとなふる佛法僧かな〃 慈鎮和尚</p> <p>〃松の尾の峯しづかなる曉に仰ぎて聞けば佛法僧の鳴く〃(古歌)</p> <p>佛法僧の棲息地 高野山、比叡山、京都松の尾、日光山、霧島山、三河鳳來寺、宇治醍醐寺、河内天野山、木曾福島、大和室生寺、榮山寺等</p>
<p>四、聲の主發見</p> <p>1、科學文化の力</p> <p>2、飼つてゐる人</p> <p>3、このはづく</p> <p>五、二つの名鳥</p> <p>1、姿の佛法僧</p> <p>2、聲の佛法僧</p>	<p>○千年來不思議がられた聲の主。(含蓄ある書きぶり)</p> <p>○いは、我が國に二つの名鳥が出來たことになりました。(鋭い理知の光の奥に潜む床しい心情を如實に物語る温い語句)</p> <p>○何といつても美しい深みのある神秘的な聲です。(全くうま味のある表現手法で『何といつても』の語に『姿は醜くとも珍らしくなくともその聲に至つては……』の意が含まれてゐる)</p>	<p>三、挿繪 (六四頁) 佛法僧。 (六七頁) このはづく。</p>	<p>三、挿繪 (六四頁) 佛法僧。 (六七頁) このはづく。</p>

第十四 いも掘

(全二時)

六月

要旨	<p>学校園でいも掘り作業に熱中した児童の生活の喜びを感得せしめ、土に親しみ労働を愛する氣風を養ふ。</p>
教材	<p>學校に於ける子供の生活體驗を内容とせる敘事文である。そこには田園趣味に立つ作業と教育との尊い契機があり且又抑へきれぬ生活の喜びも溢れてゐて、讀むからに言ひ知れぬ快い感じを覺えさせる。なほ趣味的觀察眼の芽えたる、うるはしくなだらかな筆致は、一入に本文の魅力を増すものがある。</p>
観	
文章 (口語體 生活的敘事文)	<p>一、いも掘りの命令 1、先生の命令 2、一せいに小をどりする 3、用意</p>
	<p>○先生はにこ／＼して……とおつしやつた。(師弟融合の愉色が漂ふてゐる) ○これこそ……(これこそと力を入れた所に非常な期待がある) ○皆一せいに小をどりして喜んだ。(如何に待ちこがれてゐた事か、全員聲をあけて喜び勇む場面が想像される) ○午後の日がかん／＼と照らしてゐる。(これによつて</p>
文字及び語句	<p>授業 校舎 握つて 盛上つた 大人 綱 一せい 小をどり</p>
備	<p>一、連絡 實際の作業と連絡を取るやうにしたい。 理科尋四(24) いも 二、参考 舊讀本卷九所載の文を修正せしもの。 三、挿繪</p>
考	

<p>二、いも掘りの實際 1、いもを掘る</p>	<p>文全體が非常に明るく爽やかである) ○皆は一せいに掘りにかゝる。(久しく待つてゐた作業であるから一つでも多く掘らうとする氣分が窺はれる) ○やはらかい黒い土が……四方へくづれる。(いもを引き抜く様が見える様な巧みな表現) ○よく實がいつてゐる。(満足すべき收穫) ○星野君が根氣よく掘つて……一つ一つていねいに並べて行く。(掘つた一つ／＼のいもにいろ／＼の感情をこめてならべてゐる有様が目に見える) ○驚く聲、感心する聲、嬉しさうな聲。(児童の生命の喜びを如實に表現) ○ふと氣がつくと……(作業に熱中してゐた様子が窺はれる)</p>	<p>菜園 シヤベル みづ／＼しい じゆづつなぎ はち切れさ</p>	<p>(七〇頁) いも掘りの實況。 中央で莖を握つて引きぬかんとしてゐるのは僕(作者)、側でいもを並べてゐるのは星野君。</p>
<p>2、児童の喜び</p>			
<p>3、作業に熱中</p>			

第十五 晴

間

(全二時)

六月

要旨

さみだれの晴間に展開する自然の情景の清新味に満ちた爽やかさと、それに對する作者の歡びを感得せしめ、文學的趣味を養ふ。

教

幾日も降り続いた五月雨の晴間に、野路に立つて初夏らしい自然の情趣に浸つた感興を表現した韻文である。第一聯の時間の全貌から水の流と遠山とそして最後に一もとの露草の花をあしらひ餘情を咬つた巧みさ、作者の胸は大自然の懷にピッタリ抱かれ無限の愛の乳房を含んで、心ゆくまで偉大な自然美を吸取つてゐる。尙そこには悠久無限にして絶大な天地と、その中に宿る有限の個々の小さき生命との對照も暗示されてゐて、精彩な自然觀照と共に一種幽玄な宇宙觀を思はしめるものがある。

材

文 章 (文語體 敘景詩)

文字及び語句

備

考

一、輝く野づら
季節感の全面的
の描寫

詩形 五七調 六句四聯の定型詩、七五調とは反對に短句の後に長句を發音すること、て旋律の重厚さが目立つてゐる。

濁れど
田園

一、準備
初夏の景趣を描いた繪畫
露草などの實物等

二、小川のせゝら
ぎ

○うれしく(さみだれの晴間を自然と共に喜ぶ作者の心情)

さみだれ
行く水

二、挿繪

小川の喜びと我
が喜びの融合

○野に立てば(うれしさに野外に出て立ちつ歩みつせる所)
○野は輝きて(折柄の陽光を浴びて生の歡びに輝く所)
○行く水は(流れゆく水の略、雅味豊かな語)

音もまさり
植ゑわたす

さみだれの晴間に生の歡びにあふれてゐる露草の花を濃く、それに配して淡墨で莎草、むらさき草

三、大いなる天地

○少し濁れど(連日の霖雨で少し濁つてゐるが爽やかな気分は少しも害されてゐない)

早苗

のころを出し、曲水を圖

身も心も自然の
悠久さに自惚れ
る境地

○せゝらぎの音もまさりて、(水嵩の増した流れの音の高くなつた事が窺はれる)
○よろこびを歌ふが如く……(作者の喜びを小川のせゝらぎの中に見出した所巧みな擬人的表現である)

つゝましき
瑠璃色

と圖案の折衷を行つたのも面白く、無雜作の中に淡彩の妙味を見せてゐる。

四、可憐の花

○植ゑわたす早苗のみどり(見渡す限りの鮮綠美)

早苗

案風にあしらつて、寫生

自然觀照の二情
景

○心はるく(廣い田園に遠い山に、果しなき大空に對する心境)
○天地の大いなるかな。(作者の思はず發した感動詞、作者の深刻な宇宙觀の閃き)
○ふと見れば(視線の轉換をあらはす大切な語)
○つゝましき姿(大自然に對する小自然の生命をあらはすに如何にもふさはしい語)
○色あざやかに(小さいながらも独自の輝きを見せてゐる所に生命の尊さがある)
芭蕉の句境に通ずる自然觀照の姿である。
〳ふと見れば薺花咲く垣根かな〳

早苗
つゝましき
瑠璃色

案風にあしらつて、寫生と圖案の折衷を行つたのも面白く、無雜作の中に淡彩の妙味を見せてゐる。

第十六 三日月の影

(全七時)

六月

要旨

山中鹿介幸盛の七難八苦の生涯を讀ませ、彼の主家再興の烈々たる熱情を感得させて、鹿介の人格的感銘を通し日本人的性格の陶冶をなす。

教

本課は尼子氏滅亡の衰史の中心人物山中鹿介幸盛の悲壯な活躍の一代記で、重代の胃・一騎討・苦節・上月城・甲部川の秋の五章から成立つてゐる。七難八苦の苦節を中心に三日月に始まり三日月で結んでゐる。其の七難八苦の生涯は銳利利鎌の如き三日月のそれに似て、彼の仰いで理想としたのも故なきことではない。文は物語風のなだらかな調子で運ばれ全文に脈々として流れる武士道精神があつて、これを表現した情景や人物の描寫、武家らしい家風や人柄を思はせる會話などまことに好個の説話文學である。

観

本課は尼子氏滅亡の衰史の中心人物山中鹿介幸盛の悲壯な活躍の一代記で、重代の胃・一騎討・苦節・上月城・甲部川の秋の五章から成立つてゐる。七難八苦の苦節を中心に三日月に始まり三日月で結んでゐる。其の七難八苦の生涯は銳利利鎌の如き三日月のそれに似て、彼の仰いで理想としたのも故なきことではない。文は物語風のなだらかな調子で運ばれ全文に脈々として流れる武士道精神があつて、これを表現した情景や人物の描寫、武家らしい家風や人柄を思はせる會話などまことに好個の説話文學である。

文章 (口語體 敘事文)

文字及び語句

備

考

一、重代の胃

1、兄の激勵

○此の胃は祖先傳來の寶……お前にゆづる。(兄の鹿介に或る何ものかを期待し信頼してゐる情)

2、母の教訓

○家の名をあげてくれ。(兄の願意)

3、鹿介の決意

○尼子家の御恩は忘れまいぞ……御威光を昔に返しておくれ。(武士道精神の精髓)

○涙が光つてゐた。(感激の決意ににじむ武夫の熱涙)

○三日月を仰いで……(三日月の出る度に之を仰いで決意を固めた事が察せらる)

○我に七難八苦を與へ給へ。(『憂きことの……』の歌と同じ心境)

二、一騎討

1、品川大膳

○破鐘のやうな聲で叫んだ。(豪傑的な風貌)

○りんとした聲で大音に答へた。(狼介の聲と比較してその人柄が偲ばれる)

○一騎討の勝負。(堂々と名乗りをあげて戦ふ日本武士の風格)

○鹿介の太刀風はさらに鋭かつた。(動作に一分の隙もない眞剣な表情)

○めんだうだ、組まう。(氣勢の轉換)

○とたんに鹿介はむつくと立上つた、其の手には……(豫期に反した鹿介の行動に對する驚歎)

○現れ出た狼を鹿介が討取つた。(諸讒をまじへた落ち着き振りと武士の榮譽)

○鹿介の大音聲は……(征服の豪氣と勇壯な姿)

○前後七年にわたる長い籠城。(例のない長期の籠城に尼子諸勇士の奮闘ぶりがわかる)

○涙をのんで敵に降つた。(自分を犠牲にして部下を救はうとする尊い主心)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

○身をやつして京都に上つた。(敵の目をさけるため)

一、準備

戰國時代群雄割據の情勢を示す地圖(本文にあらはれてゐる地名を記入)

本教材に關係ある古圖又は繪畫等

二、參考(原據)

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

山中幸盛傳 山口美道

2、勝久を主と仰ぎ再興を企つ

○戦國の世とはいへ京都では花が咲き……(文の前後の連絡上から言つて、これだけのものをこゝにはさんでつなぎ合せた妙味は確かに新しい表現方法の一つである)

3、布部山の戦

○『尼子家再興のことは我が年來の望である』『時は来た』『今まで敵についてゐた舊臣……』(主君と家來の關係、主家再興の志と鹿介を中心に舊主を思ふ日本武士の美しい行爲)

四、上月城

○さしもの尼子勢ではあつたけれども……(武勇すぐれし必死の尼子勢ではあつたけれども……)

1、信長の同情

○再び京都へ走つた。(再擧のために)

2、上月籠城

○それから又幾年か過ぎた。(苦難と忍苦の數年)

3、勝久の感謝と鹿介の變らぬ忠節

○此の勇士の苦節に同情した。(人を見る明のある名將)

4、鹿介の志

○鹿介の血を吐く言葉……(全く命がけの願意)

○彼はまだ死ねなかつた。(復仇のために)

こみ上げる
七難八苦
赤絲威し

るる古鐵製南瓜形十二枚張の胃。

正しく

○毛利方の大砲

飛道具

上月城に籠城中うばひ取つたと言はれる大砲が今遊就館に保存されてゐる。

卑怯千萬

洲 太刀風

呼吸をはかる

のしかゝる

手に汗を握る

さしもの

三、挿繪
(七六頁)

涙をのんで

鹿介が重代の胃(鹿角・三日月の前立)を載いて

身をやつす

瞑目合掌三日月に祈つてゐる所。

年來の望

(八〇頁)

精兵 堂々

むざん

枕をならべて討死

鹿介と狼介の一騎討の場面、正眼の構へは鹿介、大上段の構へは狼介。

苦節

五、甲部川の秋

1、甲部川の渡

○おのれ其のまゝにして置けようか。(悲憤と怨恨に胸も破れるやうな烈々たる報復の激情)

2、鹿介無念の最期

○川端の石に腰かけて……白い腹を見せてもう返りをしつてゐた。(悠久なる自然の姿と人間の姿を水の面に描いて、千萬無量の感に打たれた事であらう)

○身をかはしてざんぶと川へ飛込んだ。(重手を負ひながら一旦は此の場を逃れんとする痛ましい努力)

○後から鹿介のもとよりをつかんで引倒した。(あゝ萬事休す。かくて鹿介は萬斛の恨みを呑みつゝ、甲部川の秋風に果敢なく消え果てた)

○甲部川の水は……あの淡い三日月の影をうかべながら(何といふ餘情豊かな表現であらう、今尙此の邊りに立つ人に昔を偲ばしめるものがある)

血を吐く言葉

(八四頁)

葉

鳥取縣の富田川の寫真、

殘黨

前方の山は富田城址、今の月山である。

いち早く

(九〇頁)

ひし／＼と

鹿介が甲部川の岸邊に腰かけて來し方行末を思ひながら無量の感に打たれてゐる所。無心の燕は水の面にすれ／＼に飛んでは白い腹を見せ、もう返りをしてゐる。卑怯にも

夜に乗じて

後から河村新左衛門が忍び足に近づいてゐる。

はゞまれて

いたづらに

旗あげ

領主

片われ

身をかはず

もとどり

いういう

第十七 圖書館 (全三時)

七月

文化施設圖書館に對する理解と認識を深め、作者の『休みにはきつと来る』の感想に共感させる。

本課は求知心に燃えてゐる子供の生活を中心とした文化的教材で、圖書館へ行つて掛の方の親切によつて所期の閱覽を終り感激に打ちふるへながら、友達と休憩室で語り合つた事を敘してゐる。之によつて知識の寶庫であり書齋の延長である圖書館の設備の大要と、その効果を知る事ができて、圖書館への親しみを増し讀書愛を培ふ事ができる。

文章 (口語體 生活的敘事文)

文字及び語句

備

考

- 一、圖書館へ行く
- 1、星への關心

圖書^と館^{かん} 一冊^{いっさつ}

一、準備

- 2、圖書館へ

目錄^{もくろく} 書庫^{しょく}

圖書館に關係ある寫真 附近の圖書館の目錄、閱覽用紙等

- 二、親切な掛の人

姓名^{せいせい} 松本君^{まつもと}

二、挿繪

- 1、目錄室
- 2、掛の人の親切

○夜の空に星が美しく見えるやうになつた。(求知心に燃ゆる少年時代の心境)

○圖書館へ行けば幾らもあるだらう。(子供の求知心に適切なヒントを與へる好ましい親心)

○僕は暑いのも忘れて……(實感的な敘述、旺盛な求知心の漲つてゐる事が窺はれる)

○どんな本が讀みたいのですか。(暗夜に光明を與へられたやうな嬉しい言葉)

○あ、それなら……(何から何まで心得てゐる物の言ひ)

歴史物語^{れきし} 閱覽用紙^{えんげんし} カード

東京市内某圖書館の目錄

方)

- 三、本の貸出
- 1、出納掛の人
- 2、本を借る

○はつとしながら思はず『はい』と大きな聲で……(中村君の個性が全篇を一貫してゐるが特にこの所に於て活潑なそして素朴な子供である事があらはれてゐる)

○出納掛の人は笑ひながら本を渡してくれた。(無邪氣な少年のうろたへ氣味の態度が偲ばれる)

天文学^{てんがく} 出納掛^{しゅつなつかへ} 出納手

室でカード箱の前で相談 掛の人が少年に色々説明してゐる。(九六頁)

- 四、閱覽室で

- 1、閱覽室の寒圍氣
- 2、讀書に熱中

○天井の高い……しんとして靜かだ。(圖書館の寒圍氣)

○間もなく僕の心は……星の美しい世界へ飛んで行つた。(無限に生々發展する姿態)

(九八頁)

- 五、休憩室で

- 1、松本君との語らひ
- 2、中村君の熱意

○どれだけ時間がたつたらう。(讀書に熱中してゐる姿)

○そつと行つて軽く背中をたたく。(閱覽室に於けるしぐさとして穿ち得た表現)

○君始めて来たね。(子供らしい率直な斷定)

○讀みたい本が山程あるよ。(讀書慾、求知心の旺盛な事が察せらる)

○夏休みになつたら僕もきつと来る。(中村君の非常な熱意)

○窓の外には……其の枝ごしの庭に見られた。(讀書に疲れた窓外の景觀、それは名狀し難い良い氣持)

第十八星の物語

(全三時)

七月

要旨 寶石をちりばめたやうな美しい星を眺めて、北極星、北斗七星其の他二三の星座について説明してゐる内容を讀みとらせ、星についての興味をもたせ、天文への關心を培ひ、併せて科學的觀察の態度を養ふ。

教材 晴れた夜空に仰ぎ見る幾千幾萬とも數知れぬ燦爛たる星群の輝きは、古來大宇宙の謎を秘めて或は傳説の對象として、或は詩歌の對象として、或は科學の對象として、あらゆる人々の好奇と憧憬と疑惑の念をそつてゐる。それら無數の星の中、比較的認め易くして人生と關係の深いものや興味多い星に關し、極めて平易に懇切に敘述したもので、前課の『圖書館』と連絡ある科學的教材である。之によつて天文學的知識を得ると共に、言ひ知れぬ神秘感に打たれて幼稚ながらも一種の宇宙觀を抱くよすがともならう。

文章 (口語體 趣味的説明文)

文字及び語句

備

考

一、無數の星群

○寶石をちりばめたやうに……(巧みな形容、神々しい美しさ)

北海道

一、準備

二、北斗七星

○名前や番號があり……(驚くべき天文學の力)

中甸

天體圖 地球儀

1、見つけ方

○地平線から次第に見上げて……(具體的な説明の仕方、獨力觀察の歩を進める事ができる)

北斗七星

日本地圖等

2、柄杓形

○さうしたらどこか……美しい七つの星を探すことになしませう。(あくまでも子供心になつて共に探し出さうとする親切な態度)

北極星

二、連絡

三、北極星

○前に此の二つの星を結ぶ線……きつと一つの星が見つかります。(具體的な説明ときつと見つかるといふ

北極星

讀本卷一(33) ホシ

1、見つけ方

○航海の目あてとなつてくれたのは此の星です。(感謝の意をこめた書き振りに注意)

北極星

2、位置

○ほゞ真北にある星ですから……(北極を指示するに足る最も近き輝星)

中甸

(二〇一頁)

3、恩恵

○大空の外の星は……(北極星以外の星は……)

距離

三、挿繪

四、星の動き

○今どれか一つの星を東にさし出した軒端に……(具體的にして容易なる觀察方法)

無數

七月中旬の夜九時頃の北斗七星、北極星とそれを中心とする星座の圖。

1、觀察方法

○寫真機を北極星に向けて……(科學的な觀察方法)

無數

2、地動説

○かういふ風に星の動くといふのも……(地動説)

距離

北極星を中心とする星の動きを精巧な寫真機で撮つたもの。

五、いろいろの星

○大熊座(北斗七星とその附近にある幾つかの星の總稱)

無數

1、大熊座

○小熊座(北極星を入れて北斗七星に似た形をしてゐる)

無數

2、小熊座

(母親カリスト子のアルカスに絡まる傳説)

無數

3、龍座

○龍座(大小熊座の間をろく曲りくねつて連る十餘りの星)

距離

4、カシオペア座

○カシオペア座(北極星の右下、椅子形に連る五つばかりの星——いかり星——山形星とも言ふ)

距離

5、天の川

○天の川(七夕に關聯して親しみ深い、銀河とも言ふ)

距離

1、大熊座

○大熊座(北斗七星とその附近にある幾つかの星の總稱)

無數

2、小熊座

(母親カリスト子のアルカスに絡まる傳説)

無數

3、龍座

○龍座(大小熊座の間をろく曲りくねつて連る十餘りの星)

距離

4、カシオペア座

○カシオペア座(北極星の右下、椅子形に連る五つばかりの星——いかり星——山形星とも言ふ)

距離

5、天の川

○天の川(七夕に關聯して親しみ深い、銀河とも言ふ)

距離

第十九 京城へ

(全三時)

七月

要旨 疾走する車窓から眺める風光に朝鮮情緒を味はしめ、地理的觀念を養ふと共に内鮮融和の精神を深める。

教 材 夏休みを利用して二人の兄弟が仲よく京城へ旅する生活的表現の紀行文である。車窓に展開する半島の風物、それは決して外國のそれではなく同じ自國を旅する人ののんびりした心境が表現されてゐる。それに一半島人との會話、作者の感想などを織りこみ、巧みに朝鮮情趣と内鮮融和の氣持も漂はせてゐるあたり深い味がある。

觀

文 章 (口語體 紀行文)

文字及び語句

備

考

一、釜山 ○京城行の汽車が目の前に待つてゐる。(勇躍)

1、京城行に乗車 ○兄と私は並んで席を取つた。(兄弟の親密さ)

2、道づれになつた金俊泰 ○『どちらへいらつしやいますか』(一半島人の上品な流暢な日本語に親しみが湧く)

君 ○兄は其の人と早速仲好しになつて……(内鮮融和の活事實)

3、沿道の風物 ○いたる所水田がよく開けて……(朝鮮開發の狀況)

二、大邱 ○垣根にかけた白い干し物……(朝鮮らしい風物)

○『秋風嶺を越へるのです……一番難所だそうです』

名刺

沿道

麻

戰役

古戰場

大尉

連絡船

内地

一、準備

朝鮮地方地圖

關釜連絡船及び朝鮮の景觀風俗を示す繪畫寫真等

二、挿繪

(一〇七頁)

釜山港の岸壁に着いた連絡船金剛丸、左方に少し

<p>1、秋風嶺 2、特別急行列車 三、大田 1、お晝時の暑さ 2、廣い並木道 四、成歡 五、水原 六、京城 1、別離 2、京城到着</p>	<p>(氣壓、風向の關係で空の一難所) ○驛名を読むひまもなく……赤いカンナの花が後へ走つて行く。(素晴らしい速力を有する特別急行列車)此の列車(あかつき)と名づけられてゐる。 ○強い太陽の光が山島にぎら／＼と照りつけてゐる。 (お晝時の情景) ○廣い道路が……時には砂ほこりをあけて自動車も走る。(珍しい大陸的な景觀) ○岡の青葉がぐれにそれらしいものが見えた。(懐古の情) ○暑い日盛りに……田の草を取つてゐる。(いそしむ勤勞) ○『もう京城ですよ……』『もう京城ですか……』(文字通りの親しさと案外早く到着したといふ心持) ○『ではお別れですね、いろいろお世話になりました』(名残を惜しむ情と親切に對する感謝) ○もう京城の市中を走つてゐるのだ、家々の間を。(餘情のある巧みな表現)</p>	<p>下草 なだらか 旅客機 難所</p>	<p>見えるのは待合所。 (一一〇頁) 並木のよく植ゑこまれた廣い道路。(清州附近の田園風景) (一一三頁) 漢江の鐵橋、對岸の街は京城の一部。(龍山)</p>
--	--	-----------------------------------	--

第二十 僕の子馬

(全三時)

七月

要旨

新一の愛馬北斗に對する真情を味ひ、良馬の出来る所以を理解させて動物愛護の精神を養ふ。

教材

丹誠をこめて子馬の世話をした少年の生活敘事文で、新一の北斗に對する純愛の精神が北斗に反映して次第に良馬となつてゆくといふ感興の深い文である。これによつて子馬の習性や養育方法も大體に於て理解され、なほそこには人と馬とのいみじき生命愛の交離と生活の歡びが窺はれると共に更に少年の軍馬意識にまつはる健氣な愛國心の發露をも見る事ができる。

觀

文章 (口語體 敘事文)

文字及び語句

備

考

一、生まれた子馬

1、時期

○櫻の花の咲く頃でした。(日本人にふさはしい句、何とも言はれぬ感じを與へる)

2、父の喜び

○父はにこ／＼しながら……(抑へきれぬ喜びの表情、新一の喜びを期待する樂しみも表はれてゐる)

3、新一の喜び

○卷八までは『おとうさん』としたのを本巻では次に出て來る『祖父』などと共に『父』と出して用語上の進歩を見せてゐる。

二、子馬の飼育

1、祖父の好感と教へ

○僕はむちゆうになつて……かけこみました。(少年らしい心の躍らせ方)

○父はさも得意さうに……(自分の手柄でもあるかの様に)

壯

牝

忙しく

鹽(塩)

唱歌

歌ふ

骨組

得意さう

一、準備

讀本掛圖

放牧の有様を示した繪畫

寫真類等

二、連絡

理科尋四(22)馬

唱歌尋二 小馬

三、挿繪

2、北斗

3、馴れて來た

○父はしばらくだまつてゐましたが……(細い描寫、新一の態度を観察してゐる様子が窺はれる)

4、放牧

○ほう／＼よからう。一つやつてこらん。(親しみの深い勵ましの言葉、少年に取つては實にうれしい言葉である)

5、離乳

○第一は馬をよくかはいがつてやることだ……(馬飼育の要諦)

三、北斗との別れ

1、村一番の馬

2、二歳駒の市

3、惜別

4、前途祝福

○子馬の名は北斗ときまりました。(前出の北斗七星に因んで名づけられたのも面白く床しい)

○だん／＼僕になれて來ました。(愛は愛に應へるもの、心と心の相通するものである事の表現)

○六月になると……(青草萌え出て放牧の好季節)

○僕はせつかく……子馬が丈夫にならないのです。(新一の子馬に對する眞の愛情)

○それだけにかはいさも一そう深くなつて來ました。(手しほにかけたものを愛む情)

○『僕がかげ出せば……』『僕が止れば……』(快いリズムを湛へた對照句、こゝに兩者一體となつて魂の融合があり生命の歡びがある)

○お前がよくめんだうを見て……(賞讃の辭と自信の表現)

○さうして……意氣揚々と歩くでせう。出世を期待する心

○僕は北斗のために……(前途を祝福してやる日本少年の健氣な心持)

おくびやう

めき／＼

放牧

二歳駒

市

めんだう

手しほにかける

意氣揚々

(二二〇頁)

北斗が二回目の放牧に出された所、中央の二歳駒は北斗でモンベ姿の少年は新一。

第二十一 母馬子馬 (全二時)

七月

要旨 母馬子馬の間にかもされる親しき情愛、水邊に暮れゆく静かな夏の夕の情趣を味はせ、自然に親しむと共に文學的趣味を培ふ。

教 材 思想的には前課と連絡した小品で一幅の畫を思はせる詩篇である。本課の觀點は結局母馬と子馬の情愛にあらうがそれを取り巻く自然の隱微な動きを見逃してはならない。大自然に抱擁された母馬子馬、殊に母馬の慈愛に満ちた眼ざしと剽輕なしかもかはい、子馬の水を飲む様、三日月の影がゆらく、水の輪に明滅する光景、それらが一體となつて此の一篇の田園詩を形づくり掬めども盡きぬ詩趣が漲つてゐる。

觀

文 章 (口語體 童話的敘景詩)

文字及び語句

備 考

- 一、柳かけ
- 二、母性愛
- 三、水の輪
- 四、三日月の影
- 五、暮れてゆく

詩形は三句五聯

第一・三・五聯は(七)(五)(七・五)の韻律に成り第二・

四聯は(七)(五)(八・五)の韻律になつてゐて謂はゞ準定

型詩と名附くべきであらう。この詩は實景といふよりは

よほど或る場面を空想し、それを感傷的に理想化した表

現で多分に童話的である。

○『母馬子馬』(とかく並べ表した所、母子の情のビツ

タリ融合した寮園氣が醸し出される)

夏の夕ゆふべ

柳かけ

一、参考

教育家であり書家である

林利徳氏の

母馬子馬、沼の岸

夏の夕の柳かけ

母が番して子の馬は

ゆつくりゆつくり

水を飲む

圓く擴がる水の輪が

○夏の夕の柳かけ(涼味あふるゝ氣持の表現、母馬子馬の又とな慰安所)

○母が番して(母性愛に輝く母馬の尊い姿)

○ゆつくりゆつくり水を飲む。(強い母性愛に抱かれて

生の歡喜にふるへる子馬の可憐な姿)

○圓く擴がる水の輪が……(なだらかな表現)

○ゆらく見えたりかくれたり。(巧みな表現手法、ゆ

らくの語に快いリズムが感じられる)

○柳のかけが暮れて行く。(いつともなく次第に迫る夕

暮れの氣配、こゝに無限の餘情がこめられてゐる)

大體は第一聯の句をこゝに繰り返して、そこに幾ら

か時の動きを見せてゐる所に勝れた詩才が窺はれる。

一、挿繪

(一四頁)

柳かけで母馬が番して子

の馬が愛らしい恰好で水

を飲んでゐる所。

第二十二 秋のおとづれ

(全二時)

九月

要旨

秋は虫の聲から始る。今までの夏の強烈な刺戟から静かな秋の氣分に移つてゆく心を讀みとらせ新秋の自然に眼を向けさせて、虫の音と色や匂ひの季節の上の秋の訪れを感じさせ自然觀照の態度を養ふ。

教材

卷頭の『四月』と共に感想敘景文として、詩的な自然觀照の中に作者独自の批評的感想を織り込んだ出色ある名文である。この文章は専ら蟲の聲が主題旋律となつてゐる。そしてそれに伴つて前半には夏らしい景色を伴奏として後の半分はこの秋らしい景色を伴奏として描かれてゐる。全體として音樂的構想に出來上つた文章である。ツクツクボウシ、馬追ひ、こほろぎとかうした蟲の音に秋のおとづれを感じる田園趣味豊かな文であると共に、何となく一抹の淡い寂しさを感じさせるものがある。

文

章 (口語體 感想敘景文)

文字及び語句

備

考

一、殘暑

1、きびしい

2、ツク／＼ボウシ

ウシ

一、しのび寄る秋

1、宵の暑さ

2、秋の夜空

3、夜更け

○眞夏の暑さは誰もが覺悟してゐるが……(まこと人生の機微を穿つた表現)

○寒暖計は三十度を越へたがる。(擬人化した味のある表現)

○ツク／＼ボウシの聲を聞いた。(忍びよる初秋の氣配)

○どうやら熱氣を吐いてゐる。(よく／＼暑いといふ實感)

○晴れた夜空に……(秋の訪れを物語つてゐる)

歎聲

寒暖計

銀河

床を叩いて

口を出して

よひ

むつとする

中天

一、準備

秋の蟲の標本

秋海棠、萋の花等

二、連絡

唱歌尋四

讀本卷五(20)こほろぎ

蟲の聲

4、馬追ひ虫

三、秋が来た

1、日光

2、梢吹く風

3、かはいらしい秋海棠

4、早稲の穂

5、二百十日

6、こほろぎ

○思ひなしか屋根瓦が少ししめつて来る。(詩趣豊かな鋭敏な觀察眼、思ひなしかの語は含蓄が深い)

○障子に軽くばさと止つた。(どこまでも繊細な感觸、此の障子といふ純日本式建具が殊にふさはしい)

○秋だ秋だと鳴き立てるやうに思はれる。(推察であり希望であり念願である)

○もう何といつても秋である。(具體的な事例を呼び起さうとする所の極めて餘情の深い語)

○日光はかすかに黄色味を帯びて……(細かく鋭い詩的な觀照眼)

○梢吹く風……(さわ／＼は初秋の爽やかさ、思ひ出したやうには擬人的な表現)

○早稲の穂が出揃つて白く波打つ……(秋らしい景觀)

思ひなしか

あいきやう

よし

反射

よし

よし

よし

よし

よし

よし

よし

よし

よし

第二十三 袴 垂 (全三時)

九月

要旨 大盜袴垂を辟易せしめた藤原保昌の古武士の典型とまでいはれるその風格に感ぜしめ、心の力の如何に偉大なるものなるかを理會せしめる。

教 材 都の地を荒し廻つて當時の人々を戦慄せしめてゐた袴垂は、膂力衆に勝れた大盜であつたが、武將藤原保昌の沈勇豪膽の前には全く一たまりもなかつた。保昌は武勇絶倫にして膽力あり、しかも風雅な嗜みがあり寛恕の徳に富むといつた様な眞に血もあり涙もある古武士の典型で、前出の『八幡太郎』と一脈相通するものがある。心の力の如何に強いかを感じしむるに足る教材できびくした文語調の中に二人の息遣ひが惻々と胸に追つて一入感激と興味を深からしめるものがある。

文章 (文語體 敘事文)

文字及び語句

備

考

一、袴垂、或る通行人を襲ふ

歩み 至る

一、準備 讀本掛圖

1、笛吹き行く人

○身分いやしからざる人……(袴垂の食指大いに動いた事であらう)

業 是ぎ取らんとて

二、参考(原據) 今昔物語

2、袴垂の喜び

○笛を吹きながら歩み來れり。(風流人)

いやしからざる

宇治拾遺物語

3、通行人の悠然たる態度

○よき獲物かな。(雀躍した喜び、かなは感動詞)

よき獲物かな

大日本史列傳 第六十二 古今人物早引

○少しも氣に止むる氣色なし。(氣味悪い程の落ち着き)

氣をのまれ

歌舞伎劇脚本(市野原)等

○笛を吹きながら静かに見かへる。(心憎いまでの落ち着きと袴垂を子供扱ひにしてゐる豪膽さ)

二、恐しい一喝

○其の一聲に身のちぢむが如く覺えて……(武藝の蘊奥を極めた者の一喝、言ひ知れぬ迫力を覺える)

1、袴垂ちよみ上る

○ふるひながら答ふ。(保昌の底知れぬ威力)

氣色 氣おくれ

○保昌 平安朝時代の武人 攝津國平井の里に住み平井保昌ともいふ。頼光の客分として俗に四天王に對して一人武者と稱し、

2、大膽不敵なる人

○聞きたる事のある名なり……前の如く笛を吹きて行く。(大膽不敵)

よからぬ業とぞ

大江山や袴垂の逸話がある。大納言元方の孫、致忠の子である。

三、寛仁大度

○恐るゝ後に従ひて……(屠所にひかる、羊の心地)

○袴垂保輔 當時の巨盜、保昌の弟なりとの説あるも眞偽不明。

1、藤原保昌

○武名かくれなき藤原保昌なり。(驚きと恐れが一入増した事であらう)

2、保昌の情と説論

○綿入一枚を取出して袴垂に與へ、(保昌の奥床しさ)

○言ひたりとぞ。(『とぞ』は『とふ』とある『』と傳ふ』などの言葉を省略した文語獨特の措辭)

3、袴垂の告白

○よからぬ業して人を苦しむる事なかれ。(簡にして要を得た説論)

三、挿繪 (一三一頁)

狩衣様のものを着、烏帽子を冠りて笛吹きゆく人は保昌、野武士の様な武裝をし隙あらば切りつけんとするは袴垂。

第二十四 ひざ栗毛

(全四時)

九月

要旨

短き膝を栗毛の駒にかへて長い道中を旅する彌次郎北八物語を讀ませて二人の恬淡で滑稽な性格から醸し出す好笑諧謔の醍醐味を味はせ、劇的滑稽文學を鑑賞せしめる。

教材

この課は江戸時代の代表的滑稽文學十返舎一九の東海道膝栗毛から取材したもので、物語の主人公彌次郎と北八が江戸を後に足の向くまゝ明け暮れの東海道の旅を如何にものんびりと可笑しく滑稽に續けてゆく。小田原の宿、大井川、大原女と三場面を描いてゐるが眞面目に考へれば他愛のない話、馬鹿らしい話である。この可笑しさを一人讀んでは微笑ましくなり、大勢で讀んで呵々大笑の聲が出れば、既に諧謔の醍醐味を味つた事になる。之によつて當時の人情風俗、習慣等も察知し得るであらう。

文

章 (口語體 旅の敘事文)

文字及び語句

備

考

一、小田原の宿

1、江戸を由立

2、小田原

3、入浴

- 歩いたり、かごに乗つたり、馬に乗つたり……(昔の旅の不便さと暢氣さ)
- 妙な風呂です。(所謂五右衛門風呂で關西地方で多く用ひられてゐる)
- ふただらうと思つて取りのけました。(そつつかしい事である、無雜作に取りのける無頓着さが面白い)
- とんでもない風呂だ。(自分の粗忽を棚に上げてゐる所の面白さ)
- 聞くのもめんだうだと思つて。(北八らしい横着さ)
- 氣持よささうに歌を……(愛すべき樂天家)

踏沈めて
熱く
大變
都合
致し
ひざ栗毛
東海道
助け船

- 一、準備
東海道を示す地圖
かご、五右衛門風呂、蓮臺、大原女の繪畫等
- 二、参考(原據)
東海道上膝栗毛(十返舎一九)
- 三、挿繪
(一三六頁)

4、下駄ばきで入る

5、風呂の底をぬく

二、大井川

1、渡賃の交渉

2、にせ武士

3、化けの皮

4、逃げ出す

三、大原女

1、四條通

2、大原女

3、梯子を買はされる

4、北八の憤慨

5、京見物

- 『やあ助け船、大變々々』(驚愕)
- いや命だけは無事だが……(暢氣)
- 下駄ばきで風呂へ……(呆れ果てゝゐる様)
- 高い〜。(渡賃を安くさせやうといふ下心)
- かうして武士になるのだ。(突嗟の場合の機轉)
- お前はお供だつて來い。(彌次郎らしい獨斷)
- これ武士に向つて何たる無禮な言葉だ。(威嚴を保つ努力)
- 其の刀を見るがいい。(立腹と嘲笑をこめた語)
- 『は、大笑ひだ彌次さん、さあ行かう』(助け船)
- 四條通を……大原女たちが、(京都一の賑やかな街と野趣満々たる大原女と面白い對照)
- 『梯子なら買つてやらう幾らだ』『高い〜二百なら買つてやらう』(冗談、たかをくつた圖々しい言葉)
- 『やあまけるのか、情ない事を言ふ』(閉口の悲鳴)
- かうなると女は……(今となつてはいやと言はせない決意)
- 『これ北八、これがかついでくれ』(随分人をなめた圖々しい言葉)
- 『とんでもない……ばか〜しい』(北八の憤慨)
- 長い梯子をかつきながら京都の町を見物して歩き廻りました。(さぞ色々の失策や滑稽を演じたであらう)

とんでもない
蓮臺
脇差
身ども
人足
御同勢
上下
大原女
情ない事を言ふ
差合でかつ

風呂の底をぬいて悲鳴をあけてゐるのは北八、兩手をあけて驚いてゐるのは宿の主人、腹を抱へて笑つてゐるのは彌次郎、共に滑稽味たつぷりである。

(一四〇頁)

曲つた鞆袋を見て情氣かへつてゐるのは彌次郎、それ見よとばかりに啖呵を切つてゐる人夫の親方。戸外では助け船に乗り出さんとする北八。

(一四四頁)

梯子を差合でかついで京見物としやれた所。塔の見える京洛風景、大原女も犬も笑つてゐる。

第二十五 空の旅 (全五時)

九月

要旨 機上より見たる下界の景觀現寫の表現美を鑑賞せしめ、且つ空の旅の爽快味を想像せしめると共に文化意識を進め航空思想を涵養する。

教材 本課は第三『飛行機の發明』の發展して來たものと考へられ、航空時代のよき教材である。前課の『ひざ栗毛』は昔の旅、今日では空の旅と變る。立體的に發展してゆく人類文化の近代的例證の一つである。東京から大阪まで飛行機による通路の景觀描寫で、刻々に變化してゆく多趣多彩の景觀を全く目前に眺める様な心地して身の飛行機中にあるかの感さへ起つて來る。

觀

文章 (口語體 紀行文)

文字及び語句

備

考

一、東京出發
1、旅客機に乗る

○東京より大阪へ飛行機で——實に愉快だ。(豫想と歡喜と希望が横溢)

秋日和
整然 紙片

一、準備
東京より大阪までの地圖

2、機體空中に浮ぶ

○廣い飛行場が盡きて……もう空中に浮んでゐた。(老練な筆致、羽化登仙の氣持)

筆談
示した

日本旅客機航空路略圖
機上より撮つた地上景觀
飛行機の模型等

3、下界の景觀 (模型圖)

○『海だ船だ、たくさんの人家だ。』『森、人家、道路、島』(フルスピートを斷絛で見せた手法、速度の速い敘述は普通の手法ではピントが合はない、この手法全文に漲つてゐる)

玩具 濁流
川原 (カワ)

二、連絡
讀本卷九(3) 飛行機の發明

二、箱根山
1、同乗者の筆

○其の間を縫つて……飛行機の影法師であつた。(直觀から來る自然の表現、飛行機の動き)

貧弱、移動
束の間

發明
ノ (24) ひざ栗毛

談
2、偉大な箱根山

○談話は筆談が手まね、急に啞になつたと同様である。(才氣の閃めいた敘法)

數隻
隣席

三、參考
航空時代 鳥居清次
世界航空史に輝かしい一頁を飾つた大朝の神風號

3、蘆湖

○あの偉大な箱根の山々が……ひれ伏し始めた、九時二十分であつた、山といふものを空中から見下すと……(眼下に展開する壯觀の巧みな表現)

離陸
脚下

航研機、我が無敵空軍の花々しい活躍等

三、沼津から
1、駿河灣

○長い汀がまるでかんなで面を取つたやうに……(面白い味のある表現、白砂の長汀の遺憾なき表現)

天女
下界

四、挿繪
(一四六頁)

2、富士山

○富士はやつぱり横雲の上に……(入高きを思はせる)

影法師
地平線

東京羽田飛行場、六人乗旅客機と待合所。

4、三保の松原

○眞青な繪の具の水にクリームを……(繊細な詩的觀察)

機關士
ひれ伏す

(一四九頁)
機上より鳥瞰した蘆湖、横雲の上に聳え立つは富士の秀嶺。

四、名古屋
1、着陸

○まるで道中すごろくを……(飛翔の快速)

汀
あつけない

(一五二頁)
安倍川の景、整然と區劃された美しい田圃。

2、再び機上の人

○大地を踏みしめて歩いて見る。(大袈裟な表現の様だが機上より下りた直後の心持と態度がよく現れてゐる)

望むべくもない

(一五五頁)
延々と連なる鈴鹿山脈、白く光れるは崖の崩れた所。

3、鈴鹿山脈 (エヤポケットト)

○青空の末に墨のやうな雲(大阪特有の黒い空、煙の都)

エヤポケット
おびたゞし

4、奈良

○きゆうくつさうに自動車(廣潤な天空より見た實感)

おびたゞし

五、生駒山

○港の光景がな、めに浮上つて……(着陸前の實況)

おびたゞし

1、家の海
2、着陸

○羽衣を失つた天女のやうにとほくと歩く。(面白い譬喩、拍子ぬけのしたたよりない氣持)

おびたゞし

第二十六 もくせいの花

(全二時)

九月

要旨 清澄の秋、高くかをるもくせいの花に切々と思ひ出づる恩師の面影、懐しい花を愛づるゆかしい心のこほれ句ふ詩情を味はせる。

教 材 詩品の高い優雅な詩篇である木犀を中心に舊師の思ひ出を歌つた抒情詩である。學校の道すがら咲きこほれる木犀のほんのりした芳香をかぐにつけ思ひ出されるのは舊師の面影である。あの懐しい師の君を見送つた時にも「度この木犀が咲いてゐた、今頃何處でどうしてと擬つと見上げると葉越しに藍玉をとかしたやうな紺青のからりと晴れた秋の空、眩しいばかりの光を投げてゐる。餘情綿々舊師を思ふ純情が美しく盛上つてゐる。

文 章 (文語體 抒情詩)

文字及び語句

備

考

詩形は五句四聯から成り各聯共(五、五) (五) (七) (五) (七)の文語調純定型詩である。短歌的詠法も加味されて高雅な風格と抒情豊かな諧調を見せてゐる。

○見つゝ行く此の家の庭。(いつも見つゝ、ゆく親しみのある庭園)

○今年も咲きぬ。(毎年咲くが「今年も」咲いたといふ所に意味がこもつてゐる)

○金色に咲きこほれ、枝々にこほれ句ひて、(實に妙味

一、此の家の庭
もくせいの花、
今年も咲きぬ

二、もくせいの花

○今年も咲きぬ。(毎年咲くが「今年も」咲いたといふ所に意味がこもつてゐる)

香かざり 道すがら
見つゝ行く
咲きこほれ
ゆかしき
去年
なりけり

一、準備
もくせいの花の實物
二、参考
木犀を詠んだ和歌俳句
木犀のかをりほのかに
漂ふと見まはせば秋の
光のみなる 空穂

金色の花のゆかしさをり

ある表現、「咲きこほれ」「こほれ句ひて」とこほれの語を二度繰り返かへして用ひた所に木犀独自の花の姿態と句ひの高さとを巧みに表現)

○去年の今頃、(内容が二つある、一つはなつかしき師の君を見送つた事で他の一つはもくせいの花の盛りであったことである。なつかしき師の君、かをりゆかしき此の花、去年の今頃の情景が限りなく思ひ出される)

○盛りなりけり。(なりとけりの重用は古文調の高雅な趣)

○秋の空、香も高く、(ピッタリと調和した二語)

○もくせいは今年も咲きて……(第一聯第四、五句をそのまゝ用ひて次句に「師の君をしみる」思ふ」をもつて來てゐる所など、木犀の花と師の君との聯想的印象を一入強調する上にも亦詩をして結びを整へる上にも勝れた文學的手腕が窺はれる)

三、見送りし師の君
回想的な感情

四、師の君を思ふ
思慕の情

四、師の君を思ふ
思慕の情

○秋の空、香も高く、(ピッタリと調和した二語)

○もくせいは今年も咲きて……(第一聯第四、五句をそのまゝ用ひて次句に「師の君をしみる」思ふ」をもつて來てゐる所など、木犀の花と師の君との聯想的印象を一入強調する上にも亦詩をして結びを整へる上にも勝れた文學的手腕が窺はれる)

○もくせいは今年も咲きて……(第一聯第四、五句をそのまゝ用ひて次句に「師の君をしみる」思ふ」をもつて來てゐる所など、木犀の花と師の君との聯想的印象を一入強調する上にも亦詩をして結びを整へる上にも勝れた文學的手腕が窺はれる)

○もくせいは今年も咲きて……(第一聯第四、五句をそのまゝ用ひて次句に「師の君をしみる」思ふ」をもつて來てゐる所など、木犀の花と師の君との聯想的印象を一入強調する上にも亦詩をして結びを整へる上にも勝れた文學的手腕が窺はれる)

○もくせいは今年も咲きて……(第一聯第四、五句をそのまゝ用ひて次句に「師の君をしみる」思ふ」をもつて來てゐる所など、木犀の花と師の君との聯想的印象を一入強調する上にも亦詩をして結びを整へる上にも勝れた文學的手腕が窺はれる)

しみとく

別れ來てかへる夜路に
しらじらと木犀の花ち
りるたりけり 稿田

門のべの木犀咲きてこ
の日ごろ出で入りしけ
き吾に句へり 浪彦

木犀や母が教へる二絃
琴 子規

窓の月木犀の香にくも
りけり 冬葉

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

木犀にあげたる夜の障
子かな 閑魚

第二十七 橋 中 佐

(全三時)

九 月

要旨	忠魂義膽そのもの、如き橋中佐の壯烈な戦死に感激せしめて護國の軍への感謝の念を深め、皇國の爲に身命を捧ぐる國民的性格陶冶をなす。
教 材	陸の軍神と崇められる橋中佐の悲壯なる最期を叙した文である。中佐が一度は敵弾に倒れながら其の不撓不屈の精神は息を引取る瞬間まで君を思ひ國を思ひ部下を忘れずして、然も堅壘奪取の勇猛心に燃え盛つた我が典型的英雄の全貌が此の一篇に躍如として正に鬼神をして泣かしむる慨がある。 前巻の海の軍神『廣瀬中佐』と呼應して茲に海陸の双璧を成してゐる。
觀	

文 章 (文語體 敘事文「軍記物」)	<p>一、堅固な敵陣地</p> <p>二、突撃</p> <p>三、占領</p> <p>二、重傷</p> <p>一、敵の逆襲</p> <p>二、陣地の死守</p> <p>三、中佐負傷</p>
文字及び語句	<p>斬倒す</p> <p>日章旗</p> <p>堅く</p> <p>撃退</p> <p>皇太子殿下</p> <p>捧ぐる</p> <p>本壁</p> <p>冷えぬ</p> <p>絶えたり</p>
備 考	<p>一、準備</p> <p>日露戦役圖(遼陽戦)</p> <p>橋中佐の肖像、銅像や碑などの寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>唱歌尋四 橋中佐</p> <p>軍歌(遼陽城頭夜は更けて)</p>

三、壯烈な最期	<p>一、敵の喊聲</p> <p>二、君國に殉ずる喜び</p> <p>三、友愛の情</p> <p>四、軍人の魂</p> <p>五、立派なる最期</p> <p>六、軍神と崇めらる</p>
中佐、目を見張りて軍刀を杖に立上らんとす。(鬼神のやうな勇猛心)	<p>○敵の突撃の聲盛に聞ゆ。(敵の猛襲を物語る喊聲)</p> <p>○更に形を正して言へり。(皇室尊崇の念厚い中佐の態度)</p> <p>○『今日は我が皇太子殿下の生まれ給ひし日なり……軍人の本望なり』(誠忠の精神が烈々として輝いてゐる)</p> <p>○聯隊長、將兵の安否を……おのれの苦痛を知らざるもの、如し。(神にも比すべき大人格者)</p> <p>○軍刀はあるか。(魂を忘れぬ軍人らしい心持)</p> <p>○平生志堅く……部下をあはれむ心深かりき。(平生の模範的性行)</p> <p>○軍神とあがめらるもうべなりといふべし。(不朽の名聲)</p>
壯烈物ともせず	<p>突撃</p> <p>劍の林</p> <p>雨あられの如し</p> <p>すかさず</p> <p>ひるむ</p> <p>ざんがう</p> <p>我にかへる</p> <p>安否</p> <p>知らざるもの如し</p> <p>軍神</p> <p>うべなりといふべし</p>
三、参考	<p>日露戦役史</p> <p>橋中佐傳</p> <p>四、挿繪</p> <p>(一六二頁)</p> <p>中佐が首山堡東南高地の激戦に自ら先頭に立ちて軍刀を揮ひつゝ敵陣地に突撃する場面、時明治三十七年八月三十一日の未明、焼けつくやうな南滿の酷暑、皆白の覆のついた軍帽をかむり決死的突撃であるので背囊をとつて身軽になつてゐるのが目につく。</p>

第二十八 國語の力

(全三時)

十月

要旨 國語の懐しき有難味を痛感せしめ國語と國體、國語と國民性との關係を會得せしめると共に國語愛の精神を養ふ。

教材 日本精神を強調する本巻掉尾の雄篇で斯かる純然たる論文調は實に本課が最初である。文は先づ子供の記憶に懐しい子守歌から入り更に國歌君が代を掲げ、在外同胞の心情に及ぶ等條理整然一讀して襟を正さしめるものがある。之によつて國語と國體、國語と國民性、國語と愛國心などの生命的な關係を會得し、そこに國民の魂の母體たる國語の價值と偉力が今更のやうに痛感されて日本精神涵養の有力な契機たらしめる事が出来る。

文章 (口語體 議論文)

文字及び語句

備

考

一、國語と歌

1、なつかしい
國語 (子守歌)

2、尊い國語
(國歌君が代)

二、國語の恩恵
國語と生活

○快いゆめ路にはいつたことを思ひ出すであらう。(遠いほのかな思ひ出、國民的感情とリズムを持つた歌をきゝつゝ、快いゆめ路を辿る嬰兒の姿)
○思はず襟を正して……心から祈り奉る。(誰しも幾度となく味つてゐる實感、我々日本人の持つ純真な國家觀念)
○一日たりとも國語の力をかりずに生活する日はない。(國語は吾々の大恩人)

幼い
榮えます
學んだり
育て
佛
泉
教育
萬世一系
現在

一、参考
國語のために 上田萬年
讀本高等卷四(30) 國語と愛國心
最後のお稽古 フランス
ドニーデイ

三、國語の有難味

在外邦人の心情
(地獄に佛、愛國心の湧出)

四、國語の力
國語と國民性
(舉國一致)

五、國語の尊重

1、國民の使命
2、國民の魂の宿る所

○日本人となるのである。(日本人らしい性格、感情、常識を備へた立派な日本人)
○國語といふことさへ考へない人がある。(國語の有難味を思はず國語を輕侮するといふやうな意味深長な句)
○地獄で佛にあつた心地(佛敎思想から來た面白い譬喩)
○愛國の心が泉のやうに……(國語をなつかしむことは愛國心の發露)
○祖先以來の感情精神がとけこんでをり……國民として一身一體のやうにならしめてゐるのである。(國語は國民的精神的結合の糧)
○一つには……(他にいろいろの原因もあらうが、その有力な一つとして)
○國民でないときへいはれてゐる。(非國民の謂で愛國心のない人間)
○國語こそ國民の魂の宿る所である。(國民生命の母體)

唱へる
離す
奉唱
襟を正す
ともすれば
わかまへる
地獄に佛
神代
たぐひなき
國體
感情
一旦緩急
皇國
あづかつて
ゐる

第一 明治神宮

(全四時)

十月

要旨

本文を讀ませて、その清淨なる神域の神嚴感に打たれしめ、明治天皇、昭憲皇太后の御盛徳を景仰感佩する作者の至情に感激せしめ、以て敬神の念を高めると共に、忠君愛國の精神を養ふ。

明治神宮參拜記であるこの一篇に通ずるものは、明治天皇、昭憲皇太后の御高徳を追慕し奉り、皇恩の洪大無邊なるに感佩する民草の真情である。莊嚴なる神域、神氣身に迫る社殿、こゝに鎮ります御二柱の神靈を仰ぎ、御在世中の御生活の御質素に渡らせられ、御趣味の深くあらせられた大御心の數々を偲び奉る赤子の敬虔なる態度は、莊重なる文面に深く表現され、搖ぎなき國體の精美を感じしめる。

文章 (文語體「敬語」記事的感想文)

文字及び語句

備

考

一、明治神宮參拜

1、神域の莊嚴

2、參拜と御聖徳

二、寶物殿拜觀

1、寶物殿の遠望

2、御遺物拜觀

○先づ仰ぐ大鳥居に、菊花の御紋章を拜するかしこさ。

(劈頭仰ぐ大鳥居の菊花の御紋章に先づ心身の緊張を感じる)

○南參道に入れば：神域いよ／＼おごそかならんとす。

(歩一步深まり行く神域の神々しさが讀む者をして身の聖域にあるを思はせる)

○この時正面や、遠く拜する南神門のけだかさ、美しさ。玉垣に連る……しかも莊嚴のおもむきをそへたり。

御紋章

自ら

左折

一幅

白砂

内外の宮柱

御親ら

彼方

一、準備

讀本掛圖 東京市街圖

明治天皇、昭憲皇太后の御寫眞

二、連絡

讀本卷六(24) 東京地理卷一(2) 關東地方

三、舊御殿舊御苑の拜觀

1、舊御殿地舊御苑地の御由緒

2、舊御殿拜觀

3、舊御苑拜觀

(南神門の崇高美、莊嚴美を遺憾なく表現した洗練せる筆致)

○水屋の水に口すゝぎて……うやくしくぬかづく。

(心の底まで洗ひ清め神前にぬかづく作者の心持が想像される)

○とこしへに民安かれと……

○神風の伊勢の内外の……(如何に民草の上を御軫念遊ばされたことか——ありがたい大御心)

○今とこしへに神靈と鎮まりまして……わき出づるを覺ゆ。(御在世中の御聖徳を偲び奉つた作者が、更に今は世の守り國の鎮めと鎮まります御神靈に對し奉り強い感激に打たれたのである)

○西神門を出でて行く道は……寶物殿を望む。(神々しく清淨きはまりなき神域にふさはしい流麗な表現)

○御机は紫檀にも……恐れ多き極みといふべし。(『日常の御生活の如何に御儉素にわたらせられしか』に照應して、兒童に理解し易い御机、御視箱、御筆等によ

三、參考

國史下卷 明治天皇

文中の御製、御歌は何れも『社頭祈世』といふ勅題で明治二十四年の御作

四、挿繪

(二頁)

第三の鳥居の前にして南神門を望んだ所。

(四頁)

寶物殿の全景。中古式の正倉院に象り、材料築法は近代の精華を蒐めた校倉形の三つの倉として鐵筋コンクリートを主體とした建築。

(六頁)

舊御苑、池を隔て、隔雲亭を望む。

	<p>り御儉素な有様を具體化し感銘を深めてゐる) ○舊御苑に入れば……隔雲亭といふ。(風致に富んだ御苑の簡明適確な敘述) ○ほのかに承れば……いとかしこしや。(明治天皇、昭憲皇太后の自然を愛でさせ給ひ、また御趣味高き風雅な御心ばへが拜察される)</p>	<p>大御歌 ゆるぎなき 世 神かけて祈 る 鎮りまして みそなはず らん かたじけな さ そゝろに いざなふ 御由緒 ほのかに 何くれと</p>	
--	--	---	--

第一 霧

(全二時)

十月

<p>要旨</p>	<p>田舎の朝霧、街の夜霧の静かなしめやかな情趣を味はせ、自然觀照の態度を養ふ。</p>
<p>教材</p>	<p>朝霧と夜霧を謳つた敘景詩である。霧は詩として情趣深いものである。忽ちにして山、野、森、家、町、あらゆる物を包み覆ふてしまひ、そしてほの白い静かな濕めやかな氣分に浸らせる。本詩はこの霧を田園の朝霧、巷の夜霧に採りそれ／＼の情趣を深めてゐる。詩材に田園と都市、ほの白き朝霧と濕めやかな夜霧、月の如き日輪とうるむ燈火、野路の人影と大路の人影、もすの音と笛の音、濡れる幹とガラス戸等相對照して形式美を整へてゐる。</p>
<p>文 章 (定型詩「五四七調」敘景詩)</p>	<p>文字及び語句</p> <p>備 考</p>
<p>一、田園の朝霧 二、町の夜霧</p>	<p>日輪 ぶ おほろに しめやかに ちまた うるむ いづこ</p> <p>一、連絡 綴方</p>
<p>○しら／＼と朝霧野山をこめて(『しら／＼とおほろに朝霧流る』と照應する) ○谷間よりはいい出で(『はい出で』の語に一入の妙味) ○しめやかに夜の霧ちまたをつゝみ(『しめやかにひそかに夜の霧流る』に照應する) ○影のごと人去り人來る大路(まことに穿ち得た描寫)</p>	

第三 科學博物館 (全四時)

十月

要旨 科學博物館へ蝶を調べに行つた生活文を読ませて、科學博物館の施設の一斑を知らせ、科學研究の興味を起し、文化的施設に感ぜしめる。

教材の內容は卷九の『圖書館』と共に社會的文化的意義を有し、且つ理科的教材である。單なる見物記ではなく、兒童自ら或る問題を捉へ來り、理科的解決を得て満足する所に表現の焦點があり、又それが生活教材として意義を深からしめてゐる。無趣味な説明文に陥り易い内容を、興味を中心とした文章で、複雑な博物館の内容を容易に把握させ、科學研究も子供の科學として知らず／＼研究心を惹起するに至るであらう。

教 材 觀

文 章 (口語體 生活的表現の説明文)

文字及び語句

備

考

一、蝶を調べに科學博物館へ行つた

○珍らしい動物の標本が一ぱい並んでゐる。去年先生に連れられて來た時……思ひ出される。(かうした表現は文に情趣を與へると共に科學博物館の施設を説明し得て巧みな手法である)

二、館内の施設

1、動物の陳列室

○あまり多いのでまご／＼してゐると……親切に教へて下さつた。(博物館の施設が具體化されてゐる)

2、昆虫室―目的の蝶の標本

○順々に引出しをあげて見て行くと……『あつた、あつた。これだ。』「おほむらさき」だ。』なほさがして行くくと……わかつた。(作者の研究心が満足された喜び)

科學博物館
採集
參考書
暗室
實驗
寫す
ニッケル貨
屋上
鳥

一、準備
東京市街地圖 讀本掛圖
蝶の標本類 X線の寫眞
東京科學博物館の寫眞

二、連絡
讀本卷九(17) 圖書館
修身卷二(26) 恩を忘れ
るな(忠犬ハチ公)
理科四年(4) 紋白蝶

本を見つけ

た

3、きのこの標本室

4、エックス線の實驗

三、屋上へ出る

1、よい氣持

2、天體觀測室

が平明な敘述の中に表現されてゐる)

○大きなガラス箱の中に……どうしても模型とは思へない。(優秀な模型を紹介して科學博物館らしい)

○突然下の方から大きな聲が……『皆さんこれから……始ります』(博物館の文化的サーピスである。博物館の進歩がうかゞはれる)

○やがて電燈が消えると……何だか氣持が悪かつた。(高尚なエックス線の實驗を單純に興味深く表現されてゐる。又『僕が手を出すと』に作者の子供らしい態度と積極的な研究心がうかゞはれる)

○屋上へ出ると市内が一目に見えてすばらしい眺だ……深呼吸した。(館内から見晴しのよい屋上に出た時の眺で、明るく晴れやかに氣分が轉換して、文に變化を與へてゐる)

○天體觀測室の丸屋根に鳥が一羽止つてゐる。(天體觀測室を以て博物館らしい個性を表はし、鳥をとまらせて情趣を添へてゐる)

案内圖

陳列室

二階へ上る

動物の標本

講義室

昆虫室

鱗翅類

食用

模型

氣味が悪かつた

天體觀測室

三、參考

動物圖鑑

理科高一(5) 昆虫類

四、挿繪

(九頁)

動物標本室の一部。

中央角のある動物はアフリカ産の『がせらぐらんてい』

(一〇頁)

昆虫研究室。

(一一頁)

蝶の寫生圖。

上 からすあけは

下右 おほむらさき

下左 くらたまい

第四 足助次郎重範

(全三時)

十月

要旨 一死忠誠の大義を全うした足助次郎重範の事蹟を讃仰して、忠勇義烈の精神を鼓舞し、以て國民精神の振作をはかる。

教 本教材は太平記を原據とした足助次郎重範の弓の譽れを物語る軍記物語である。即ち足助次郎が一族共を引具して笠置山行在所の守りとして攻寄せる賊軍を一の木戸によく支へ、三人張の弓に十三束三伏の矢をつがへ、荒尾兄弟を同じ枕に討取つた武勇談である。一天萬乘の大君に命を捧けて奮戦し、遂に賊軍に斬られて行つた重範の忠烈こそ、日本國民の鑑といふべきである。行文の雄渾はよく太平記の筆致を傳へ、香を移し、調子を現してゐる。又事件を活寫するために現在法の表現を採られてゐる。

文 章 (文語體 敘事文)

文字及び語句

備

考

<p>一、賊軍笠置山にせまる</p> <p>1、重範一の木戸を守る</p> <p>2、賊七萬餘一の木戸に迫る</p> <p>(時代、場所) 二、重範の奮戦</p>	<p>○賊はその勢七萬餘……一の木戸にせまり来る。(ひしひしと押寄せる賊の大軍の様子がまのあたり浮んで来て息づまる様な實感を起させる生々とした表現)</p> <p>○時に重範木戸の上なる櫓に上りて、名乗りけるは『三河國の……一筋受けてごらんじ候へ』(雄々しくも勇しい重範の武者振りが眼前に躍動する)</p> <p>○三人張の弓に……其の場に死す。(重範の物すごい弓勢とそのすばらしい腕の牙えにふさはしい雄渾な文の</p>	<p>未明 三河國 眞逆さまに 仕り 眞向 眉間 陥り 六條河原 行在所</p>	<p>一、準備 笠置山附近地圖 讀本掛圖</p> <p>二、連絡 讀本卷六(14)千早城 ノ卷七(13)錦の御旗 國史上卷(22)後醍醐天皇</p>
---	--	--	--

<p>1、荒尾九郎を射殺す</p> <p>2、荒尾彌五郎を射殺す</p> <p>三、重範の壯烈な最後</p> <p>1、落城―重範捕へられ斬らる</p> <p>2、忠義にかをる弓矢の譽</p>	<p>調子に注意)</p> <p>○十三束三伏、前よりも尙引きしほりて……兄弟同じ枕にたふれたり。(息もつがせぬ緊迫した敘述、水際だつた重範の神技が思はれる)</p> <p>○これを戦の初として……遠攻めにするばかりなり。(官軍必死の防戦の様子をよく單純化して敘述されてゐる)</p> <p>○重範惜しくも捕へられて、六條河原に斬らる。(重範の最後を簡單に敘して哀切な餘韻をのこしてゐる)</p>	<p>おそひ 一の木戸 一天の君 萬乘の君 大和鍛冶 矢じり 三人張の弓 十三束三伏の矢 甲 矢面 御弓勢 ためし候は 雲霞の如き 賊兵</p>	<p>地理卷一(5)近畿地方</p> <p>三、参考 原據―太平記卷三『笠置軍の事』</p> <p>四、挿繪 (一五頁) 重範の奮戦。 重範のいでたちは、頭に侍烏帽子をかぶり、身に鎧、手に籠手、脚には脛當を當て、獸皮を用ひた貫をはいてゐる。腰には陣刀を帯びてゐる。 荒い棚、楯、急な山などは要害笠置城を思はしむ。</p>
--	--	--	--

第五 水兵の母 (全三時)

十一月

要旨 水兵の母の熱烈なる愛國心に感激せしめ、且つ士官、水兵等に見る義勇奉公の赤心に感動せしめて、國體觀念の養成に資す。尙候文の讀解力をも養ふ。

教材 本課は海戰目錄から採られた軍國美談中の美談である。即ち母一人子一人の貧しくわびしい生活の中から、その一人子を出征せしめて、しかも切なる母性愛の私情を抑へ、『一命を捨て、君恩に報いよ』と激勵する老母の手紙からまる高千穂艦内の一水兵と某大尉の話で、共に挺身難に赴かんとする烈々たる愛國心のあふれる美談である。一死報國を訓ふ母、理あり情ある大尉の教訓、一死奉公の熱情に漲つてゐる水兵、共に世の龜鑑とすべきものである。

文章 (口語體「候文」敘事文)

文字及び語句

備

考

<p>一、大尉水兵を叱る (時場所)</p> <p>1、一水兵手紙を讀んで泣く</p> <p>2、大尉の叱責</p> <p>3、水兵の辯解 (手紙を差出す)</p>	<p>○『こら、どうした。命が惜しくなつたか……兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ』(大尉の叱責は臍を衝く鋭さを持つてゐる。たてつけに一喝し疊みかけ詰めよつてこの痛責も、國を思ひ部下を思ふ至誠のあらはれである)</p> <p>○水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を眺めてゐたが、(大尉の叱責のあまりな鋭さに、呆然としてゐる水兵の様子が目に見えるやうである)</p> <p>○『それは餘りなお言葉です……これをこらんなさい』</p>	<p>某大尉 妻子 男子の面目 帝國 由 殘念 報ゆる 心願 観察</p>	<p>一、準備 極東方面地圖 讀本掛圖</p> <p>二、連絡 讀本卷四(3) 海軍のいさん</p> <p>〃 卷六(10) 神風(昔の海戰)</p> <p>〃 (22) 潛水艦</p>
--	---	---------------------------------------	---

二、母の手紙

- 1、母の殘念
 - 2、村の方々の親切
 - 3、八幡様に日參
- 三、大尉のをしへ
- 1、大尉の教訓 (感激と温情)
 - 2、水兵につきりと笑つて去る

と言つて、其の手紙を差出した。(大尉の叱責が誤解によるものであることに氣付いた水兵が、一切を辯解するかはりに手紙を差出してゐる。誰からの手紙とも書いてないところに敘述機構の妙味がある)

○『聞けば、そなたは……よく／＼お察し下された候』

一讀老母より來た手紙であることがわかる。一句々々烈々たる水兵の母の奉公の精神のあらはれである)

○『わたしが悪かつた……此のわけをよくおかあさんに言つてあけて安心なさるやうにするがよい』(水兵の母の精神に感激した大尉のこの親切な言葉に、水兵はどんなに満足し喜びを感じたことであらう)

○水兵は頭を下けて……につこりと笑つて立去つた。(誤解が解けた、自分の愛國の赤誠も認められた、更に近い中に目ざましい働きをする機會があることをさへ慰められた水兵の歡び、満足を『につこりと笑つて』の一語に如實に表現されてゐる)

出會はない め、しい振舞 言葉鋭く かく別の働 出で候ぞ 候はずや そなたのふがいなき事 胸は張りさくるばかり 日參 心願 つゆ思ひ申さず もつとも したゝめしか 上官 働目ざましい

〃 卷九(8) 軍艦生活の朝

綴方(水兵の返書)

三、參考

原據—小笠原長生著 海戰目錄『若水兵』

國史下卷(51の四) 明治二十七八年戰役

支那事變に於ける軍國の母美談

第六 南洋だより (全五時)

十一月

要旨 次第に發達して行く我が南洋群島に關する自然並に人文の地理的認識を深め、海外發展の雄圖を鼓舞し、併せて南國情調の平易にして流麗な文學的表現を鑑賞せしむ。

教材 本文は横濱からサイパン島へ、それからテニアン、ヤップの島々へ、更にパラオ島へとマングローブの青葉薫る南洋群島を周遊した印象記で、兒童を對稱とした趣味横溢の通信文である。即ち南洋群島の自然の美しいこと、産業上有望なこと、及び次第に發展して行く現状を述べ、南洋への關心と興味をそゝりながら、全體として現代日本の發展的精神を具現してゐる。

觀

文章 (口語敬體 書翰的紀行文)

文字及び語句

備

考

- 一、サイパン
- 二、五日目サイパン着
- 三、真夏の氣候
- 四、ガラパンの町
- 五、公學校の子供

○サイパンはさすが南洋の玄關口と……自動車も通つてゐます。(豫想を外れた驚きの中にその發展を敘す)

○公學校ではちやうど學藝會の最中でした。……すつかり感心させられました。(島民の同化を物語る具體的な敘述)

○面積約百平方籽……それがほとんど皆甘蔗島です。(内地人の力強さが感ぜられる)

○第一海の色が何ともいへない美しさを見せます……想像されるでせう。(熱帯の海の美しさにまさる洗練さ)

生活程度
讀本
獨唱
面積
耕地
滿洲
至極
赤道
濃厚

一、準備
南洋群島地圖
南洋風景寫真
讀本掛圖
熱帶産動植物の標本

二、連絡
讀本卷七(25) 横濱港
〃 卷八(3) 吳鳳
〃 (21) ホノル、の一日

二、テニアン

- 1、南洋の寶島
- 2、内地人の活躍

れた美しい表現)

○遠くで見た所はたゞ一續きの小山ですが……中はまるで湖のやうです。(濃緑の島々、深さによつて色の異なる海水の美しさ、海底の珊瑚礁の浮出している様子など手にとるやうな美しい表現)

○そこに南洋廳があり……この邊でした。(南洋情調の濃やかなコロールの大道の敘景)

○内地人の商店や家庭では……きつとびつくりするだらうと思ひます。(島民が今は文化人の仲間入をしていることを明治節の運動會に青年たちが陸上競技をやることによつて證明してゐる。又『どうしてどうして』は強い否定でしかも一種の親しみの感が含まる)

湧上る
想像
雜貨
文化人
競技

三、參考
地理卷二(5) 南洋委任統治地
動物圖鑑 植物圖鑑
石貨―南洋廳は貨幣として使用を禁用してゐる。
スコール―熱帯性の驟雨

- 1、カナカ族の風俗

○内地人の商店や家庭では……きつとびつくりするだらうと思ひます。(島民が今は文化人の仲間入をしていることを明治節の運動會に青年たちが陸上競技をやることによつて證明してゐる。又『どうしてどうして』は強い否定でしかも一種の親しみの感が含まる)

横濱の埠頭
南洋の玄關
内地風

四、挿繪
(二五頁)
ガラパンの埠頭。服装や影や明るさに注意すると南國らしい。

- 2、熱帯の海のすばらしさ

○内地人の商店や家庭では……きつとびつくりするだらうと思ひます。(島民が今は文化人の仲間入をしていることを明治節の運動會に青年たちが陸上競技をやることによつて證明してゐる。又『どうしてどうして』は強い否定でしかも一種の親しみの感が含まる)

寄港
原始的な風俗

(二六頁)
南洋群島地圖。アングウル島は燐礦で有名。

- 1、珊瑚礁
- 2、コロール島に上陸

○内地人の商店や家庭では……きつとびつくりするだらうと思ひます。(島民が今は文化人の仲間入をしていることを明治節の運動會に青年たちが陸上競技をやることによつて證明してゐる。又『どうしてどうして』は強い否定でしかも一種の親しみの感が含まる)

珊瑚礁
水道
錦裝道路
官舎

(二八頁)
テニアン甘蔗島。人と比較せよ。

- 3、群島統治の中心地

○内地人の商店や家庭では……きつとびつくりするだらうと思ひます。(島民が今は文化人の仲間入をしていることを明治節の運動會に青年たちが陸上競技をやることによつて證明してゐる。又『どうしてどうして』は強い否定でしかも一種の親しみの感が含まる)

剝製
便船
人喰人種

(二九頁)
カナカ族の風俗。
男は『ソー』と云ふ禪を女は『オン』と云ふ腰袋をまとふ。穴のある丸いものは石貨である。

- 4、おみやげ店

○内地人の商店や家庭では……きつとびつくりするだらうと思ひます。(島民が今は文化人の仲間入をしていることを明治節の運動會に青年たちが陸上競技をやることによつて證明してゐる。又『どうしてどうして』は強い否定でしかも一種の親しみの感が含まる)

人喰人種

(三二頁)
パラオ諸島礁湖内の光景

- 5、島民の青年たち(文化)

○内地人の商店や家庭では……きつとびつくりするだらうと思ひます。(島民が今は文化人の仲間入をしていることを明治節の運動會に青年たちが陸上競技をやることによつて證明してゐる。又『どうしてどうして』は強い否定でしかも一種の親しみの感が含まる)

人喰人種

(三三頁)
パラオ諸島礁湖内の光景

第七 朝 顔 に (全二時)

十一月

風雅な千代の俳句を讀ませて、句の有つ自然觀照の詩趣を味はせ、文學的趣味を養ひ創作心を培ふ。

卷九の一茶の句の延長として千代の作品を採られてゐる。何れも平明で、兒童でも大體句意が解釋せられるやうなもので、初期の俳句としてはふさはしいものである。五句共に女性の優しい、美しい心持の現れた詩趣に富んだ句である。終の冬の句を除けば何れも秋の句で、季語がはつきりと示されてゐる。『朝顔』『秋の風』『月の夜』『月見』『雪見』がそれである。この季語により聯想が働き、十七字の句の天地ながら、其處に無限の詩趣が生ずるものであるから、こゝを十分に指導して味はしめたい。

教 材 觀	文 章 (俳句)	文字及び語句	備 考
一、朝顔の句 井戸端の朝顔に よせる同情 二、秋の風の句 木から物のこほ れる音と秋風 三、月の夜の句 月夜ときりぎり	○朝顔につるべ取られてもらひ水 (優しい同情深い女性特有の精神美の發露であるとするとき、そこに相當句はしさを感ずる句) ○木から物のこほるゝ音や秋の風 (秋らしい情趣に富んだ句——『木から物のこほるゝ音』によつて却つて秋の閑寂を感じさせてゐる) ○月の夜や石に出て鳴くきりぎりす (自然描寫の巧みな詩趣の深い句——『石の上に出て鳴	つるべ こほるゝ音 や 月の夜や 月見かな 雪見かな	一、連絡 讀本卷九(11)雀の子 二、參考 原據—千代尼句集、俳諧 松の聲 千代の小傳 千代は元祿十五年二月 に加賀國松任の福増屋

四、月見の句 秋の月の美しさ 五、雪見の句 雪でころぶ面白 さ	くきりりゝす』を描出した所に月の明るさ、あたりの明るさが出てゆかしい俳味がある) ○何着ても美しうなる月見かな (女らしい感覺と情緒になる優しい句——『何着ても』といふ所に女らしい觀方がある) ○ころぶ人を笑うてころぶ雪見かな (子供の最も喜びさうな滑稽味のある句、どつと起る笑ひ聲が聞え、雪にまみれた雪見の人の美しい姿が目につぶ)	六兵衛の娘として生まれた。六歳で『初雁やならべて聞くは惜しいこと』と口ずさんだ位で、師盧元坊に入門する時一夜を明かして句作に苦心し『ほととぎすほととぎすとして明けにけり』の一句により入門を許された。
---	--	---

第八 雨の養老 (全三時)

十一月

要旨 清新味のある紀行文の文學味を味はせ、養老の瀧を中心とした情趣の深い自然美を描寫した筆致の冴えを讀みとらせると共に、由緒ある名勝地としての養老を理會せしむ。

二人の友人が秋雨の一日、養老の仙境らしい氣分にひたり、歴史や傳説に古を偲び、且つ清冽爽快な瀧の自然美を讚へてゐる秀逸な紀行文である。單なる養老孝子の物語でなく、自然と歴史及び傳説とを配合調和する文學として表現されてゐる。又文中には二人の個性を充分に活かしつゝ、極めて自由な生き／＼とした態度で、感想を述べ批評を加へ、しかもそこに自然美の精彩を擲んだ流暢な美文に表現された點が多い。名所見物の紀行を第三者が書いてゐることになつてゐるが、紀行文としては變つた表現である。

文 章 (口語體 紀行文)

文字及び語句

備

考

一、秋雨の道を行く

1、養老驛下車

雨となる

2、仙境らしい道になる

二、靈泉

1、養老神社

○『まあ、何でもいゝ、だまつてついて來るさ』(名所見物に雨がよいと言ふのは恐らく天下に君一人だらうと言はれても平氣でかう言つてゐるところに伏線のあつたことを注意する)

○幸に雨はさして烈しくない。(雨とはいへ見物を妨げる程の降りでないことがわかる)

○足もとを清らかに流れる水が……人を奥へ／＼とさそつて止まない。(氣の利いた表現である)

○下枝の紅葉から……染めはしないかと思はせる。(作者の深い自然觀照で、雨の養老の情趣をよく表はして

養老 迫つて

仙境

紅葉 老杉

廻らした

清水 薪

瀧見

一、準備

養老附近の地圖(奈良縣よりの順路)

養老の寫真繪葉書

讀本掛圖

二、連絡

國史上卷 聖武天皇(奈良時代)

良時代)

地理卷一(4) 中部地方

2、靈泉

3、孝子の傳説

4、泉と改元

三、養老の瀧

1、瀧へ行く坂道

2、瀧を見つめる

3、土橋の上より瀧を見る

4、瀧壺

5、瀧の全貌

○『河井君雨の方が……うよく／＼してゐてね』『なるほど』と河井君は、うなづかざるを得なかつた。(雨の日の養老をたゞへ、先の『雨の方がいゝよ』といつた秋野君の言葉に照應してゐる)

○『あ、これがさうなのか……昔は酒だつたわけだね』『河井君その話もあるがね……やつぱり昔から水だつたのだ』(河井君が孝子の傳説を出し、秋野君が史上より靈泉説を説いてゐる點に注意)

○『どうともならないさ……表彰された一人だらうと思はれる』(河井君の疑問を秋野君がごく自然に解決してゐる)

○瀧へ行く坂道はぐつと急になる……孝子の姿が現れさうな氣がする。(瀧への木の下道が一層奥深く幽邃になつてゆく仙境の秀ぐれた表現)

○一步一步進むにしたがひ……完全な姿を現す。(如實の表現、木立が移動してが特によい)

○大空から勢よく落下する……白絹のやうに細やかである。(こゝに於て作者は瀧の全貌を紹介してゐる、よく瀧の美と特徴をとらへたすぐれた描寫である)

響

特徴

塊

絶壁 水晶

天下

つま先上り

さして

軽く曲折

歎聲

こん／＼と

靈泉 改元

御表彰

すた／＼と

急ぎ足

白い絹をさ

らしかけ

瀧壺

三、参考(原據)

元正天皇の行幸及び改元
—(續日本紀)

養老孝子の傳説—(十訓抄、古今著聞集)

四、挿繪

(三九頁)

養老公園内道路の一部、

櫻楓の生ひ茂る下道。

(四〇頁)

養老神社境内にある靈泉

(四六頁)

養老の瀧。

第九 柿の色

(全三時)

十一月

要旨 全心全靈を打ち込んで、陶器の着色に苦心した柿右衛門の藝術的良心と、産業上の殊勳とに感銘せしめ、且つ創作發明に關する意識を高めしめる。

教材 夕陽に映ゆる熟れた柿の實の、珊瑚珠の如く真紅に輝ける天然色を見て言ひ知れぬ魅力を覚え、それからその赤色の焼付けに熱中し、あらゆる困難を排除し精魂を傾けて、研究又研究、遂に其の目的を達した柿右衛門の輝かしい創作苦心美談である。その崇高にして熱烈なる藝術愛と産業愛、及びあくまで進取的、研究的、努力的なる精神は、萬人に絶大なる感動と刺激を與へるに十分である。

観

文章 (文語體 敘事文)

文字及び語句

備

考

一、夕日に輝く柿の色に見とれる

○日はや、西に傾けり……さながら珊瑚珠の輝くに似たり。(印象的なすぐれた表現)
○この美しさにしばし見とれたる……又窯場へ引きかへしぬ。(暗示的な敘述)

鈴なり
砕き
歎息
奪はれて
弟子
投じたり

一、準備
九州地方地圖 柿右衛門
風の作品及び普通陶器
讀本掛圖

1、珊瑚珠の如き柿

○その日より喜三右衛門は、赤色の焼附に熱中し始めた。 (前の文に照應し、これによつて柿の實から何を思ひついたかを想像させる)

陶工

2、喜三右衛門忽ち窯場へ走る

○されど目ざす色は……果はたゞぼう然として歎息するばかりなり。(單純化した表現によりて慘憺たる苦心と呆然として自失する様をあらはしてゐる)

眼
鶏
血

二、連絡
地理卷一(9)九州地方

二、苦心研究の數

○苦心はそれのみにあらざりき……たはげとあざけり、氣ちがひとの、しる。(内外から迫つて來る苦惱の敘述)

精巧
甚だ
休らひぬ
思ひけん
赤色の焼附
現るべくも
あらす
ぼう然
おろそか
たはげ
一念
心も心に
あらず
やをら
こをどり
研究を重ね
工夫を積み
柿右衛門風
もてはやさ
る

三、參考
理科高一(25)陶磁器
○柿右衛門風
特長
(1) 意匠が獨創的
(2) 染付けの優秀
模様の色彩はすべて素地の色合との調和を考へ、簡潔鮮美繊細雄健な筆を以て巧みに染付を施し、天地自然を自由に描出し精緻犀利な筆致を以て線を描くことに巧妙を極めた。

年

- 1、日毎の失敗
- 2、生計の困難
- 3、人の嘲罵
- 三、研究に成功
- 1、狂氣の様に物を窯に投ず
- 2、窯の周圍を廻つて夜明けを待つ
- 3、成功の喜び
- 四、柿右衛門のほまれ
- 1、有田の陶工
- 2、柿右衛門風

○「薪、薪」と叫びつゝ……投じたり。其の夜……窯の周圍をぐるぐると廻り歩きぬ。(喜三右衛門の心持を想像しなければならぬ)
○夜は明けはなれたり……窯場を照らせり。(胸を躍らせつゝ、窯場を開かんとする時、さつと窯場を照らした朝日の美しさ、一種莊嚴な感じにうたれる表現。このあたりより作者の筆はますます、精彩を放つて來る)
○一つ又一つ……「お、」と力ある聲に叫びて立上れり。(緊張せるこの場合にふさはしい力強い表現)
○あゝ、多年の苦心は……しばし窯場にこをどりしぬ。(喜三右衛門の今までの苦心がこもつてゐるやうなこの咏嘆の聲、朝日に照らし出された窯場に一枚の皿をさへかけて狂喜雀躍する喜三右衛門の姿が浮出てる)
○喜三右衛門はやがて名を柿右衛門と改めたり。(柿の色を見出した時から赤色の焼付に成功するまでをこの一句によつてまとめてゐることに注意)

精巧
甚だ
休らひぬ
思ひけん
赤色の焼附
現るべくも
あらす
ぼう然
おろそか
たはげ
一念
心も心に
あらず
やをら
こをどり
研究を重ね
工夫を積み
柿右衛門風
もてはやさ
る

三、參考
理科高一(25)陶磁器
○柿右衛門風
特長
(1) 意匠が獨創的
(2) 染付けの優秀
模様の色彩はすべて素地の色合との調和を考へ、簡潔鮮美繊細雄健な筆を以て巧みに染付を施し、天地自然を自由に描出し精緻犀利な筆致を以て線を描くことに巧妙を極めた。

第十 稻むらの火

(全三時)

十一月

要旨 一村の人命を救つた五兵衛の絶大な郷土愛の義侠的犠牲的精神を感得せしめ、且つその神の様な直観と咄嗟の機智とに感激せしめる。

教材 本教材は小泉八雲(ラフカヂオ・ハーン)の『佛陀の島の落穂拾ひ』にある『生ける神』から採られた人命救助の美談である。即ち五兵衛が津浪を豫感し、咄嗟の間に一秋の全收穫を犠牲にして稲束に火をつけ、四百に餘る人命を救つた義心を叙し、村人達が感謝の涙を流しつゝ、五兵衛の前にひざまづいたことに及んでゐる。力ある流麗な表現手法と相俟つて、五兵衛の崇高な心事と態度には、全く敬虔の感に打たれて自然と頭が下つて来る。

文章 (口語體 敘事文)

文字及び語句

備

考

- 一、五兵衛津浪を豫感
- 1、無氣味な地震
- 2、下の村ではよひ祭の支度
- 3、海岸の様子
- 4、津浪の豫感

○『これはたゞ事でない』とつぶやきながら……無氣味なものであつた。(何か異變を豫感する様な重々しい獨言から突如として筆を起し、大きな災の前兆を思はせる地震の無氣味さを描き出したのは巧妙な敘述機構である)

○村から海へ移した五兵衛の目は……黒い岩底が現れて来た。(風と反對に沖へくと動く波、海岸にあらはれた廣い砂原、黒い岩底を見た瞬間五兵衛の脳裡には電光の如く、次に来る異變が閃いたにちがひない。緊

救へる
没して
薄暗く
地鳴り
經驗
無氣味
よひ祭
津浪
村もろ共

一、準備
津浪の悲惨な状態を示す
寫真類 讀本掛圖

二、參考
原據—小泉八雲(ラフカヂオ・ハーン)著の『佛陀の島の落穂拾ひ』にある『生ける神』

- 二、稻むらに火をつける
- 1、五兵衛稻むらに火をつける
- 2、山寺の早鐘
- 3、村人かけつける

張した瞬間の力強い表現)

○『もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ』……沖の方を眺めてゐた。(半歳の辛苦の結晶を火にして村人の命を救はうとする五兵衛、何と言ふ尊い精神であらう。この瞬間五兵衛の大きな愛の精神は最高頂に達し火と燃え上つてゐるのである。それだけにこのあたりの表現も一きは光彩を放つて、風にあふられてあがる火の手、稻むらに火をつけてまはり、やがて松明を捨て、失神したやうに沖を眺めてゐる五兵衛の姿、まるで名優の舞臺を見るやうである)

○高臺から見下してゐる……もどかしく思はれた。(如何にもよくこの場合の情景と五兵衛の心持を表現す)

○集つて来た人々は……代る／＼見くらべた。(情景が目の前に見えるやうな適切な表現)

○たそがれの薄明りを……押寄せて来た。『津浪だ』(雄渾な筆致の巧みな描寫、又『津浪だ』の叫聲にこの異變を集めてゐる)

○海水が絶壁のやうに……一時何物も見えなかつた。(津浪襲來の凄愴さを如實に表した力強い表現の迫力)

一刻も猶豫
出來ない
失神
早鐘
莊屋
もどかしく
うつちやつ
ておけ
見ろ
たそがれ
のしかゝる
百雷の一時
に落ちたや
うなとゞろ
き
山手
ゑぐり取ら
れて

其の實話は安政元年十一月五日紀伊國有田郡廣村を襲ふた津浪の災禍に際しての濱口儀兵衛の献身的な活動である。

小泉八雲は西曆一八五〇年にギリシヤに生まれ、若くして父母に死別し、二十歳で渡米、明治二十三年我が國に渡來し終に永住し、其の文才を以て日本を海外に紹介した人である。

地理高二(3) 海洋

- 三、恐しい津浪村を襲ふ
- 1、五兵衛の指さす
- 2、津浪村の上を荒狂ふ
- 四、村人の感謝
- 1、村人呆然と

○海水が絶壁のやうに……一時何物も見えなかつた。(津浪襲來の凄愴さを如實に表した力強い表現の迫力)

山手
ゑぐり取ら
れて

地理高二(3) 海洋

<p>してゐる 2、稲むらの火 又もえ上る 3、村人五兵衛 の前にひざ まつく</p>	<p>○人々は自分の村の上を……海は進み、又退いた。(表 現のうまさ) ○高臺では……たゞあきれて見下してゐた。(果然自失 我が身の助けられたのにも気がつかない村人が目に見 えるやうである) ○稲むらの火は……ひざまづいてしまった。(稲むらの 火は五兵衛の至高至大な愛の精神の現はれである。稲 むらの火に我にかへつた村人の目には、五兵衛がどん なに尊くうつゝたことであらう。感激的な光景を描い た餘韻深い表現)</p>	<p>あとかたも なく 我にかへつ た</p>	<p>四、挿繪 (五五頁) 五兵衛稲むらに火をつけ る。 (五八頁) 大津浪。 雄渾な墨繪の太い線に一 入の迫力が感ぜられる。</p>
---	---	-------------------------------------	---

第十一 朝鮮の田舎

(全三時)

十二月

<p>要旨 朝鮮の平和な田舎に於ける楽しい子供の生活に、自らなる内鮮融和の寮圍氣を感ぜしめ、又素朴な農家の生活に見 る和やかな家庭愛と勤勞振りを感得し、併せて自然と人生の文學を鑑賞する。 本課は卷九『京城へ』を受けて、朝鮮の自然人生を具體化した教材で、地理的意義を有すると共に、その自然の中 に營まれる兒童家庭生活を表現した田園文學である。即ち『秋』では村に住む子供の生活の歡びを描いて、内 鮮融和の和やかな寮圍氣を醸し出し、『冬』では文化の波を餘所に、昔ながらの素朴な生活を營みつゝ家庭愛の温 かさにも豊かな朝鮮情調が溢れた教材である。</p>	<p>教材 觀 文 章 (口語體 敘景文)</p>	<p>文字及び語句 備 考</p>
<p>一、朝鮮の田舎の 秋(郊外) 1、紺青の天空 2、とんほ取り 3、夕ぐれの村 4、雁の群が渡 る (一郎と貞童 の仲よし)</p> <p>○秋の空は實に高い。さうして色が深い。……もうこし の葉をかさ／＼と秋風がゆする。(田舎の秋の風景を 敘したもので、高い空、深いその色、もうこしの葉を ゆする秋風に秋の情趣が感ぜられる) ○どの家も温突をたき出したと見えて……みんな赤い夕 日を受けてゐる。(朝鮮風景が一段と個性的に表現さ れてゐる。温突の紫色の煙、その煙の中に藁屋根の浮 いて見える情景、屋根に干してある真赤な唐辛、高く 伸びた黄色なポプラやアカシヤなど朝鮮の地方色が、</p>	<p>朝鮮 田舎 秋 紅葉 息子 紺青の天空 もうこし 駐在所 すいとそれ</p> <p>一、準備 朝鮮の風俗繪葉書や寫眞 讀本掛圖 二、連絡 讀本卷九(19)京城へ</p>	

二、朝鮮の田舎の

冬の夜(家)

1、冬の夜の戸外の寒さ

2、温突部屋の

おぢいさん

の寝物語

3、別な部屋で

親子がかます織ときぬ

たを打つ

いかにも鮮かに描寫されてゐる。——『あざやかな黄色』と名詞止めにしたのは表現の一變化)

○豆の葉の柄で造つた蟲かごとんほを入れた。

○市場がへりの朝鮮馬がけた、ましく鳴いて過ぎる。

(共に朝鮮色の見られる描寫)

○『雁々、わたれ……仲よくわたれ』一郎と真童が空に向かつて歌つた。(雁を見て歌ふ二人の心は雁の如く

仲よく結ばれ内鮮融和の楔となるであらう)

○夜になつても薄青い空……ぬらつと立つてゐる。(寒い朝鮮の冬の夜が描かれてゐる——主観的な表現)

○ぼこん、ぼこんといふ音が……寒さが、骨身にしみて

しいんとする。(水がめの音をきいて水汲女を想像して寒さを感じてゐる所で、朝鮮でなくては見られぬ情景である。『音が通つて行く』とは如何にも言ひ得て妙である。この『しいんとする』の語には又徹底的な寒さが思はれる)

○別な部屋では息子を相手に父がかますを織つてゐる。……話しながら二人の手は器用に動く。(朝鮮人の勤

勉ぶりを描いてある)

地獄

極樂

温突

たうがらし

水がめ

骨身にしみ

魔物

かます

器用に動く

きぬた

三、参考

『とんほ』の童謡は朝鮮のものを意譯したもので『雁』の童謡は内地のものである。

『魔物』とは、朝鮮では『トッケビ』といつてまことにいたづら好きの魔物だとされてゐる。

○母が娘を相手にきぬたを打つてゐる。(清潔を好む朝鮮人の民族性が示されてゐる)
○母が棒を取つてとんと調子を取つた。とんからとんから、調子のよい音が流れ出した。(餘情の深い結びである。『とんからとんから』の擬音が特に秀ぐれてゐる)

第十二 水彩畫

(全二時)

十二月

要旨 楽しかつた夏の思ひ出に満ちた詩情を味はせ、豊かな餘情を感得せしむ。

教材 觀 雪のちらつく或る日、この夏かいた水彩畫をふと見つけて、夏戀しさの念にかられ、つき／＼と走馬燈の様に浮かぶ愉快な夏の思ひ出を叙した兒童の生活詩であり、純抒情詩である。過ぎし夏を追憶して一種の感傷的な甘い思ひ出にふけるところに本詩の主旨があるが、兒童はどうしても印象的部分的な所に氣を取られて、全體的考察がおろそかになるものであるから、主旨の把握は兒童として容易でないだらう。この點に注意して作者の氣持を十分に味はせたい。

文章 (口語詩「七五調」抒情詩)

文字及び語句

備

考

<p>一、夏こひし 1、夏かいた水彩畫</p>	<p>○此の夏かいた……夏こひし。(『夏こひし』の一句に 夏の日の生活をなつかしむ心が強く現れてゐる) ○青葉のそよぎ……血の色よ。(『この夏かいた水彩畫』 から想ひは夏の日の生活へ遷る) ○町のいとこが……別れたことも思はれる。(追憶は町 の従兄弟につゞく。『ついやらないで』の『つい』の 味が深い) ○ふとゑがき出す……雪が降る。(『ふとゑがき出す夏</p>	<p>夏の夢 水彩畫 夏こひし 青葉のそよぎ ふとゑがき出す夏の夢</p>	<p>参考 北原白秋氏 『吹雪の晩』 富原義徳氏 『風の小鳥』</p>
<p>二、町のいとこの思ひ出</p>	<p>○町のいとこが……別れたことも思はれる。(追憶は町の従兄弟につゞく。『ついやらないで』の『つい』の味が深い)</p>	<p>青葉のそよぎ ふとゑがき出す夏の夢</p>	<p>参考 富原義徳氏 『風の小鳥』</p>
<p>三、夏の夢、外で</p>	<p>○ふとゑがき出す……雪が降る。(『ふとゑがき出す夏</p>	<p>夏の夢 水彩畫 夏こひし 青葉のそよぎ ふとゑがき出す夏の夢</p>	<p>参考 北原白秋氏 『吹雪の晩』 富原義徳氏 『風の小鳥』</p>

は雪が降る

の夢』の一句がつよく響いて全詩を躍らせてゐる。又夏の思ひ出と雪降りを配した點一入に興味の深いものがある。餘韻豊かな句である)

第十三 久田船長

(全四時)

十二月

久田船長の責任感の強烈なこと、人道愛の深大なこと、並に平素の心掛の非凡であつたことに感銘せしむ。

本文は久田船長の高潔悲壯な心事、船長としての強い責任感を具體的に表現した教材である。即ち津輕海峽の連絡船東海丸は、夜の闇と濃霧と吹雪とに悩まされてゐた時、更にロシヤ石炭船の爲船腹を突破られ、船は刻々に傾いて行く。久田船長は船客乗組員をボートに分乗せしめ、自分は全責任を負ふて船と運命を共にし、最後の瞬間まで非常汽笛をならして、従容死についた殉職美談である。迫力に満ちた文は、内容の眞生命を遺憾なく表現して、切々として人の肺腑を衝くものがある。誠に神の如き久田船長の行爲こそ、大和魂の權化といふべきである。

文 章 (口語體 敘事文)

文字及び語句

備

考

- 一、東海丸の難航と遭難
- 1、夜半青森港を出帆
- 2、濃霧と吹雪
- 3、ロシヤ船と衝突
- 二、久田船長の悲

○津輕海峽特有の濃霧が……沖合にさしかゝつてゐた。
 (津輕海峽の荒天の模様を漸層的に敘し東海丸の前途を暗示してゐる)

○すは一大事……刻々と沈んで行つた。(危急の場合に於ける久田船長の處置が急迫した筆で敘述)

○船客も船員も……残つたのはたゞ船長一人であつた。(久田船長の責任感の強さと其の場の様子が會話と簡単な敘述によりて表はされてゐる)

○しかし船長は船橋の欄干に……運命を共にしようとする覺悟なのだ。(船長の悲痛壯烈な面影が目前に髣髴

郵便物
 濃霧 吹雪
 黑白 此方
 危急 一大音響
 船首 浸入
 確める
 嚴か
 悲痛

一、準備
 讀本掛圖
 津輕海峽附近地圖

二、連絡
 地理卷一(3)奥羽地方

三、参考
 久田船長は石川縣鳳至郡鵜川村の人、元治元年十一月生れ、明治二十六年

- 壯な最後
- 1、乗客船員をボートへ
- 2、悲壯な覺悟
- 3、船長、船と共に沈没
- 4、乗客船員の過半救助
- 5、世人の感激
- 三、船長の心掛と其の妻
- 1、妻への訓
- 2、立派な妻の態度

する。痛ましい情景)

○「船と運命を共にするのは……お前たちの務ではないか」(責任を一身に負ふて船と運命を共にしようとする毅然たる態度、悲壯な覺悟、肅然と襟を正さしめるものがある。この場合に適切な力強い表現)

○東海丸からは……久田船長もろ共に。(何と云ふ悲壯な又悲惨な場面であらう。文は「東海丸は沈没したのである。最後の瞬間まで非常汽笛を鳴らし續けた久田船長もろ共に」と倒置的表現によつて餘韻深く筆を收めてゐる)

○従容死についた……(この言葉は久田船長の最後を如實にあらはしてゐる)

○「船長たる者は……さもなければ歸らぬものと思へ」(平素からこの立派な覺悟があつてこそと、今更のやうに従容死についた久田船長の最後が思ひあはされ深い感銘をあたへる言葉である)

○だから東海丸遭難第一の電報を手にした時……取りみだした様子を見せなかつた。(この夫にしてこの妻ありの感を深からしめる立派な態度であつて、實に非常時に於ける日本女性の氣象を示したものと云ふべきである)

威嚴 沈没
 出航
 しげ模様
 進行 廻航
 船腹
 ようしや
 すは一大事
 部署
 わめき叫ぶ
 なだめ
 分乗
 船橋の欄干
 運命
 感激の叫び
 斷腸の思
 非常汽笛
 荒天の海上
 一期
 従容死につく
 萬一の場合
 取りみだす
 感動

東京商船學校を卒業した後、日本郵船株式會社に入社、明治三十六年東海丸船長となつた。

東海丸は噸數一千一百二十一噸、當日船員四十六名、船客五十七名、計百三名乗船してゐた中、生存者は五十七名であつた。

又東海丸に衝突した露國汽船はプログレス號といふ船であつた。

四、挿繪
 (七六頁)
 久田船長の肖像及び郷里鵜川村菅原神社境内に建てられた記念碑。

第十四 母の力

(全五時)

十二月

要旨 井上聞多の母の愛の死よりも強きことに感激せしめ、尊い母性愛の偉大な力を感得せしめる。

教材 致命的重傷をうけた聞多が、母の生死を超越した限りなき大愛にこもる偉大な力により、萬死に一生を得て、さめざめと病床に感謝の涙を流し、愈々決意を固め奉公の誠を捧げ、遂に維新有数の大人物となつたことに及んでゐる。維新の井上馨を考へる時、この母の慈愛こそ、誠に偉大な崇高な母の力である。尙この一篇には、忠あり、勇あり、義あり、情あり、愛あり、涙ある日本精神が横溢してゐる。母の愛と共に日本精神を心から感得せしめた。

文章 (口語體 敘事文)

- 一、毛利侯の御前會議
- 1、天下の風雲急 (時代)
- 2、御前會議に於ける井上聞多の主張
- 二、其の夜の遭難

○元治元年九月二十五日の夜である。あと四年で……ほとんど息苦しいまでに切迫してゐた。(幕末の風雲急を告げる時代の姿を具體化して緊張した調子の高い筆致である)

○其の堂々たる議論に反對黨はぐうの音も出なかつた。(聞多の堂々たる論陣、論辭の鋭さが想はれる)

○其の夜である。(重ねて其の夜であることに注意を喚起してゐる)

○下男淺吉の提灯にみちびかれながら……更に前から顔面を深く切込んだ。(井上聞多遭難の場面である。聞

文字及び語句
切迫 きつぱく 氣鋭 きえい
武備 ぶひ を主張 しやうちやう
下男 げなん 淺吉 せんきち
際 さい 顔面 げんめん
多量 たりやう 出血 しゅつちく
慈悲 じ 袖 そで
一滴 いつてつ の血 ち
友人 ゆうじん
必死 ひつし の看護 かんご

備考
一、準備
井上馨肖像講及び寫眞等

二、参考
原據—中原邦平述『井上伯傳』
國史下卷(50) 武家政治の終

- と母の慈愛
- 1、聞多やみ打にあひ重傷に運ばる
 - 2、聞多我が家に運ばる
 - 3、兄に介錯を頼む
 - 4、母の慈愛
 - 5、聞多母の愛に泣く

多を待ちうけてゐるた怪漢の襲撃する様子が雄渾な筆で鋭く表現されてゐる。手に汗をにぎるやうな妙筆)

○體中がなぐりつけられるやうに痛む……のどが乾いてたまらない。(聞多の苦痛の如實の表現)

○驚く農夫にやつと手まねで水をのませてもらつた聞多は、(重傷で物言へぬ聞多『のどが乾いてたまらない』に照應する)

○今農夫たちにかつがれて歸つた弟の……ほつとして見分けがつかぬ。(悲惨を通りこした場面の緊迫した表現。名詞止、改行の多い點に注意)

○尋ねられても聞多には答へる力がなかつた。……決然として兄は刀を抜いた。(何といふ悲痛な場面であらう。弟は自ら手まねで介錯を頼む瀕死の重傷、その苦痛を見かねて涙をふるつて決意する兄を遺憾なく表現した簡勁な敘述)

○『待つておくれ』それはしほるやうな母の聲である。……『待つておくれ。……此の母の心がすみません』(尊い親心からほとぼしり出た叫び聲である。大慈悲の母の真心が『しほるやうな母の聲』にじみ出てるのである)

○兄は刀を振上げた。其の時早く……抱きしめた。『さあ、切るなら、此の母もろとも切つておくれ』(聞

光榮 こうえい
明治維新
天下の雲行
御前會議
反對黨
向かふに廻
して
堂々たる議
論
ぐうの音
怪漢
のめらせた
重傷
氣丈
無意識
急報
押取刀
とりあへず
蟲の息
介錯
決然
治療

三、挿繪
(八六頁)
井上聞多の母。
(八七頁)
遭難當時に於ける井上聞多。

<p>三、聞多の立身</p> <p>1、井上馨の勳功</p> <p>2、母の力</p>	<p>多をたすけたいと云ふ一念より外にない母性愛の偉大さ、尊さ)</p> <p>○『聞多、三十歳の壯年に及んで、何一つ孝行を盡くさないのに……』(有難い親心、勿體ない母の愛、測り知れぬその洪恩に泣く聞多。彼が後年維新の元勳として廟堂に輝かしい勳功を立てたのもこの母の愛に感奮する所が多かつたからであらう。餘情深い表現)</p> <p>○程なく世は明治となつた。……君寵はすこぶる厚かつた。(聞多の榮達である。その榮達の高きだけその功績の大ききだけ、母の偉大さを想はざるを得ない)</p> <p>○それにしても……此の母の力であつた。(母の力を讃へた收筆はまことに深い餘韻をふくんでゐる)</p>	<p>是非もございませぬ</p> <p>蘭方醫</p> <p>焼酎</p> <p>手術</p> <p>慈愛</p> <p>壯年に及ぶ</p> <p>萬死に一生を得ようと</p> <p>は</p> <p>朝堂に時めく</p> <p>君寵</p> <p>非命の最後</p>	
---	---	--	--

第十五 水師營の會見

(全三時)

一月

<p>要旨</p> <p>乃木、ステツセル兩將軍の優しい武士的精神を味ひ、陛下の御稜威のかたじけなさと、皇軍の威力に感銘せしむ。</p>	<p>教材</p> <p>本課は旅順守攻の大激戦を背景とする、乃木・ステツセル兩將軍のなごやかな歴史的な會見を歌つたもので、武士道的精神を以て一貫されてゐる。鬼をもひしぐ猛將軍のゆかしい優しい人情美は、どことなく吾等に深い親しみと尊敬を感じせしめる。又敵兵に對して深き御仁慈を垂れ給ふ大御心のかたじけなさは、ステツセル將軍でなくとも感泣の外ない。本詩は兒童によく歌はれてゐるもので、親しみも深く、氣分にピッタリと合ふ點も多いのであるから、十分に兩將軍の心境を掴みとらせたものだ。</p>	<p>文</p> <p>章 (七五調文語詩 叙事詩)</p> <p>一、會見の場所</p> <p>1、水師營</p> <p>2、民屋</p> <p>二、會見</p> <p>1、大みことのり</p> <p>○旅順開城約なりて……所はいづこ、水師營。(詩の冒頭で二將軍歴史的會見の場所を明示してある)</p> <p>○庭に一本なつめの木……今ぞ相見る二將軍。(なつめの木の生々しい弾丸に激戦の様も偲ばれる。水師營のこの一民屋に相會ふ兩將の感懐や如何に。感じ深い表現)</p> <p>○御患ふかき大君の大みことのり傳ふれば、(敵將にまで及ぼし給ふ洪大無邊の大御心の有難さ)</p> <p>○昨日の敵は今日の友……彼はたゞへつ我が武勇。(昨日</p>	<p>文字及び語句</p> <p>開城</p> <p>彼の防備</p> <p>閣下</p> <p>受領</p> <p>會見</p> <p>約成りて</p> <p>彈丸あともいちじるく</p> <p>大みことのり</p>	<p>備考</p> <p>一、準備</p> <p>讀本掛圖 關東州地圖</p> <p>旅順の寫眞等</p> <p>二、連絡</p> <p>讀本卷七(26) 乃木大將の幼年時代</p> <p>〃 卷八(20) 廣瀬中佐修身卷二(23) 忠義唱歌</p> <p>三、參考</p>
--	---	---	---	---

<p>2、互に讃詞をかはず</p> <p>3、ス將軍の弔詞</p> <p>4、乃木將軍の答（武門の面目）</p> <p>5、記念の良馬</p> <p>6、乃木將軍の謝詞</p> <p>三、別れ（握手）</p>	<p>日までの敵同士が互に相手の立派な戦ぶりをほめあけるその虚心坦懐さは誠に武士道精神の發露である）</p> <p>○『二人の我が子それ／＼に……武門の面目』と大將答力あり。（乃木將軍の古武士に見るやうな忠義一徹な軍人精神が躍如としてゐる）</p> <p>○『厚意謝するに餘りあり。……長くいたはり養はん』（一頭の馬匹も苟くもせず軍規にしたがふ大將の嚴格さと、更に受領せば長くいたはり養はんと言ふ深ある言葉は、將軍の情深い一面をあらはしてゐる。因にこの馬は『壽號』として將軍に愛育せられた）</p> <p>○『さらば』と、握手ねんごろに……ひらめき立で、日の御旗。（兩將軍が固い握手をかはして別れ行く劇的な情景を歌つたもので、更に昨日まで幾度か鮮血を流した砲臺に、へんぼんとひるがへる日章旗を敘して、餘情深い結尾となつてゐる）</p>	<p>謝しまつる</p> <p>今日の敵は今日の友</p> <p>うちとけて</p> <p>戦闘</p> <p>二子をうしなひ給ひつる</p> <p>死所</p> <p>晝食</p> <p>記念に献ずべし</p> <p>軍のおきて</p> <p>謝するに餘りあり</p> <p>他日</p> <p>いたはり養はん</p> <p>握手ねんごろに</p>	<p>國史下卷（51の六）明治三十七八年戦役</p> <p>旅順攻圍</p> <p>明治三十七年六月開始</p> <p>明治三十八年一月一日午後五時開城</p> <p>一月五日午前十一時三十分會見</p> <p>乃木將軍の二子の戦死</p> <p>長子勝典は南山</p> <p>次子保典は二〇三高地</p> <p>大みことのり</p> <p>一月二日午前八時發電、敵將ステツセルより開城の提議を爲し來たる趣、伏奏せし所陛下には將官ステツセルが祖國の爲に盡くしたる勳功を嘉し給ひ、武士の名譽を保持せしむる事を望ませらる。</p> <p>山縣參謀總長</p> <p>乃木旅順攻圍軍司令官殿</p>
--	---	---	--

<p>要旨</p> <p>観材</p> <p>一、張良、兵書を授かる</p> <p>2、橋上で老人の靴を拾ふ</p> <p>3、老人との約束</p> <p>4、兵書を授かる</p>	<p>第十六 張良と韓信 （全二時）</p> <p>一月</p> <p>本文を讀ませて、張良、韓信が大意を抱いて、よく忍耐をなし得たその心掛けの立派さと、奥のかしさを感ぜしめ、以て自己修養の指針たらしめたい。</p> <p>張良が若くして橋上に白髪の老人に會ひ、幾度かその忍耐を試された後、世に得難き大公の兵書を授かり、又韓信は市井の無頼漢の言語に絶する非禮をよく耐へ忍び、共に他日高祖に仕へて、古今の名將となりたるを敘してゐる。大成の陰には偉大な忍耐力があり、大器は小事に拘泥せずして、尋常ならざる自制力あることを立證し得た好個の教材で、他山の石として児童を感銘發奮せしめたいものだ。全文到る所に見られる漢文調に注意すること。</p>	<p>文字及び語句</p> <p>白髪<small>はくはつ</small></p> <p>足る者</p> <p>叱<small>おこ</small>して</p> <p>約束</p> <p>一卷<small>いっくわん</small>の書</p> <p>朝夕<small>あすけ</small></p> <p>無頼<small>むらい</small>の少年</p> <p>好<small>この</small>んで</p> <p>然<small>しか</small>らずんば</p>	<p>備考</p> <p>一、準備</p> <p>讀本掛圖</p> <p>張良、韓信の肖像畫</p> <p>二、參考</p> <p>原據—史記、十八史畧</p>
--	--	--	--

<p>二、韓信、無頼の少年のまたをくぐる</p> <p>三、兩雄の立身出世</p> <p>1、張良内にはかりごとをめぐらす</p> <p>2、韓信外に兵を用ふ</p>	<p>法の變化に注意―五日目の朝張良早く行けば（第一回目）約束の日曉に起きて行くに（第二回目）此度こそはと、夜半より起きて橋上に行けば（第三回目）老人すでに來りて待てり（第一回目）又老人におくれたり（第二回目）しばらくありて老人來り（第三回目）叱して曰く……（第一回目）老人大いに怒り……（第二回目）一卷の書を取り出して張良に與へ……（第三回目）韓信、しばらく其の顔をうちまもりたりしが、やがて腹ばひてまたをくぐる。（含蓄深い表現、少年の顔をじつとながめてゐる韓信の胸中にどんな考へが往來したであらう。こゝに韓信の利器となるべき質が表はれてゐるのである）</p> <p>○張良は内にはかりごとをめぐらし、韓信は外に兵を用ひて、（對句の妙）</p>	<p>無禮 いはく 長者 帝王の師 得がたき兵書 兵法に精通のしりて止まず 腹ばひ 漢の高祖 内にはかりごとをめぐらし 外に兵を用ひ 後世</p>	<p>三、挿繪 （九四頁） 張良橋上にて靴を老人に捧ぐ。 張良の恭々しい態度と老人の仙人あいた風體に注意。 （九六頁） 韓信の跨ぐり。 韓信の服裝、無頼の徒の嘲笑などに注意。</p>
---	---	---	---

第十七 雪の山 (全四時)

一月

<p>要旨</p> <p>平安時代の優雅で古典的な宮廷生活を覗はせ、清少納言及び其の作品の面影を知らせると共に、文學的趣味を養ふ。</p>	<p>教材</p> <p>本文は隨筆として我が國文學の白眉と稱せられる枕草紙の一節を、兒童向に平易に書下したものであるが、流麗な才筆はよく原文の妙所をつたへ、優美風雅な平安時代の生活をうつし、文學的香氣の高い文である。内容としては、庭の雪の山が、いつまで消えずに残るだらうか、と言ふ罪のない遊びであるが、當時の上流婦人の悠長な生活振りが、才氣に富み、負けず嫌ひの清少納言の性格等がよく描寫されてゐる。</p>	<p>文</p> <p>章 (口語敬體 敘事文)</p> <p>○其の日、六七人の官女たちと、お庭の雪を眺めていらつしやいました。</p> <p>○お后は官女たちに、『此の雪の山は何時まで残つてゐるでせう。』と仰せになりました。（共に風雅をお好みになるお后の御性格が偲ばれると共に、當時に於ける宮廷の悠暢な生活を想像することが出来る）</p> <p>○すると、一座が少し動揺し始めました。……官女たちは、口々に言出しました。（清少納言のあまりにも突飛な一言が、俄然官女たちの反對をうけて問題をまき</p>	<p>文字及び語句</p> <p>御休養 お側近く 取除く お暇 獻(獻)上 有難い お后 宮中 官女</p>	<p>備考</p> <p>一、準備 讀本掛圖 清少納言の肖像</p> <p>二、連絡 國史上卷(14) 藤原氏の專横</p> <p>三、参考</p>
---	--	--	---	--

<p>瀬を越した</p> <p>三、元旦の雪は取除く</p> <p>四、お庭師に雪の山の番をたのむ</p> <p>1、お后へ宮中へお歸り</p> <p>2、お庭師にたのむ</p> <p>五、十三日には雪の山ざぶとん程残つてゐる</p> <p>3、十三日に大雨が降る</p> <p>4、お庭師の返事に安心</p> <p>六、十五日雪はなくなつてゐた</p>	<p>おこした有様が想像される)</p> <p>○さう言はれてみると、……と言つて動きません。(自分で言ひすぎたと思ひながら、前言を採つてゆづらぬ所に負けぎらひな清少納言の性格が現はれてゐる)</p> <p>○清少納言は嬉しくなつて……と一心に祈りました。(清少納言の負けぎらひな性格こゝにも現はれてゐる)</p> <p>○男たちが、雪かきで、ようしやなく新しい雪を取捨ててしまひました。(清少納言の失望の程も察せられ、興味がいよゝ深まり行く)</p> <p>○『この雪を消さないやうに……消さないでゐたら、きつと御褒美を上げますから。』(雪の山を正月十五日まで保たせたいといふことで躍氣となつてゐる清少納言がよく表はれてゐる)</p> <p>○ではもう大丈夫だと思つてゐる矢先……其の夜一夜眠られませんでした。(夜の大雨に雪が消えてしまふかも知れないと、まんじりともせず、氣をもむ清少納言、強い性格がかういふことに對しても極度の眞剣味を持つてゐる様子が、このあたり最も強く表現)</p> <p>○『ざぶとん程残つてゐます。』(面白い比喩)</p>	<p>一座 動搖 大晦日 觀世音 年の瀬 具合 ようしやなく お庭師 嚴重に 思つてゐる 矢先 言ひつくめ 失望 お目通 つたなくとも みかど 殿上人</p>	<p>原據—清少納言『枕草紙』の『物の哀れ知らせ顔なるもの』</p> <p>國史高一(15)朝臣の榮華と文化</p> <p>讀本卷十一(4)源氏物語</p> <p>四、挿繪 (九六頁)</p> <p>雪の山觀賞の圖。 左方御簾のお前に端坐ましますのがお后、其のすぐ御前に坐して外を見てゐるのが清少納言、右端は女官の一人。 平安時代上流婦人の優にやさしい十二單<small>じふにまん</small>の服装に注意。</p>
---	--	---	--

<p>1、雪をとりに使を出す</p> <p>2、雪はなくなつてゐた</p> <p>3、お后のお使</p> <p>4、残念な返事</p> <p>七、清少納言の感謝</p> <p>1、お后にお目通り</p> <p>2、お后のおはめ</p> <p>3、清少納言の感謝</p>	<p>○『まあ、よかつた』と思ひました。(この言葉に清少納言のほつと胸をなでおろすうれしい様子がよく表現されてゐる)</p> <p>○『でも、昨日あんなに……大丈夫のはずだつたのに』(あきらめ切れない清少納言の氣持がこの言葉によりて痛切に感じられる)</p> <p>○もう歌どころではありません。……お使があがりました。(負けぎらひなだけにすつかり失望し切つた清少納言の胸中にどんな焦躁を感じたことだらう)</p> <p>○『折角使をやりましたのに……献上致したいと存じてをりましたのに。』(本當に心から残念がる氣持が表はれてゐる。『お盆を帽子のやうにかぶつて』のところになど軽いユーモアが感ぜられる)</p> <p>○清少納言ははつとしました。(始めて聞くお后のお言葉に驚きと共に疑問も晴れたのであるが、こゝを『はつとしました』と意味深い表現で單純化してゐる)</p> <p>○『しかし雪はまだたくさん残つてゐた……聞きたいものです。』(清少納言に満足をお與へになつたこのお言葉には、お后の優しいお心持がよく表はれてゐる)</p>	
--	--	--

第十八 南極海に鯨を追ふ

(全三時)

一月

要旨 あくまで勇壯にして、男性的な捕鯨の實況を想像せしめ、豪快な気分を感じしめると共に、我が國水産業の世界的發展をうかがはしめる。

教材 本教材は氷山所々に漂ふ南極海の波間に、鯨を追ふ勇壯な海國日本男子の活躍の實況を描寫したもので、全文を貫く勇壯な気分は、活き／＼とした現寫文によつて、一讀血湧き肉躍るの感を與へ、海洋の寶庫を開かんとする雄心を鼓舞するものがある。この雄健にして迫力に富む現寫文を味はしめると共に、豪壯な気分を養成に努むべきである。必ずや児童は、その心を躍らせ、眼を輝かせ、文中の人となつて壯快味を心のくまで味ふであらう。

観

文章 (口語體 敘事文)

- 一、全速力で鯨を追ふ
- 1、母船から離れて鯨を追ふ
- 2、イの字なりに迫る
- 3、一ぱいの速力(發砲の)

○『取舵』帆柱の上の見張から水夫長が叫んだ。『取舵』船橋で……それに應じる。(引しまつた力強い敘述)

○船は軽く左方へ……注意深く見まもつてゐる。(實況を髣髴させる如實な表現)

○『一ぱい、一ぱい』俄然砲手が……機會が近づいたのだ。(次第に緊張し活氣を帯びて來る様子の迫力ある表現)

○『パツ』といふ音を立て、……鯨に追附かうとしめるのだ。(全船員の神経が船と一つになつて吸ひつけられるやうに鯨を追ふ様子や、緊張し切つた氣分が活

文字及び語句

備

考

氷山
取舵
舵手
身構へ
巨體
瞬間
網
破裂
準備

一、準備
讀本掛圖 世界地圖
捕鯨船、鯨などの寫真又は標本。

二、參考
理科高一(1)哺乳類
南極海に於ける捕鯨
一萬五六千噸の捕鯨工船(母船)と二百五六

機會)

- 二、命中
- 1、鯨に迫る(五十米)
- 2、一番もり命中
- 3、二番もりを打込む
- 4、目じるしの旗を立てる
- 三、今一頭の鯨を追ふ

寫されてゐる)

○『用意』見張から落着いた聲が……『命中』船長が傳聲管に向かつて叫ぶ。(鯨に向かつて發砲する壯絶な場面の巧妙な細かい描寫。光景が目あたり見えるやうである)

○鯨はものすごい勢で……全員鳴りをひそめる。(全員聲をひそめて爆弾の破裂するのを待つ緊張した瞬間である)

○『ぶすり』と押しつぶすやうな音がした。……綱の行手を見極めてゐる。(爆薬が破裂するや全員の活動は再び開始された。總動員で活躍する様子の力強い表現)

○鯨は又水にもぐつたが……思はず歡呼の聲が上る。綱は烈しく……水面に横たへる。(壯快な場面の敘述)

歡呼
行方
南極海
捕鯨船
白長須鯨
水夫長
イの字なり
砲手
砲身
俄然
傳聲管
復唱
もり
鳴りをひそめる
無線通信士
總動員
指揮
送氣管

十噸の捕鯨船七八艘とを以て一隊を組織し、南半球の夏即ち十一月頃から翌年二月頃までこれに従事する。各捕鯨船は捕つた鯨を曳航して母船へ渡す、母船では船尾より順次鯨を船上へ引上げ、解剖切断して鯨油等をとる。精製された鯨油は現地で中積船へ渡し、或は歸國の際持歸る。

三、挿繪
(一一四頁)
捕鯨母船。
(一一七頁)
發砲の瞬間。
(一一九頁)
打取つた鯨。

第十九 パナマ運河 (全五時)

一月

要旨 パナマ運河の規模乃至構造の大體と、その閘門に於ける船舶通過の方法を會得せしめ、且つ科學の力の偉大なることを感得せしむ。

教 材 本課はパナマ運河の、世界交通上の價值と構造の大體を敘し、太平洋の方より運河を航して船の通過方法なり工事の大様なりを説明し、之に依つて人智の際限なき進歩と機械力の偉大さ、及び醫學の力を強調してゐる。尙本文はかなり程度の高い理解力を要する説明文であるが、具體的に敘述してゐるから兒童の理解力を練磨するものとして意義が多い。

文 章 (口語敬體 説明文)

文字及び語句

備

考

<p>一、パナマ地峽</p> <p>1、細長い地峽</p> <p>2、運河の必要</p> <p>二、運河開鑿の困難</p> <p>1、火山地帯</p> <p>2、計畫の失敗</p> <p>3、終に完成</p> <p>三、運河の仕組</p> <p>1、普通の運河</p>	<p>○世界地圖を見て……切れさうで切れないといつたかつかうです。(適切な興味ある比喩)</p> <p>○若しあそこが少しでも切れてゐたら……何百年も前から考へられたことでした。(運河開鑿の必要を感じさせ、古來幾度かその計畫がなされたことを極めて自然的に敘述されてゐる)</p> <p>○先づこの地方を流れる川の水を……構造の一番おもしろい所です。(運河の大體の計畫とパナマ運河の特徴</p>	<p>地峽、計畫、連絡、構造、交互、樂々、往々、密林、制し</p>	<p>一、準備</p> <p>讀本掛圖 運河の寫真</p> <p>パナマ地峽地圖及び世界地圖</p> <p>二、連絡</p> <p>手工(模型製作)</p>
--	--	-----------------------------------	--

<p>は出来ない</p> <p>2、人造湖と掘割</p> <p>3、閘門</p> <p>四、運河を太平洋より大西洋へ</p> <p>1、掘割</p> <p>2、第一第二の閘門</p> <p>3、小さい湖</p> <p>4、第三閘門</p> <p>5、リレブラの掘割</p> <p>6、大きい湖</p> <p>7、三段の閘門</p> <p>8、掘割</p> <p>9、長さ</p> <p>10、所要時間</p> <p>五、成功の原因</p> <p>1、科學の力</p> <p>2、衛生設備</p>	<p>を述べた要領よき説明)</p> <p>○昔から川の流の急な所を……舟は樂々と通つて行けるのです。(パナマ運河の仕組を説明する豫備智識として一般的な閘門の説明)</p> <p>○今太平洋の方から……其の昔、陸に奔せてゐた山であつたわけです。(その仕組の大きいことに注意)</p> <p>○それがために……巧みに此の文明的大工事をしとけたのです。(人智の力の偉大さを讃へた敘述。『氣ちがひのやうにあふれる川』、『頑固な岩山』とはおもしろい擬人化した形容である)</p> <p>○それは目に見えぬ熱帯の……完成しなかつたかも知れませんが。(傳染病を征服した功績の偉大さをたゞへた具體的な敘述)</p>	<p>傳染病、黃熱病、設計、健康地、兩大陸、火山地帯、並大たい、仕組、せき止め、閘門、水門、都度、同然、手續、あふれる川、頑固な岩山、文明的、偉大、なかだち、下水、鋪裝</p>	<p>三、參考</p> <p>地理卷二(11) 北アメリカ</p> <p>カ洲</p> <p>大百科事典</p> <p>四、挿繪</p> <p>(一二五頁)</p> <p>太平洋方面からの第一の閘門即ちミラーフローレース閘門。</p>
---	--	--	---

第二十冬 の 月 (全二時)

二月

要旨 本詩を鑑賞して、*冴えく*と寒光を放つ冬の月の情趣を味はしめ、文學的情操を深めしめると共に、自然觀照眼を高める。

教材 本教材は清徹美と凄艶美を有つ冬の月を主題として、繪畫的印象的に表現した詩味豊かな敘景詩である。即ち冴えた月の寒光を浴びた庭、底冷たい北風に軽く揺れる枯枝のかけ、石を踏む冴えた足音、やゝ細く天心にかゝる寒月等すべて冬の月の清透蕭條の氣が遍滿してゐる。又一句句々を五音又は七音とし一切不要の文字を除いて壓縮した引きしまつた調子は、冬の月の凜然として打てば響く様な自然に調和し、句々皆文學的なものゝ結晶とでもいふべき感がある。

文 章 (文語詩「五五七調」敘景詩)		文字及び語句	備 考
一、冬の月を浴びた庭	○さえくくと冬の月。(冴え切つた骨身まで刺すが如き白き月の光を想像) ○庭の面は眞晝の如し。(月光の明かるさは『眞晝の如し』の句に深き含蓄を見せてゐる) ○枯枝は……かすかに震ふ。(印象的な情景の洗練された表現、『震ふ』の文字がこの情景を餘情深く表はしてゐる) ○道の石さえて音あり。(極めて單純化され、しかも餘	さえくくと 庭の面 風寒み さえて音あり 天心	一、準備 冬の月を描いた繪畫等
二、枯枝のかけ			
三、石を踏む足音			
四、天心の細い月			

	韻の多い表現である) ○見上ぐれば……月や、細し。『たゞ眞上』といひ『天心』とくりかへして月の位置を強め、『月や、細し』と咏嘆した所に詩の深みがある)		
--	--	--	--

第二十一 國法と大慈悲

(全四時)

二月

要旨 赤穂義士の壯烈な義舉に感激せしめ、國法と大慈悲の兩全を期せられた輪王寺宮公辦法親王の御卓見を理會せしむ。

本課は赤穂義士の義心を讚美し、且つ切腹仰せつけに至るまでの経過を敘して、赤穂義士を側面より表はすと共に、武士道と國法尊重の精神と佛の大慈悲とが一致すべき妙諦を表した教材である。四十七士の義舉は子供達にとつて最も心を躍らせる題材である。朝日に匂ふ櫻花の如く、潔きよく切腹して散つた義士の、萬古を照らす高風をよく兒童に會得せしめて、資操の涵養に努むべきである。

教材 觀

文章 (口語體 敘事文)

文字及び語句

備

考

一、人々義士を讚美する

亡君 仇

一、準備 泉岳寺の寫真

1、義士仇を討つ

○江戸市中はすつかり興奮してしまつた。……彼等に浴びせられた。(義士の壯舉が天下の輿論を沸騰させたことを具體化した新味ある表現)

罪

義士に關する繪畫等

2、世人義士をほめる

○將軍綱吉はさすがに此の事件の始末に心を痛めた。(沸騰する天下の輿論も考へあはされる意味深い表現)

罪人

修身卷五(3) 國法を重んぜよ

3、大名に預けらる

○『彼等はまことに……今後忠義をはけます道がないであらう。』(節義論で、これが當時の天下の輿論であつた)

大名 預け

三、參考 國史下卷(41) 大石良雄

二、事件始末の評議

○『亡君の仇を報いたのは……國家の政治が成立たない。』(法理論で、簡潔によくその要を表はしてゐる)

事件 一致

國史高二(38) 産業學問の發達、元祿時代の文藝。

1、助命説(天下の輿論)

○再三再四、考へた結果、『切腹を申しつけよ。』と命じた。(慎重事に當つたことがよく表はれてゐる)

騷動 相違

原據 福本日南 『元祿快樂錄』

2、获生徂徠の法理論

○だが、世間は……何ともしやうがない。(武士の名譽を重んじた切腹仰せつけではあつたが、世間が失望したといふことは、如何に輿論が義士に同情し助命を希つてゐたか、うかゞはれる)

私情 政治

徳富猪一郎 『近世日本國民史元祿時代(義士篇)』

3、綱吉切腹を仰付ける

○『政治を行ふ身程……まことにせんない事でございませう。』(慎重考慮の結果、切腹を申付けた綱吉であつたが、やはり法親王のお力にでも縋つて義士を助けてやりたい綱吉の謎が巧みに敘述されてゐる)

政治 解

徳富猪一郎 『近世日本國民史元祿時代(義士篇)』

4、世間の失望

○『法親王はおえらいお方と……お解けにならなかつたとは』と、歎ずる者が多かつた。(助命になると考へたものが切腹と決定失望し、法親王のお情にでも一縷の望みをかけた世間の人々の心からなる歎きの聲である。『歎ずる』とは如何にもこの場合眞實性を持つ

浪士 内匠頭

徳富猪一郎 『近世日本國民史元祿時代(義士篇)』

三、國法と佛の大慈悲

○『法親王はおえらいお方と……お解けにならなかつたとは』と、歎ずる者が多かつた。(助命になると考へたものが切腹と決定失望し、法親王のお情にでも一縷の望みをかけた世間の人々の心からなる歎きの聲である。『歎ずる』とは如何にもこの場合眞實性を持つ

上野介 興奮

忠臣の鑑

1、切腹の準備

○『法親王はおえらいお方と……お解けにならなかつたとは』と、歎ずる者が多かつた。(助命になると考へたものが切腹と決定失望し、法親王のお情にでも一縷の望みをかけた世間の人々の心からなる歎きの聲である。『歎ずる』とは如何にもこの場合眞實性を持つ

あつばれ

徒黨

2、綱吉の謎

○『法親王はおえらいお方と……お解けにならなかつたとは』と、歎ずる者が多かつた。(助命になると考へたものが切腹と決定失望し、法親王のお情にでも一縷の望みをかけた世間の人々の心からなる歎きの聲である。『歎ずる』とは如何にもこの場合眞實性を持つ

興奮

忠臣の鑑

3、公辦法親王の御卓見

○『法親王はおえらいお方と……お解けにならなかつたとは』と、歎ずる者が多かつた。(助命になると考へたものが切腹と決定失望し、法親王のお情にでも一縷の望みをかけた世間の人々の心からなる歎きの聲である。『歎ずる』とは如何にもこの場合眞實性を持つ

評議

徒黨

(國法と大慈悲の一致)

○『法親王はおえらいお方と……お解けにならなかつたとは』と、歎ずる者が多かつた。(助命になると考へたものが切腹と決定失望し、法親王のお情にでも一縷の望みをかけた世間の人々の心からなる歎きの聲である。『歎ずる』とは如何にもこの場合眞實性を持つ

お仕置

4. 切腹

た表現である)
 ○散ればこそ……佛の大慈悲である。(大慈悲に徹した法親王にして始めて言ひ得る名言であり、この御卓見こそ義士の最後を完うせしめたものといふべきである。雄渾な敘述)

輿論 義
 結局 理非
 再三再四
 切腹 打首
 武士の名譽
 政道
 せんない事
 心ありけに
 下心
 くるんで
 一味の者

第二十二 開票の日 (全三時)

二月

要旨

市會議員當選決定と云ふ具體的な場面を通して、一般選舉に關する觀念を與へ、殊に肅選意識を強く植ゑつける。

教材

本教材は肅選の熱意を有つてゐる父が、市會議員選舉の結果について、正しい人物本位の選舉の行はれたことを祝福し、選舉人の自覺を喜んでゐることを敘述して、立憲國民としての選舉の義務の重要性や心得を、自然の會話の中に充分會得せしめようとしてゐる。本文は一家の和合と肅選氣分がよく調和して、明朗な氣分に満たされてゐる。この氣分を學級生活に於ける生活指導にまで發展せしめたい。

文章 (口語體 生活的敘事文)

一、當選者決定の號外

1、號外の鈴

2、市會議員當選者決定

二、選舉の心得

1、山川さん今度も第一位

○すると梯子段の上から、『當選者決定だらう。』と、父の待ちかねた聲がする。(父が如何に選舉に關心を持つてゐるか、解る)

○『いや全くえらいからさ。……實にえらい人だ。』

(この言葉の上に山川さんを語ることによつて、自然に議員としての資格を述べてゐる)

○『道雄、選舉といふのはね……よく覚えておきなさい。』
 (選舉人の心得の眼目をこの言葉の中に述べてゐる)

文字及び語句

備

考

開票

豫想

選舉

自覺

掲示板

市會議員

當選者

一、準備

選舉の掛圖

選舉ポスター等

二、参考

六法全書

<p>2、正しい投票 3、選挙民の自覚（棄権者が少い） 三、夕方父と散歩に出る 1、當選者の名前揭示 2、晴々とした氣持（父）</p>	<p>○『あなたのやうに旅行先から……あるのですから。』 （こゝにも父の選挙人としての自覚が強く表はれてる） ○『いや、もつともつと感心な……思はず涙が出た。』 ○『あゝいふ風に……眞劍のたまものだ。』（選挙の義務、眞劍でなければならぬといふことを、感心な老人の話を持出したりして述べてる）</p>	<p>得票 教養 市政上 投票 選挙 いはんや 人情 とかくのうはさ 連中 棄権者 自覚 中風 義務 眞劍のたまもの 散歩</p>	
---	---	---	--

第二十三 春 浅

（全二時）

二月

<p>要旨 本文語文に依り、簡潔にして雄渾な敘景文を鑑賞せしめ、浅春の自然の情景を想像せしめると共に、自然觀照の趣味と兒童の文學心を啓發する。</p>	<p>冬去らんとして未だ去らず、春來らんとして未だ來らざる早春の微妙な自然を、極めて印象的に敘した敘景文である。即ち水仙、ヒヤシンス等の若芽、天地の清明、梅の蕾、朝夕のもや等の早春の情趣を、鋭敏な自然觀照眼に愛でたもので、そこに詩的感情の満足もあれば、春待つ希望の喜びもある。又簡潔雄渾の文語文のもつリズムと、きびくとした印象的表現とが本文を散文詩たらしめて、文學味の豊かなものがあることを注意すべきである。</p>
<p>教材 一、春なほ浅し</p>	<p>○沈黙の冬は去れり。しかも春なほ甚だ浅し。（冬を『沈黙』の一語で表現し、春を『しかも春なほ甚だ浅し』と限定して早春の季節を示してゐる。簡潔な含蓄深い表現） ○空はなほ冬と異ならず……遠く響くを聞く。（まだ何處にも春の氣分が動かす、夜明前のやうな静けさが天地を包んでゐるが、その静寂を破つて響く大工の槌の音に、やがて來る春を感じてゐる作者の觀照の深さ</p>
<p>文章（文語體 敘景文）</p>	<p>増せり 白雲 天地清明 未だ 白梅 衰へ 沈黙 とく消えて</p>
<p>文字及び語句</p>	<p>一、準備 浅春の情景を現した繪畫寫真等 二、連絡 讀本卷八（25）早春 卷九（1）四月 （22）秋のおと</p>
<p>備考</p>	

<p>3、梅</p> <p>4、新鮮の氣</p> <p>三、春を待つ情</p>	<p>が思はれる)</p> <p>○梅は未だ咲かず。……たま／＼白梅の數輪咲きそめたるを見る。(清明な早春の情景を描出した印象的な表現、春の息吹きを崖下の白梅に感じてるのである)</p> <p>○冬の衰へはすでにあとを絶てり。新鮮の氣天地にひそむ。(春がもうそこまで來てる。すべての物にもう春が今にも生れようとしてる。その様子を敘した雄渾な表現)</p> <p>○朝夕たちこむる……思ふこと切なり。(春待つ心、餘情多き表現)</p>	<p>斷續</p> <p>おもむろに</p> <p>おしなべて</p> <p>たま／＼</p> <p>咲きそめ</p> <p>新鮮の氣</p> <p>ひそむ</p> <p>うた、</p> <p>思ふこと切なり</p>	<p>づれ</p> <p>三、参考</p> <p>實地に早春の自然觀照をなし、植物の芽及び色彩、梅の蕾と花などを注意しておく。</p>
---	--	--	---

第二十四 熊野紀行

(全四時)

二月

<p>要旨</p>	<p>熊野三山と云ふ頗る由緒の古い神社參拜を對象とし、地理自然と史的感情とを融合した紀行文である。即ち楠の老木の茂る熊野那智神社に言ひ知れぬ敬虔の念を覺え、懸崖百數十米の那智瀧の美觀に對し言語に絶する壯快味を味ひ、木材集散地たる新宮市の特異性を見、又熊野速玉神社に肅然襟を正し、瀨八丁の偉觀に自然美を歎稱し、清澄閑寂の氣の充つる熊野坐神社に神氣自ら迫るものを感じたのである。而して各々の生命とし特長とするところを、印象的に捉へ、單純化し、之を簡潔雄渾な文學的表現としたところに、文學味の掬すべきものがある。</p>	<p>教</p>	<p>材</p>	<p>觀</p>	<p>文</p> <p>章 (文語體 紀行文)</p>	<p>紀行</p> <p>驅つて</p> <p>境内</p> <p>枝葉</p> <p>西國</p> <p>札所</p> <p>美觀</p> <p>言語</p> <p>材木</p>	<p>備</p>	<p>考</p>	
<p>一、那智</p> <p>1、那智山に向ふ</p> <p>2、熊野那智神社</p> <p>3、青岸渡寺</p> <p>4、那智の瀧</p> <p>二、新宮</p> <p>1、木材の集散地</p>	<p>○後に山を負ひ前に……神域に一段の森嚴を加ふ。(精彩に富んだ表現)</p> <p>○仰けば、百數十米の……美觀言語に盡くし難し。(那智瀧の雄大なる景觀にふさはしい簡潔雄渾な表現、養老の瀧の繊細な描寫と比較するとおもしろい)</p> <p>○一枚の落葉もとゞめぬ……すが／＼し。(清淨な神域の簡潔を敘述)</p> <p>○すさまじき爆音を立てながら……飛ぶが如くに進む。(勇壯なプロペラ船の速さがうまく表現されてる。悠々と下る筏の風流味とおもしろい對照を見せてる)</p>	<p>熊野三山と云ふ頗る由緒の古い神社參拜を對象とし、地理自然と史的感情とを融合した紀行文である。即ち楠の老木の茂る熊野那智神社に言ひ知れぬ敬虔の念を覺え、懸崖百數十米の那智瀧の美觀に對し言語に絶する壯快味を味ひ、木材集散地たる新宮市の特異性を見、又熊野速玉神社に肅然襟を正し、瀨八丁の偉觀に自然美を歎稱し、清澄閑寂の氣の充つる熊野坐神社に神氣自ら迫るものを感じたのである。而して各々の生命とし特長とするところを、印象的に捉へ、單純化し、之を簡潔雄渾な文學的表現としたところに、文學味の掬すべきものがある。</p>	<p>熊野三山と云ふ頗る由緒の古い神社參拜を對象とし、地理自然と史的感情とを融合した紀行文である。即ち楠の老木の茂る熊野那智神社に言ひ知れぬ敬虔の念を覺え、懸崖百數十米の那智瀧の美觀に對し言語に絶する壯快味を味ひ、木材集散地たる新宮市の特異性を見、又熊野速玉神社に肅然襟を正し、瀨八丁の偉觀に自然美を歎稱し、清澄閑寂の氣の充つる熊野坐神社に神氣自ら迫るものを感じたのである。而して各々の生命とし特長とするところを、印象的に捉へ、單純化し、之を簡潔雄渾な文學的表現としたところに、文學味の掬すべきものがある。</p>	<p>熊野三山と云ふ頗る由緒の古い神社參拜を對象とし、地理自然と史的感情とを融合した紀行文である。即ち楠の老木の茂る熊野那智神社に言ひ知れぬ敬虔の念を覺え、懸崖百數十米の那智瀧の美觀に對し言語に絶する壯快味を味ひ、木材集散地たる新宮市の特異性を見、又熊野速玉神社に肅然襟を正し、瀨八丁の偉觀に自然美を歎稱し、清澄閑寂の氣の充つる熊野坐神社に神氣自ら迫るものを感じたのである。而して各々の生命とし特長とするところを、印象的に捉へ、單純化し、之を簡潔雄渾な文學的表現としたところに、文學味の掬すべきものがある。</p>	<p>熊野三山と云ふ頗る由緒の古い神社參拜を對象とし、地理自然と史的感情とを融合した紀行文である。即ち楠の老木の茂る熊野那智神社に言ひ知れぬ敬虔の念を覺え、懸崖百數十米の那智瀧の美觀に對し言語に絶する壯快味を味ひ、木材集散地たる新宮市の特異性を見、又熊野速玉神社に肅然襟を正し、瀨八丁の偉觀に自然美を歎稱し、清澄閑寂の氣の充つる熊野坐神社に神氣自ら迫るものを感じたのである。而して各々の生命とし特長とするところを、印象的に捉へ、單純化し、之を簡潔雄渾な文學的表現としたところに、文學味の掬すべきものがある。</p>	<p>熊野三山と云ふ頗る由緒の古い神社參拜を對象とし、地理自然と史的感情とを融合した紀行文である。即ち楠の老木の茂る熊野那智神社に言ひ知れぬ敬虔の念を覺え、懸崖百數十米の那智瀧の美觀に對し言語に絶する壯快味を味ひ、木材集散地たる新宮市の特異性を見、又熊野速玉神社に肅然襟を正し、瀨八丁の偉觀に自然美を歎稱し、清澄閑寂の氣の充つる熊野坐神社に神氣自ら迫るものを感じたのである。而して各々の生命とし特長とするところを、印象的に捉へ、單純化し、之を簡潔雄渾な文學的表現としたところに、文學味の掬すべきものがある。</p>	<p>熊野三山と云ふ頗る由緒の古い神社參拜を對象とし、地理自然と史的感情とを融合した紀行文である。即ち楠の老木の茂る熊野那智神社に言ひ知れぬ敬虔の念を覺え、懸崖百數十米の那智瀧の美觀に對し言語に絶する壯快味を味ひ、木材集散地たる新宮市の特異性を見、又熊野速玉神社に肅然襟を正し、瀨八丁の偉觀に自然美を歎稱し、清澄閑寂の氣の充つる熊野坐神社に神氣自ら迫るものを感じたのである。而して各々の生命とし特長とするところを、印象的に捉へ、單純化し、之を簡潔雄渾な文學的表現としたところに、文學味の掬すべきものがある。</p>	<p>熊野三山と云ふ頗る由緒の古い神社參拜を對象とし、地理自然と史的感情とを融合した紀行文である。即ち楠の老木の茂る熊野那智神社に言ひ知れぬ敬虔の念を覺え、懸崖百數十米の那智瀧の美觀に對し言語に絶する壯快味を味ひ、木材集散地たる新宮市の特異性を見、又熊野速玉神社に肅然襟を正し、瀨八丁の偉觀に自然美を歎稱し、清澄閑寂の氣の充つる熊野坐神社に神氣自ら迫るものを感じたのである。而して各々の生命とし特長とするところを、印象的に捉へ、單純化し、之を簡潔雄渾な文學的表現としたところに、文學味の掬すべきものがある。</p>	<p>熊野三山と云ふ頗る由緒の古い神社參拜を對象とし、地理自然と史的感情とを融合した紀行文である。即ち楠の老木の茂る熊野那智神社に言ひ知れぬ敬虔の念を覺え、懸崖百數十米の那智瀧の美觀に對し言語に絶する壯快味を味ひ、木材集散地たる新宮市の特異性を見、又熊野速玉神社に肅然襟を正し、瀨八丁の偉觀に自然美を歎稱し、清澄閑寂の氣の充つる熊野坐神社に神氣自ら迫るものを感じたのである。而して各々の生命とし特長とするところを、印象的に捉へ、單純化し、之を簡潔雄渾な文學的表現としたところに、文學味の掬すべきものがある。</p>
<p>一、準備</p> <p>南紀地方地圖 讀本掛圖</p> <p>名所寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>國史上卷 (17) 平氏の勃興</p> <p>地理卷一 (5) 近畿地方</p> <p>三、參考</p> <p>青岸渡寺西國第一番の詠歌『ふだらくや岸打つ波</p>	<p>一、準備</p> <p>南紀地方地圖 讀本掛圖</p> <p>名所寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>國史上卷 (17) 平氏の勃興</p> <p>地理卷一 (5) 近畿地方</p> <p>三、參考</p> <p>青岸渡寺西國第一番の詠歌『ふだらくや岸打つ波</p>	<p>一、準備</p> <p>南紀地方地圖 讀本掛圖</p> <p>名所寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>國史上卷 (17) 平氏の勃興</p> <p>地理卷一 (5) 近畿地方</p> <p>三、參考</p> <p>青岸渡寺西國第一番の詠歌『ふだらくや岸打つ波</p>	<p>一、準備</p> <p>南紀地方地圖 讀本掛圖</p> <p>名所寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>國史上卷 (17) 平氏の勃興</p> <p>地理卷一 (5) 近畿地方</p> <p>三、參考</p> <p>青岸渡寺西國第一番の詠歌『ふだらくや岸打つ波</p>	<p>一、準備</p> <p>南紀地方地圖 讀本掛圖</p> <p>名所寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>國史上卷 (17) 平氏の勃興</p> <p>地理卷一 (5) 近畿地方</p> <p>三、參考</p> <p>青岸渡寺西國第一番の詠歌『ふだらくや岸打つ波</p>	<p>一、準備</p> <p>南紀地方地圖 讀本掛圖</p> <p>名所寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>國史上卷 (17) 平氏の勃興</p> <p>地理卷一 (5) 近畿地方</p> <p>三、參考</p> <p>青岸渡寺西國第一番の詠歌『ふだらくや岸打つ波</p>	<p>一、準備</p> <p>南紀地方地圖 讀本掛圖</p> <p>名所寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>國史上卷 (17) 平氏の勃興</p> <p>地理卷一 (5) 近畿地方</p> <p>三、參考</p> <p>青岸渡寺西國第一番の詠歌『ふだらくや岸打つ波</p>	<p>一、準備</p> <p>南紀地方地圖 讀本掛圖</p> <p>名所寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>國史上卷 (17) 平氏の勃興</p> <p>地理卷一 (5) 近畿地方</p> <p>三、參考</p> <p>青岸渡寺西國第一番の詠歌『ふだらくや岸打つ波</p>	<p>一、準備</p> <p>南紀地方地圖 讀本掛圖</p> <p>名所寫真類</p> <p>二、連絡</p> <p>國史上卷 (17) 平氏の勃興</p> <p>地理卷一 (5) 近畿地方</p> <p>三、參考</p> <p>青岸渡寺西國第一番の詠歌『ふだらくや岸打つ波</p>	

<p>2、熊野速玉神社 三、瀨 1、プロペラ船 2、海の幽邃 四、本宮 1、熊野坐神社 2、熊野三山</p>	<p>○さかのほるに従ひて山いよく秀で……流れ来るに會ふ。(簡潔な敘述——漢文調に注意) ○舟は爆音をさめ、櫓の音始めてのどかなり。(『すさまじき爆音』「飛ぶが如くに進む」に照應して感じ深い表現) ○兩岸の絶壁、あたかも……たまく野猿の叫びを聞く。(所謂仙境瀨八丁の幽邃な景観美を叙した精練された表現) ○地高ければ氣もまたすみ、いと靜かなる境内なり。(簡潔な敘述) ○本宮、新宮、那智は……數十回の多きに及べりとぞ。(結尾の文として熊野三山の説明)</p>	<p>貯木場 瀨 秀で 怪石 稱せられ 尊信 山腹 あへぎあへ 白衣の通路 御詠歌 くまなく 森殿を加ふ 漢々 集散地 いはゆる なぎの古木 すがくし プロペラ船 よどんで 朝野の尊信</p>	<p>は御熊野の那智のお山に響く瀨つ瀨 熊野吉野群山一帯は國立公園になつてゐる。 熊野三山の祭神 三社共略同様で那智は結大神(伊弉册尊)を主神とし家津大神(素盞鳴尊)速玉大神等諸神を祀り、本宮は家津大神、新宮は速玉大神を夫々主神として他の諸神と共に祀つてある。世に熊野三所権現など稱せらる。 四、挿繪 (一一一頁) 那智の瀨。 飛瀑神社の御神體として祀られてゐる。 (一一二頁) 熊野速玉神社。 (一一四頁) 瀨峽の一部。 (一一五頁) 熊野坐神社。</p>
--	---	--	--

第二十五 汽車の發明

(全四時)

三月

<p>要旨 汽車の發明にからまる各功績者と、その發達の經過を知らしめ、且つ科學的、發明的關心を刺激し、文化的意識を向上せしめる。</p>	<p>教材 本文は汽車の發明と發達に關する沿革を敘すると共に、それにたづさはつた人々の偉大な業績の一端を述べたものである。而して文の奥にひそむ發明家の苦心を看取せしめることも無論暗示してゐるが、その主意とするところはむしろ汽車の發明發達の沿革である。これによつて今日の汽車になるまでの發達段階も了解され、人智の進歩の驚くべく際限ないことに想到せしめられる。今日我々の文化生活に缺くことの出来ない汽車に就いて關心を向ける時、その發明家に最大の敬意を捧げると共に、一層工夫改良の要を痛感させられる。</p>	<p>文章 (口語體 説明文) ○これがそもく汽車といふもの……百數十年前の事であつた。(汽車發明の先驅をなした功績に注意) ○それが今日の如く……スチープンソンの力にまたなければならなかつた。(キユニョーが先驅をなし、トレビシツクが改良した汽車を、今日のやうな重要な交通機關に造り上げたのはスチープンソンの力であること)を述べてゐる) ○しかし、生まれつき……楽しんでゐた。(スチープン</p>	<p>文字及び語句 企てた 羊 試運轉 蒸氣機關 炭坑 そもく 裝置 速度</p>	<p>備考 一、準備 讀本掛圖 各發明家肖像 昔の汽車と今の汽車の寫眞等 二、連絡 讀本卷九(3) 飛行機の發明 // 卷十(26) 『あじあ』に乘りて 三、参考 理科六年(25) 熱と氣體</p>
---	--	---	---	---

<p>の汽車の改良</p> <p>2、炭坑などで使用</p> <p>三、スチーブンスンの汽車</p> <p>1、機械好きなきスチーブンスン</p> <p>2、スチーブンスンの研究</p> <p>3、汽車の試運転成功(時速二十軒)</p> <p>4、其後の研究(時速五十軒の汽車)</p>	<p>ソンの發明家としての萌芽はもうこの頃にすでに現はれてゐたことがわかる)</p> <p>○晝は仕事をしながら……工夫に工夫を重ねた。(スチーブンスンの汽車の研究が本格的になつたことが述べられてゐる)</p> <p>○いよ／＼其の日になつた。……今から百年餘り前の事であつた。(スチーブンスンの發明上特筆すべき日の記事である。具體化されて述べられてゐる)</p>	<p>怪物 効用 交通機關 鐵道馬車 意見を採用 機關車</p>	<p>の壓力 理科高二(24) 蒸氣機關 四、挿繪 (一五七頁)</p> <p>キュニョーが西曆一七六九年に蒸氣機關を裝置した荷車。時速四・五軒、しかも走行十五分位で停止、蒸氣の恢復を待たねばならぬ。</p> <p>(一五八頁)</p> <p>トレビシツクが西曆一八〇四年にはじめてレールの上を走らせた機關車。十噸の鐵鑛を積んだ車を時速八軒で牽引した。</p> <p>(一六一頁)</p> <p>西曆一八二五年九月スチーブンスンが息子と乗込み約五十噸の列車を引いて時速二十軒出したといふロコモーション號。尙一八二九年に時速五十軒のロケット號を造つた。</p>
---	--	--	---

第二十六 『あじあ』に乗りて

(全五時)

三月

<p>要旨</p> <p>本文によつて、滿鐵沿線の都邑、名勝、田園、住民等の大體の外観を知らしめ、滿洲國に對する地理的認識を廣め、且つ子供の紀行文としての面白味を味はせる。</p>	<p>教材</p> <p>大連からハルビンまで『あじあ』に乗つて、三月末の滿洲曠野を北へ／＼と進んだ紀行文である。卷八『大連だより』をうけて、滿洲國へ發展する地理的教材であると共に、二面前課『汽車の發明』をうけて、現代に於ける汽車の發達を暗示してゐる。子供の紀行文で、生き／＼とした子供の興味と生活の喜びの中に、滿洲獨特の情趣を漂はせ、誇張も虚飾もなく、極めて純にすら／＼と筆が進められてゐるので、一段と快い感じがする。この點に留意し、自ら『あじあ』に乗つて旅行する様な氣分にまで導き、生き／＼と發展しつゝある新興滿洲國への認識を深めたい。</p>	<p>文 章 (口語體 紀行文)</p> <p>○『あじあ』は流れるやうに動き出した。……此の汽車に乗れて、實に嬉しい。(旅行の意圖が明らかにされてゐる。『流れるやうに動き出した』とは動搖の少い廣軌の列車らしい全くうまい形容である)</p> <p>○『右手は大和尚山で』……乃木將軍の詩もしのばれるのであります。(日露戦役の戦跡が車掌によりて自然に説明されてゐる——『水師營の會見』と連絡、乃木將軍の詩は参考欄参照)</p> <p>○沿線の楊の木に……僕がそれを見てゐると、(かさゝぎの巢に興味を持つところは如何にも子供らしい)</p>	<p>文字及び語句</p> <p>擧げる 車掌 故郷 製鋼所 分岐點 司令部 印 春休</p>	<p>備 考</p> <p>一、準備 滿洲國地圖 讀本掛圖 滿洲各地繪業書寫真類 アジア號寫真等</p> <p>二、連絡 讀本卷八(4) 大連だより 讀本卷十(25) 汽車の發明</p>
--	--	--	---	---

<p>景 金州にさしかゝる 車掌の説明 (大和尚山、金州城) 南滿洲の島 かさゞぎの巢 ロシヤ少女マルタ 熊岳城に近づく 望小山の傳説 (食堂車) 大石橋で始めて停車 鞍山製鋼所 遼陽の白塔 太子河 スタンプ</p>	<p>○『何を見てゐるの。』……ロシヤ少女が、給仕をして働いてゐた。(如何にも國際列車らしいところである。又すぐ仲よしになるあたりは子供らしい無邪氣さもあらはれてゐる) ○車掌さんがボーイに、『もう少し……』と言ひつけてゐた。 ○『あじあ』は防音装置が……聞えない。 ○『「あじあ」のスタンプを押しませんか。』……僕はノートに二つ押してもらつた。(特急『あじあ』の設備やサービスについて具體的自然的に述べてゐる) ○雲が切れて、日光がさして來た。……滿洲の大平野をまつしぐらに突進する。(特急『あじあ』が大平野を進行する勇壯な氣分を出した雄大な筆致) ○『汽車の影が長くなつた。』と、マルタが言ふ。……すつとのびた。(滿洲らしい色調であり、子供としては穿つた觀察である) ○『あじあ』は一氣に國都新京に迫りつゝある。(勇壯な調子を出した雄大な筆致) ○兵隊さんたちは新京で下車した。……みんな勢よく舉手をする。(子供らしい無邪氣さ) ○マルタも、おかあさんと……マルタは、飛上りながら手を振つた。(國際的雰圍氣と子供らしさ)</p>	<p>關東州 記念碑 そらろに しのばれる 沿線 婦人 傳説 食堂車 山東 苦學 停車 ホーム ボーイ 防音装置 スタンプ 滿人の赤帽 まつしぐら コサツク兵 農事試験場</p>	<p>三、參考 乃木大將の詩 山川草木轉荒涼 十里風腥新戰場 征馬不前人不語 金州城外立斜陽 熊岳城―滿洲三大溫泉場の一、附近名勝に富む遊覽地。 北陵―清朝第二代太宗文皇帝及び孝瑞文皇后の陵墓、附近一帯は公園地である。 地理卷二(8の二) 滿洲國 地理高一(1の二) 滿洲國 四、挿繪 (一六二頁)</p>
--	--	---	---

<p>奉天に着く 交通の要路 兵隊乗車す 滿洲の大平野 四平街に着く 公主嶺の話 農家の滿洲國旗 影がのびた 新京に迫る 兵隊さんもマルタも下車 大きく赤い夕日―母を思ふ 食堂車(母へ手紙) 眠くなる 三、ハルビン着 1、ハルビンに着く 2、叔父の出迎</p>	<p>○日が沈むところだ。……ばら色の細かい雲がたなびいた。(滿洲の夕陽の美しい描寫、滿洲國らしい色調に注意、又『大きくて赤くて上海蜜柑のやうだ』とは子供らしい眞に迫つた比喩である) ○それを見てゐたら、母を思ひ出した。……食堂車へ行つた。(子供らしさ) ○ロシヤ少女の給仕が……食事を運んでくれた。(國際列車らしい風景) ○さうして、時間表通り二十一時三十分、(二十四時間制を探つてゐることに注意) ○『やあ、よく來たね……』と、叔父の聲。僕の手はがつしりと握られてゐた。(冒頭の『僕は春休をハルビンの叔父の所へ』に照應してゐる。又『よく來たね』を二度も繰返して迎へる叔父の歡迎振り) ○眞冬のやうに……半月がさえかへつてゐた。(餘情深い終筆)</p>	<p>國務院 住宅 街路樹 舉手 上海蜜柑 食卓 がつしり</p>	<p>特急『あじあ』 (一六五頁) 望小山。 山上には村民が我が子を待ちわびつゝ、死んだ老母の靈を慰めるために立てた塔が見える。 (一六七頁) 遼陽の白塔。 高さ七十米、八角、十三塔のすばらしいもの。 (一六九頁) 公主嶺農事試験場。 (一七二頁) 新京の市街。 (一七三頁) ハルビンの市街。</p>
--	---	---	---

第二十七 御民われ

(全三時)

三月

要旨

和歌を鑑賞して、風雅な心情を陶冶し、且つその和歌によまれた國民精神を體得して、國民的信念を高める。

教材

奈良時代から現代へかけての最も代表的な和歌五首を選んで、これが解説と鑑賞とを平易簡潔に叙した文章で、和歌の内容は、各時代の感情を代表すると共に、これを綜合すれば、略々我が國民精神の展開を物語るものである。和歌は我が國民性に根ざして成長して來たものであるから、國民的至情の發露か、然らずんば必ず心ゆくまで自然を觀照した歡びの表現で、國民精神の反映そのものである。従つて本課は、卷九の『國語の力』と對照して重大な使命を持つものである。

文章 (口語體「和歌」批評的感想文)

文字及び語句

備

考

一、古代

1、和歌(海犬養宿禰岡鷹)

○御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば。(聖代に生をうけた皇國民の歡喜を極めて率直に歌ひ出したもので、萬葉集の歌の大きい力強い調子を代表してゐることに注意—海犬養宿禰岡鷹の作)

2、歌意

○久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん。

3、感想(新なる歡喜)

(古今集の歌の優美典雅な調子を代表してゐる—紀友則の作)

二、平安朝時代

○平安時代の太宮人たちは……都の春を楽しんだのであ

御民われ生けるしる

一、準備
源實朝、本居宣長、落合直文等の肖像畫
二、連絡
讀本卷九(28) 國語の力
國史上卷(9) 聖武天皇

1、和歌(紀友則)

2、歌意

つた。(優美な奥のかしい我が日本民族の國民性を禮讃してゐる)

3、感想(優美な國民性)

○箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ。(雄々しい調子)

三、鎌倉時代

1、源實朝の和歌

2、歌意と感想

○まことに此の人にふさはしい歌である。(儒學に心酔して我國體の尊さや本來の國民精神を忘れやうとした當時の風潮を慨いて古道にかへり、國體の眞髓をきはめんとした國學の第一人者本居宣長の歌として、壯烈絶大な大和魂をうたつた『敷島の』の歌はまことに此の人にして此の歌ありの感が深い)

四、江戸時代

1、本居宣長の和歌

2、歌意

○一つもて君を祝はん一つもて親を祝はん二もとある松

3、感想(宣長にふさはし)

(溫雅な氣品のある調子に注意)

江戶時代

『久方の……』
古今和歌集、紀友則の作
百人一首にある。
國史下卷(45) 本居宣長
國史高一(11) 奈良時代の學藝風俗

<p>い) 五、明治時代 1、落合直文の 和歌 2、歌意 3、感想(聲高 く讀みた い)</p>	<p>○新年において我等の……品よくよみ出されてゐる。 (忠孝一致がその根元をなしてゐる我が至大至美の國民 精神をよく表現した作意に注意する)</p>
<p>古事記傳 國民精神 ふさはしい 明治時代 門松 長壽 つゝましい 心</p>	<p>國史高一(15) 朝臣の榮 華と文化 〃 (22) 鎌倉時代 の文化 國史高二(41) 尊王論と 國學の勃興 讀本卷士(12) 古事記の 話</p>

T11442
13
1/54